

# 新しい家庭科

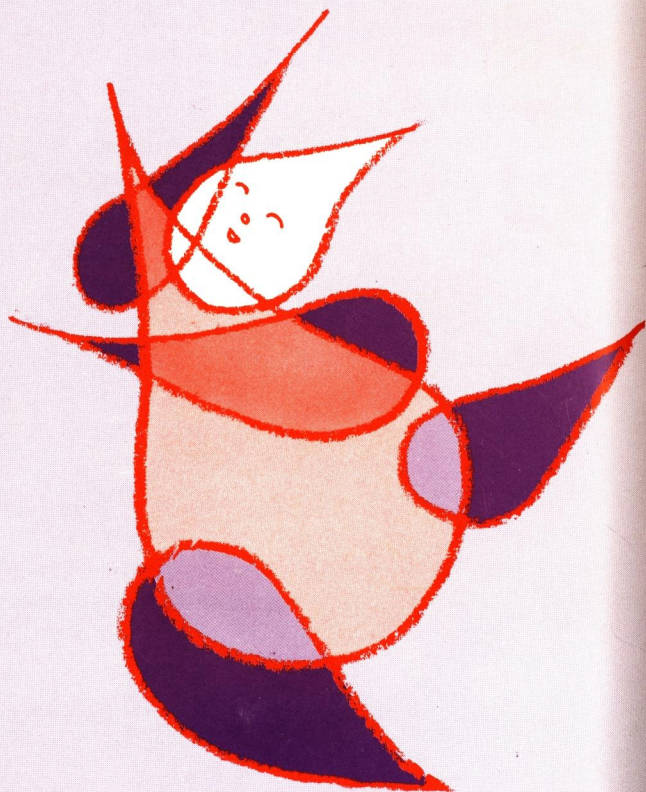
# ウイ

ウ

イ

12月号

家庭・家族



私の中の家族

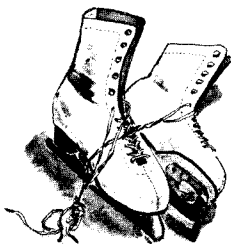
岡村 益

自分自身の生殖家族をもたない（まわりくどい表現かも？）私にとって、家族体験といえば、定位家族あるのみ。従って私の中の家族も、おのずと定位家族に限定される。

女学校2年か3年つまり、今の中学校2・3年頃のあるとき考えた。私の苗字もいつか変わるのだろうか、何と変わるのか、思いつく姓をならべてみたがどれもしっくりしない。そこで「お母さん、私、今の苗字が一番いいと思うから変わりたくない」と言ったら、母から父—さらに受持ちの女の先生にまで伝わってしまって、先生から「貴女は一生岡村姓を名乗りたいんですって!？」といわれ、びっくりするやら恥ずかしいやらで眼をぱちぱちさせたことがある。しかし、なぜ女だけ苗字変わるの？ そうした素朴な疑問があとで家族関係学を志す下地としてあったかも知れない。現代においてさえ、若い女子学生たちが唯々として、姓が変わることを望むのがむしろ私には不思議である。そんな私は「変わってるね」「女くさくない」とも「人間くさくない」とも言われたりする。

善良すぎて〇〇正直、お人よしで、現実の利害打算はそっちのけで、自分に可能かどうかよりも、なすべきかどうかで決定してしまう理想家肌、この性格は父から受けついだ。父はその母から受けついだらしい。「名もなく貧しく」そして清らかにが一番性に合っている。高村光太郎の詩「冬の言葉」の一節「一生を棒に振って人生に関与せよ」ということばが私は好きである。私も結局父と同じ生き方をしたことは、父の志を継いだようなものかも知れない。

（福島大学）



巻頭言 〈私の中の家族〉……………岡村 益

\* 家庭・家族

家庭・家族の昨日・今日・明日……………	山手 茂	2
結婚だけが唯一の人生なんて……………	久野 綾子	7
「家庭」ってなんだろう……………	増本 敏子	11
「家族」ってなんだろう……………	中村 美子	15
「ひとり歩きした男と女の関係」……………	その1……………石館 弘国	20
「ひとり歩きできない男と女の家	庭」……………その2……………大日向雅美	22
をめぐって……………	その3……………えんどうのぶお	24

\* 新しい家庭科を創るために

小学校では	つけ物……………	名取 弘文	26
中学校では	男女共学による自主編成 たん白質・脂質の 学習……………	中山 京子	32
高等学校では	授業の感想、家庭科学習の導入に新聞記事を 使って……………	寺島 紘子	38
大学では	家庭科における教師性の発達と教材づくり……………	柳 昌子	44

\* 発言 学習の主人公たち……………日野市立日野第二中学校生徒 56

教師のつぶやき	26日間の合宿を終えて……………	番場 春枝	58
市民として	優生保護法反対論……………	森 冬美	59
	私と夫と娘と……………	桜井 陽子	63
	重度障害者の叫び……………	山 鳩 の 会	64

\* 連載 視 点……………五感としての知識……………長谷川 孝 50

counselling 入門(現場から)	カウンセリング研修について(2)……………	児玉すみ子	52
We の読書室	女みずからのことばを……………	横山 雅子	68
テレビ残像	いつかたどる道……………	野村 康子	69
銀輪のうた	私のボランティア考……………	栗原 実抄	70
K子さんチのね子たち	ニセ父ちゃんミトラ……………	さとうけいこ	71
丙十舞雅里バラード	(8)……………	門野 晴子	55
波	日記から一三冊の本を読んで……………	半田たつ子	72

Weになんでも言おう なんでも聞こう 66/ Weの会だより 74/ 報告 19/  
わんしからあなたに 75/ あんてな 77/ 十字路 78/ "We" EDITOR'S NOTE 80  
表紙 馬場洋子

逐次刊行物

昭和 57.11.25 和

国立婦人教育会館  
情報図書室



## 家庭・家族

# 家庭・家族の昨日・今日・明日

山手 茂

はじめに

「家庭・家族の昨日・今日・明日」について考えようとするとき、まず問題になるのは、「明日」とはどのくらい先の「未来」を指すのか、ということである。家庭科教師が、「明日」について考える場合、子どもが成人し自らの家庭をつくる数年先または十数年先を中心にするのも大切であろう。しかし、本稿では二十一世紀初頭を中心に「明日」を考えたい。

「明日」を、近未来ではなく、やや遠い未来を中心に考えるのは、「高齢化社会」の問題が、家庭・家族にとって避けられない課題になっているからである。従来、「家庭・家族の明日」が論じられるとき、比較的若い人びとの「自立」が中心的テーマとされていた。しかし、高齢者にとっては「いつまで自立して生活することができるか」が深刻な問題になっている。

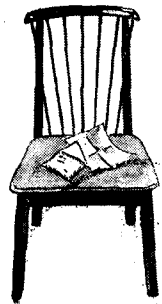
もちろん、自立して生活することが困難になった高齢者の世話は、「昨日」のように家庭・家族が全責任を負えばよい、というわけにはいかない。「明日」の家庭・家族は、社会と新しいかわりあいをつくり、高齢者・児童・障害者などの世話をする必要がある

になってくると予想される。本稿においては、「人間の福祉」を重視しながら、「家庭・家族と社会」の「昨日・今日・明日」について考えてみたい。

一、日本の家庭・家族の昨日・今日・明日  
日本の家庭・家族の昨日・今日・明日について考えるには、最近発表された経済審議会長期展望委員会国民生活小委員会報告『二〇〇〇年の日本（各論） 高齢化に対応した福祉社会の形成』<sup>(1)</sup>が、よい手がかりになる。

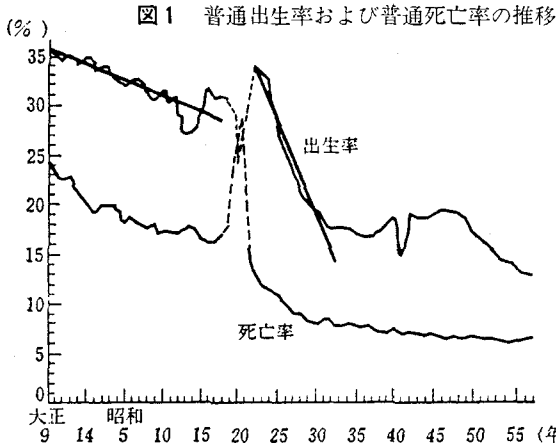
昭和三十年代から、出生率と死亡率の低下、寿命の延長、高齢人口の増加による高齢化の進展が問題化していたが、昭和四十八年の石油ショック以後は出生率が一段と低下し、高齢化が加速されている（次頁図1）。先進諸国と比較すると日本は、前例がない急速なテンポで高齢社会に移行すると予測されている（図2）。

また、類型別世帯数は、昭和五十年から五十五年の変化傾向をそのまま延長すると二十一世紀初頭には、単独世帯は五三八・三万世帯（一五・八％）から一〇五二・二万世帯（二三・四％）へ、母子世帯は一七四・六万世帯（五・一％）から二九二・五万世帯（六・



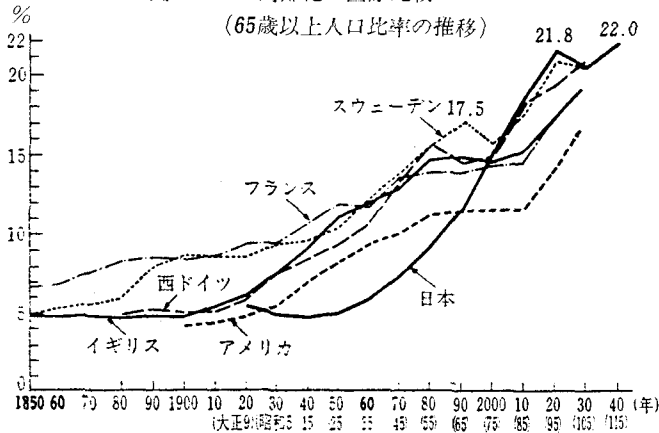
五％）へ、父子世帯は三〇・二万世帯（〇・九％）から四七・八万世帯（一・一％）へと、それぞれ絶対的にも相対的にも増加すると予測されている（四頁図3）。

このように高齢者（ひとり暮らし老人や老夫婦家族）が増加し、



(資料) 厚生省『人口動態統計』による。ただし、昭和19～21年は推計値で、UN. Demographic Yearbook. 1951. 所収のもの。

図2 人口高齢化の国際比較  
(65歳以上人口比率の推移)



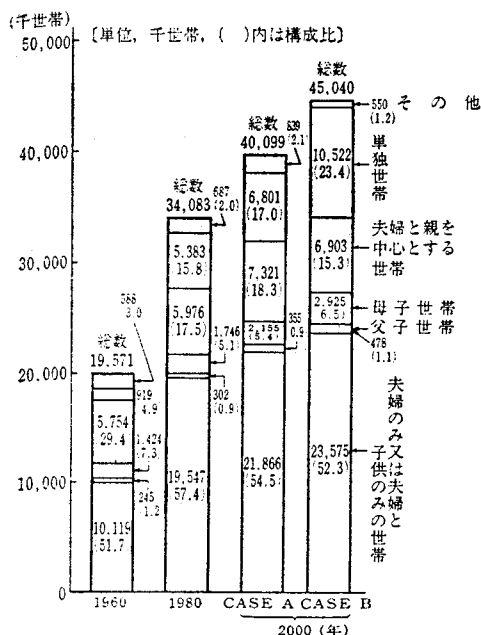
(資料) 外国の1970年までの人口は、U.N. The Aging of Populations and Its Economic and Social Implications. 1956. および U.N. Demographic Yearbook により、1990年以降の人口は、Demographic Indicators by Countries. As Assessed in 1980: Medium Variant による。1980年については、1976～78年の各国資料および国連資料を用いた。

(注) 日本の1980年までの人口は、『国勢調査』(ただし、80年は抽出速報集計結果)により、1980年以降は、厚生省人口問題研究所の『将来人口推計(昭和56.11)』の中位推計による。

片親家族が増加するに伴って、家族は生活保障機能・福祉機能を失うため、それを補う社会保障・社会福祉の拡充が必要になる。先進諸国は、いずれも高齢者の人口比率が高まるにつれて社会保障給付費を増額してきており、日本でも今後同様な変化が進むと予想される(五頁図4)。

社会保障給付費を増加させるには、国民は税金または社会保険料

図3 類型別世帯数の動き



(資料) 1960年は総理府「国勢調査」, 1980年は昭和55年国勢調査1%抽出速報より経済企画庁総合計画局計量班が推計したもの。

2000年 { ケースAは世帯帰属率を1980年実績推計値で固定した場合  
 ケースBは世帯帰属率を1975年から1980年への変化傾向をそのまま延長した場合。

を想定して、総合計画局計量班が推計したもの。

(注) 世帯帰属率とは性別・配偶関係別・年齢階級別にどのような割合で世帯類型に帰属するかを率

訴えている。  
 「女性は、生活のあらゆる場面で、家庭でも職場でも、病院、監獄そして産院でさえ差別を受けている。ロシアにおいては他ならぬ女性の「解放」が、女性の奴隸的な状態を、以前にも増して苛酷な

傷だ」と受取る人には、近刊の『女性とロシアソ連の女性解放運動』を一読されるようおすすめしたい。本書は、ソ連の地下出版雑誌の記事を集めたものであるが、女性問題と家庭・家族問題が今日でも依然として未解決であるばかりかむしろ深刻化していると

を負担しなければならぬため、先進諸国では貯蓄をはるかに上回る税金・社会保障を負担している。日本では貯蓄率が高いが、今後は「高福祉」のための「高負担」が避けられないと予想される(六頁図5)。  
 また、高齢者や児童の必要を満たす商品・サービスを提供する労働は、生産年齢の男性だけでは足りず、大部分の女性も労働者として働くことが必要になると予想される。

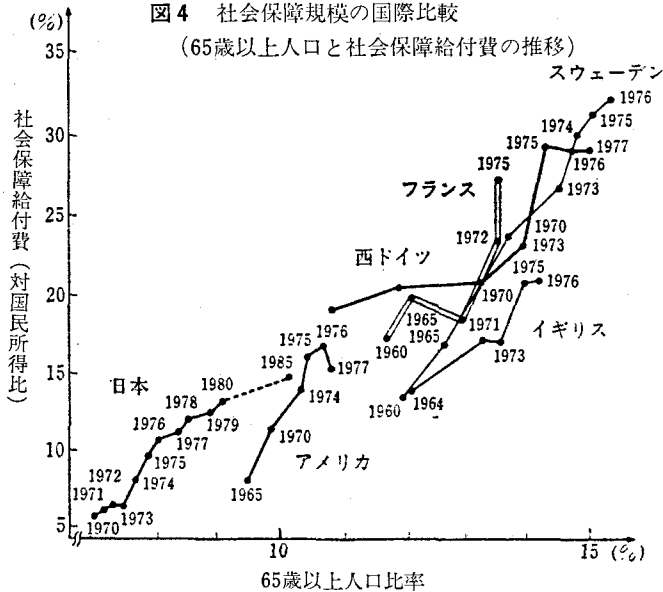
## 二、「社会主義社会」の家庭・家族

マルクス主義においては、資本主義社会は社会主義社会に必然的に移行し、そこではじめ家事・育児の社会化、婦人の解放、夫婦関

係の民主化が実現する、と説いてきた。しかし、フランスの社会学者、A・ミシユルは『家族と婚姻の社会学』において、最近の各国の調査研究の成果を総括して、次のように結論している。  
 「アメリカ合衆国や北欧においてこそ、家族関係、とくに婚姻関係を完全に再構成することをめざす新たなイデオロギーが現れ、ないしはよみがえっているのである。家事に釘付けされ、生存するために男性に従属する女性の疎外を告発したエンゲルスのもっとも優れた後継者が見出されるのは、アメリカ合衆国や北欧の型の社会である」。



図4 社会保障規模の国際比較  
(65歳以上人口と社会保障給付費の推移)



(資料) ILO "The cost of social security" UN "Demographic yearbook"  
OECD "National accounts of OECD countries"  
厚生省「社会保障給付費」等

- (注) 1. 社会保障給付費は ILO "The cost of social security" のうちの給  
付費 (benefits) を取った。  
2. 日本の1980年と1985年については社会保障移転の対国民所得比の数値  
であり、1985年は新経済社会7カ年計画で想定されている数値である。  
3. アメリカとイギリスは、社会保障給付費は会計年度、国民所得は暦年で  
ある。

日本の家庭・家族の「明日」を考えるには、現実の「社会主義社  
会」における家庭・家族は、反面教師としての役割しか果たして  
くれないようである。世界的視野で「明日」を予想するには、A・  
トフラーの『第三の波』の第17章「未来の家族」が、多くの示唆を  
与えてくれる。トフラーは、「核家族」は「第二  
の波」に適應した家族の理想型であり、「第三の  
波」によって解体化しつつあるとして、次のよう  
にのべている。

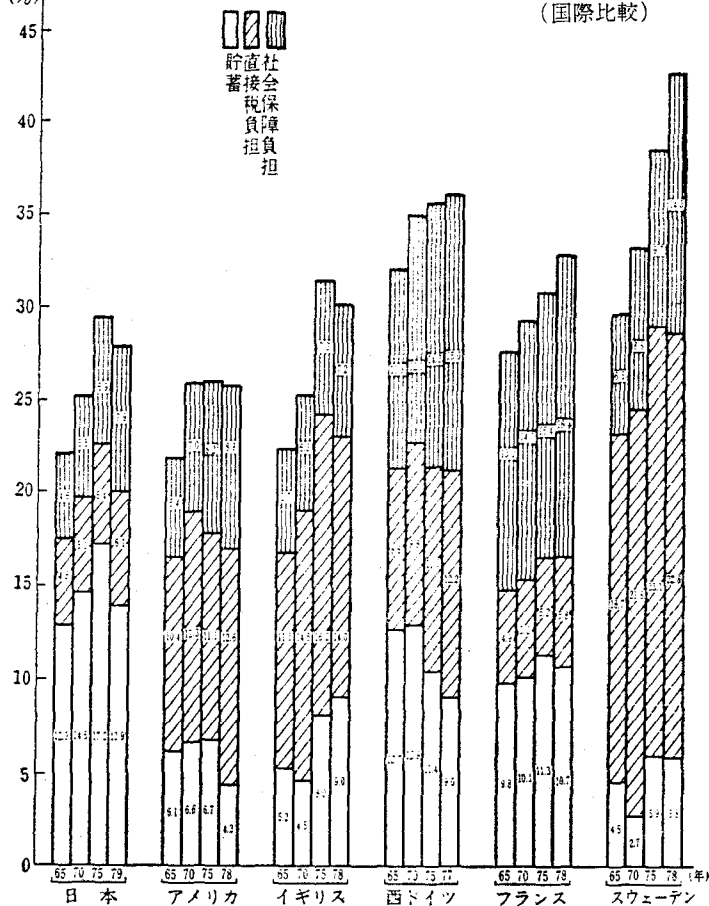
「あまり認識されていない事実だが、少なくと  
も第三の波が最も強くおしよせている米国で  
は、すでに古典的な核家族形態の外で生きてい  
る人間がほとんどである。夫が働き、妻が家事  
に従事し、子どもが二人ある家族を核家族と定  
義した場合、どれだけのアメリカ人がこの家族  
形態に該当するかと尋ねれば、その答えは驚く  
なかれ、全人口の七%にすぎない」。

新しい形をみると、単身生活者、同棲、子ども  
を持たない夫婦、片親家族、再婚家族など多様な  
家族形態が生み出されている。さらに、生産労働が、  
オフィスや工場から家庭に移動し、夫婦の役割分  
担も多様化している。夫婦の間では、「愛プラス  
良識・責任感・自己修練・その他労働に関連する  
美德」が求められるようになっていく。トフラー  
は、このような変化をまとめて、「新しい家族体  
系は、新しい技術体系や情報体系と軌を一にして

ものにしつつあるのだ。女性は、持てる限りの体力と精神力を振  
り絞ってようやく、工場での仕事と家事を両立させ、さらに子ど  
もたちを育てるという大役もこなしているのである」。

### 三、「第三の波」のなかの家庭・家族

図5 家計における貯蓄、租税負担、社会保障負担の割合 (国際比較)



(資料) OECD「National Accounts of OECD Countries 1980」, 経済企画庁「国民経済計算年報56年度版」

(注) 家計所得(受取)に対する比率である。

姿を現しつつある新しい社会体系の中核である」と結論している。  
 以上、最近の文献を手がかりにして、「家庭・家族の昨日・今日・明日」を検討してみた。「昨日から今日へ」の変化から「明日」が  
 おわりに

かなりの程度まで予想できる。しかし究極においては「明日」をどうするかは、「今日」私たちが決定すべきことだといえよう。高齢化や「第三の波」など、客観的条件の変化を的確に予想した上で、人間の「自立」「自己実現」「福祉」などの目標を達成するに適した家庭・家族の形態を創造したいものである。

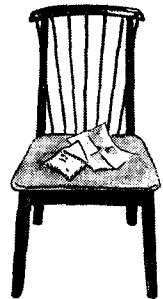
引用文献 (茨城大学)

- (1) 経済企画庁総合計画局編「二〇〇〇年の日本(各論) 高齢化に対応した福祉社会の形成」大蔵省印刷局、昭和五十七年
- (2) 『家族と婚姻の社会学』有地亨訳、法律文化社、昭和五十三年
- (3) T・マモーンヴァ、Y・ヴォズネセンスカヤ、片岡みい子編『女性とロシアーソ連の女性解放運動』亜紀書房、昭和五十七年
- (4) 『第三の波』徳岡孝夫監訳、中公文庫、昭和五十七年



# 結婚だけが唯一の人生なんて

久野 綾子



「早くお嫁に行かないと売れ残っちゃうよ。もらい手がなくなったらどうするの」と女たちはいわれ、「嫁さんもらってそろそろ身を固めるよ。独り身じゃ、だれも一人前に見てくれないぞ」と男たちはいわれる。適齢期の二十二、三歳以降、独りでいれば、女も男も何百回となくそういわれる。親、親類、友人、知人、当人を取り巻くあらゆる人たちからうんざりするほどいわれる。

「世間体が悪い」だの、「体に欠陥があるんじゃないかと変に勘ぐられるじゃないか」とも。世間一般は何がなんでも、だれかと一緒にさせてしまいたいものらしい。離婚や死別でひとりになっても、たちどころに再婚のおせっかいをやく人がいる。

おそらく、結婚している立場から独り者を見ると、なぜか我慢できなくなってくるのではないか。独身貴族——だれにも束縛されず、おカネも全部自分のもの。一人は自由でうらやましい！結婚している者にはない充実した世界があるなんてくやしい！自由気ままな人たちと悪戦苦闘中の家庭人が比較されるなんて許せない！

そんな気持ちに駆り立てられるのだろうか。独り者がいたらしゃにむに結婚を強要するか、結婚していない人を奇人変人呼ばわりすること、自らの結婚を正当化したいのかもしれない。

こんなこともある。結婚を人生と社会の欠くことのできない免許証と信じ込んでいる人たちにとって、同棲（どうせい）しているような不透明なカップルは、いやらしい不道德な存在になる。そんな人がいてもらっては近所迷惑と懸命に追い出し作戦。

私の職場に未婚の母となった人がいる。職場はハチの巣をつついた騒ぎ。四十、五十になる男たちがあーでもないこーでもないといっているのを聞いていて、ひょっとしたら男の存在価値を失ってしまうかもしれない事態に、うるたえているのではないかとさえ思った。かつては日陰者であった。今、堂々と未婚の母を名乗りあげるとはとんでもない反社会的行為だときめつける。ごく普通の女性夫婦の神聖な性のいとなみをはき違えて、子どもまで産むとは嘆かわしいことこの上なしという。

「普通の人」でありたい心理は、普通ではない存在を排除したいものらしい。

タブーとなつてゐるべきことには異常なまでに、厳しい目が向けられる。未婚の母や同棲、同性愛などの人たちに對し、徹底した拒否反応を示す。あたかも反社会的で乱れた行為といわんばかりに。それにひきかえ結婚は正当であり、ごく普通であり、社会一般が公に認めている。この価値ある結婚、すなわち普通の生活をなんとかしてでも守りたいのだろう。

ところが、普通の生活を維持していくために妻を家庭の中に閉じ込め、夫以外の性関係を禁止し、男たちはトルコやモーター、キーセンで買春。映画、キャバレー、エロ雑誌で商品化された女性をむさぼる。家庭を守るといふ美名のもとに、男たちは弁解の余地がないほど「性」生活を崩壊させている。この現実を、形が美化した結婚生活と指摘する知識人は少なくない。本来、セックスとは人と人が心とからだをきよい合わせ心身の高揚をもたらし、ともに生きていく喜びを分かち合うことではなかったのか。

男たちのこの上ない非人間的行為を許してきたのは、女を男に従属させたところ起因し、女を結婚という枠組みに閉じ込めてしまったところにある。いいかえると、私が普通の人でありたいとか、普通の結婚をしたい、普通の結婚を続けたいと思うことが、とどのつまり、男たちの野蛮行為を認めてしまうことになる。

こうしてみると、一九六〇年代末から七〇年にかけて「性」革命の視点から始まった女性解放運動は、性と生殖が人として生きていく上で、きわめて重要なことを存分に教えてくれた。女性差別、抑圧の元凶である「結婚」が徹底的に洗い直され、がんじがらめの「結

婚」に身を置く限り女性の解放はあり得ないこともわかつてきた。女性解放運動を通し、各種の差別、貧困、非人間的できごとなど社会矛盾が、結婚という形の中に押し込められていることも見えてきた。

ブス、売れ残りの、うまずめの、愛想づかしをくった、煮ても焼いても食えない女どもがと、女をいじめ尽くすことばを総動員して、女性解放運動を政府、財界、マスコミはこきおろした。もしこの運動が痛くもかゆくもなかったら無視してほっておくだろう。しかし、女たちの指摘はするどく真実を突いていたのである。女たちの主張は全国津々浦々に野火のごとく広がって浸透した。

この運動に触発されたかのように、自らの生き方を求め離婚する人、未婚の母になる人、同性愛を表明する人、複数の人たちと共同生活をはじめめる人、同棲や別居する人など、さまざまな生活者が現れた。彼らの出現は結婚を、セックスを、根底から問い直そうとしているだけに社会に与えた衝撃は大きい。結婚をよしとする普通の人たちはあらゆる手をつかって反発し、否定しようとするが、今なお少数者であっても、本当の生き方を求め、結婚ではない生活を選び取っていく人たちが着実に増えている。

一九七〇年女性解放運動に関心をもつ直前まで、私は女が差別され抑圧されているなどと思ったこともなく、むしろどんな場合にも男に従うのが女のしあわせと思っていた。女は三界に家なく、夫が浮気するのも仕事に失敗するのも、すべて妻の責任と父親にたたき込まれ、私はそう信じ切っていた。小さなきっかけから女の運動に興味を持ちはじめたものの、女はやっぱり弱く能力もないのだから、男の下にいるのがふさわしいと思っていた。何よりも普通の結

婚願望を抱き続けていることが雄弁に物語っている。

ひとくちに意識変革といっても、決して簡単にはいかないようである。女は男に頼って生きていくものと、骨のずいまで教え込まれてきて、突然男に頼らず自分で生きるのだといわれても、どうしたらいいのか全く見当もつかない。頭の中では男に頼らずやって行こうと意識的に思いきかせても、現実にはさまざまな形で男に頼っている自分に気づき驚いてしまう。

たとえば職場で、企画したり責任もってまとめねばならない仕事があったり、新しいことに挑戦するできことに直面したとき、なるべく私に当たらないよう、百歩譲ってもサブでいたいと念じる。もし私にお鉢が回りそうなら、能力がないとかよくわからないといって逃げようとする。こんなことも、食事の用意やお茶くみについても、男が手を出したりすると非常に恐縮する。女がやらねばならぬのに男の人に手伝っていただいて本当に申し訳ないと思ってしまう。女性解放のために男も家事をしようと、長年力説している私の無意識の世界はこの通り、まことに情ない限りのありさま。赤ん坊時代から普通の結婚をするよう育てられてきて、それはすべて間違っていたから内なる意識を変えるのだといっても、途方もなく難しいと痛感する。結婚が絶大な力をもって、私たちにおいかぶさっているせいもあるろう。

身近な生活の中に、どんな新しい感覚や洋風化、物質化がもたらされようと、戦後三十七年日本では一貫して、「結婚」はゆるぎない地位を守り、厳然として変わらない。

ここに興味深いデータがある。

そのひとつは離婚率。人口千人当たりの離婚件数＝離婚率は、一

九四五年一人、八〇年一・二人でこの間はほとんど増減がない。ちなみに他国の離婚率は六〇年以降急上昇し、七五年の数値を日本の一人と比べると、米五人、ソ連・スウェーデン三人、英・西独二人となっている(国連人口統計年鑑から)。一九七九年の十三か国価値観調査によれば、「別れたいと思っても子どもを第一に考え、離婚しない方が望ましい」と考える人は日本83%、伊・西独・仏60%代、豪・カナダ・米40%代、英30%代となっていて、意識の面でも日本と他の国では大きな違いがある。

いまひとつは未婚率。一九八〇年の国勢調査による全国平均の未婚率は、六〇～六四歳で男一・二%、女二・一%である(表1)。すなわち男の99%、女の98%が結婚経験者ということだ(五〇歳以上の女子の未婚率が男子より高いのは戦争のため、結婚したくとも結婚できなかった人たちが多いことを意味している)。十年前と比べ二〇歳代の未婚率がわずかに上昇しているが、三〇歳以降ほとんど変わらず、高学歴などによって初婚年齢が少し上がったにすぎない。全体として戦後、未婚率もほとんど変化がない。

日本人がいかに結婚志向が高く、離婚もせずがんばっているか、これらの数字が明白に示している。不思議なことに、しばしばこん

表1 1980年国勢調査の未婚率(%)

年齢	男	女
15~19	99.6	99.0
20~24	91.5	77.9
25~29	54.8	23.9
30~34	21.5	9.1
35~39	8.7	5.6
40~44	5.0	4.7
45~49	3.3	4.6
50~54	2.1	4.6
55~59	1.6	3.6
60~64	1.2	2.1
65~69	0.9	1.7
70~74	0.8	1.3
75~	0.7	0.8

なことを耳にする。「別れたいと思わない夫婦は一人もいない」と。ゆるぎないように見える結婚も、内実はもういのだらうか。

結婚以外の生き方を知らないために、こんな悲劇もある。私の両親は水と油。私が中学生になるころまで、別れる別れないを繰り返して別居もした。その二人の間にいい知れぬ暗い気持ちにおおわれ、二度とない孤独感を味わった。親子心中の危機にも直面し、明けても暮れても三六五日、不愉快極まりない緊張関係の中におかれた子どもは本当に哀れである。それでも両親そろっているからしあわせなのか。子どもながらに思った。夫婦がこんなにまでいがみあって一緒に暮らすなんて地獄だ。すると親はいう。子はかすがいと。子どもにかこつけて別れないのは、別れたらどっちの親も一人で生きるすべを知らないからだ。世間に顔向けできない、別れるんだったら死んだ方がまし、何のために今まで苦労してきたのか。両方が互いにもたれかかってやっと立っている感じである。子どもをだしに使い、夫婦はずたずたになってもなお「結婚」という形に踏みとどまっている。

結婚の内部がここまで崩壊していても、かろうじて結婚の形を保っているのは、結婚を絶対的価値があるものと思っているからだ。人は大人になったら一度は結婚しなくてはいけない、結婚もしない者は人ではないといわれてまで、結婚しない生き方をするのは容易ではない。

人でなしといわれないために結婚したり、家のため世間のため結婚したり、結婚という文字に縛られて別れたくとも別れないでいる状態となる。さらに、それを他人に押し付け「あなたもトシでしょ。ソロソロ行かなくちゃ」とか、別れようとしている二人を無理

矢理もとのサヤにおさめようとするのは、大きなお世話である。

世の中は目まぐるしく変化し、価値観は多様化してきた。木の文化から石油・原子力の文化へ、手づくりからコンピュータへ移り、思考・行動様式とも変わりつつある。その中であって、問題をはらんでいる結婚だけが例外である訳がない。遅かれ早かれ必ず変わらざるを得ない。私たちは常に「普通の人」でありたいと思い、結婚にこだわりの続けてきた。外部の変化には対応できても内なる意識はなかなか変わらない。しかし、結婚だけが唯一の生き方であるという考えはもうやめたい。

自分自身に正直な生き方を実行することから始めるのもいい。女だけの犠牲に基づいた結婚でなく、互いに無理のない共有関係をつくってほしい。あるいは、結婚でない生き方、同棲、離婚、ひとり暮らし、別居、同性愛、未婚の母、未婚の父などの生き方を頭ごなしに否定しないで、長い、温かい目で見ながら、自分の人生を問い直してみるのもいい。結婚以外にも、いっぱいすばらしい生き方があるということを知るだけでもいい。

(「おんなの叛逆」編集者)

## 家庭・家族

# “家庭” つてなんだろう

増本 敏子

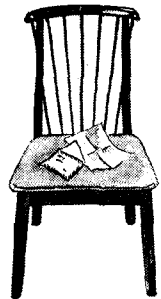
妻がめざめるとき

三年程前のことになるが、ある工場主の奥さんが思春期の娘たちを連れて夫のもとを出てしまい、困り果てた夫から相談を受けたことがある。よりがもどる可能性があるかどうか、その夫婦の先輩にあたる同業者の奥さんに意見を求めたところ、六十歳近い同業者夫人曰く、「Aさんは結局のところめざめられたんですよ。大病をして人生をふり返ってみて決心したと言っていました。どっちも悪い人じゃないし、仲の良いご夫婦だったけれど、あの聡明な奥さんがこうと決めた以上もうだめですよ」。田舎と言ってよい地方都市のこの夫人の言葉に、私はああ、日本でももうこういう言い方、考え方が浸透してきたのかという感慨を抱いたものだった。

Aさんの夫は、自分の腕一つで生きてきた自営業者にありがちなタイプで、善良そうで十分に計算高く、家族思いである反面、利己主義といった平均的日本人男性であった。Aさんは夫よりはるかに知

的要求が高く、夫の仕事を手伝っても夫以上の能力を示したが、幼いころからのしつけどおり、男の力がなければ生きられないと思って、望みを下げて妥協的な結婚をし、結婚した以上はひたすら夫をたてて生活してきたという。大病をしてあと何年生きられるかと思ったとき、つくづく自分の半生をふり返って淋しくなり、その後ちょっとした夫婦げんかをきっかけに、夫のずるさや時折のトルコぶる通いや買春旅行を妻にさえ自慢するような無神経さ、水準の低さなどがぞっとするほど嫌になってしまったとのことであった。彼女の夫にしてみれば、何一つ悪いことはしていないのにと大変な立腹である。親兄弟も、二十年がまんできたものがなせもう少しがまんできないのか、頭がおかしくなったのか、男でもできたのかと彼女を追求したが、もはやひきもどすことはできなかった。

たしかに中高年の人間がこういう鬱々たる気持になるのは一種の更年期症状ということもできる。男性の場合も、五十歳近くになって人生の先が見えてしまったころ、妻の顔をみるのが嫌になり、寝て



いる妻をふんづけたり、昔自分の才能が押さえこまれて芽を出さなかったのは、この妻の妨害のせいだったと訴えたりという人がいる。こういう男性は、たいてい一見大人しい紳士である。Aさんあまりに貞淑なよくできた妻であった。本当は十分意欲もあり能力もあるのに、自分は表に出ず、夫によってそれを実現しようとした。しかし夫といえども別の人間であり、思い通りに動かそうとする方が間違っている。何となく妻の期待が重荷で、自分の程度に合った息ぬきがしたくもなる。それに、人は他人につくすことも大切だけれど、男女にかかわりなく、自分という自我を精一杯生かす人生を生きなければ決して満足できないものであり、自分を見失って身も心もむしばまれてしまうものである。

中年の妻が「めざめた」というのは、子育てが一段落してほっと一息ついたとき、このことに思いいたり、おそまきながら自我にめざめた状態をいうようである。

### 自立することと共に生きること

ところで、自分自身を生かして精一杯生きようとするとき、家庭をもつということは、その生き方を支えるものなのか、それとも足をひっぱるものなのだろうか。又Aさんの場合のようにすでに家庭を持っているとき、自分に忠実に生きるためには家庭をすて去るか道がないのであろうか。それともがまんしてこれを持ちこえるのが、いったん家庭をもった者に課せられた責務なのであろうか。これらは大変な難問である。

最近、自立した男女がそれぞれ別世帯を持ち、時々交流する形で営む結婚生活が理想的であるとの意見もきかれるし、子供をぬき

にして考えるとそれが一番良いようにも思われる。誰にもふみこませない心の城をもつことはとても大切なことだし、日常生活を共にしているとそれが崩される場合が多いのは事実である。又、家事育児の他に夫の世話まで妻の肩にのしかかっている日本の現状では、妻にとっては経済的に自立さえできれば、夫と離れてくらしの方がずっと労力のはぶけることになる。

とはいうものの、一人で生まれ一人で死ぬ運命にありながら、人は決して一人では生きられない。喜びも悲しみも人間関係の中にあると言い切れるほど、人は他人に依存して生きている。特に男女の間に子が生まれて人類が存続するのであるから、男女が互いに惹かれあうのは自然の摂理である。「連れ合い」という言葉のとおり、男女が家庭をつくり、寄りそい相補い合って生きるのは、最も自然な形のようにも思われる。二人の間に子どもがいる場合はもちろんのこと、子どものない男女であっても、カラオケでも人気のある「おまえに」という歌の「そばにいてくれるだけでいい」という言葉のとおり、長い人生を寄りそう姿には感動をさそうものがある。そしてこれこそ夫婦であり、家庭という場なのだという気もする。それでいて、日常的な夫婦・家庭の場では、こういう風に感じることはまれなのではなからうか。これはすっかり人生に弱気になった場合など特殊なとき、あるいは世間に背をむけた男女の間での感情ではないかなどの疑問が浮かんでくる。家庭が夫婦の人間的な結びつきの場でなく、単なる生活のための便宜の場と化している例が多すぎるせいであらうか。

自立した人間同士が、互いに相手を支配したり束縛したりすることなく寄りそって生きてゆけるものなら、これにまさる幸福はない

だろう。しかもそれだけの愛情と信頼が永續するならばすばらしい。しかし、夫婦・家族といえども、共同生活をつづけてゆくのは知恵も努力も単身のとき以上に必要であり、強い者が弱い者をふみつけにせず共同生活を行うことはなかなかむづかしい。そしてこれを何十年もつづけるには、相当な熱情が必要である。更に男女の愛には、世間から公認され互いに責任や義務感を伴った夫婦という関係になったときに、神秘的・魅惑的な色彩を急速に失うという面がある。結婚当初の熱情を失った愛の残照を少しでも長つづきさせ、更に深い人間愛を育ててゆくには、たとえば子どもの養育というような困難な仕事を協力してやりこなしていくこと、相手をまるごと理解しようと努力し許容していくこと、世界の中、社会の中での自分たちの位置と方向をはっきり知ること、等々が必要である。とにかく自立しながら共に生きることがなかなかむづかしい、大人としての力、本当の教養といったものが必要のように思う。

### 男女のすれ違い——性について——

家庭の核になるものは、やはり夫婦関係である。夫婦の人間関係の有様がその家庭の性格を決定している。そこで夫婦の問題の重大ポイントの一つである性の問題について考えてみたい。

家庭をすて去るまでに夫婦関係が崩れるとき、そこまでに至る間には長期間にわたる夫婦の性の不一致が横たわっていることが多い。女は受動的に行動するようしつけられてきている結果、性を自分でコントロールすることができず、性生活において受け身であり、男の都合にひきずりまわされることが多い。結婚の前後にかかわらず、男の欲望に敏感に答える女が良い女であるかのように宣伝

され、性の技巧のみマスコミなどでとりあげられているが、いつの場合もそれは男性本位の発想によるものである。女はどういう性生活において満足を得るのか、女自らが男の発想による説明を真実と誤解していることが多い。

さまざまな例を身近にみて私が思うのは、女は男以上に情緒的であり、愛情面においては特に深い感情の起伏をもっているという点である。女にとっては心の充足と性の満足は表裏一体である。男と違って女は、形の上では努力すれぱいつでも相手を受け入れることができるか、心のふれあいや好きだという感情なしには決して満足することはできない。そして満足できない場合には、冷え冷えとした憎しみが尾をひいて残るのみである。ただ長年にわたるしつけと習慣から、本人がこれを自覚することはむしろ少ないので、無意識の中にこの感情が押しこめられ、夫や家族に対していじわるな女、口うるさい女となつて仕返しをするのである。そして、夫の軽い浮気やトルコがよい、買春旅行など、表面的にはものわりのよい妻として笑つてすませている事柄が、本当のところ嫌でたまらず、心を深く傷つけており、性の満足をも阻害している事実に妻自身気付いていない。

結婚した女にとって性生活は義務であるなど考えるのではなく、女が嫌なことは嫌だとはっきり言わなければ決して男にはわからないのだから、積極的に主張した方がよいのである。そうでないと、男は性の技術さえ上手ならば女を満足させうるのだと本気で信ずるような男が多数を占めてしまう。女の本質を夫に伝え、愛情生活の何たるかを知らせることのできる妻がふえれば、世の中はずいぶん変わると思う。



もう一つ男女の性について思うのは、夫との間にもつことのできぬ心の交流を、パート労働の勤務先などで知り合った男の中に求めて、いとも簡単にモータールにでかけたり、かけ落ちしたりという妻がふえていることについてである。この場合彼女が求めているのは、肉体の満足ではなく、たくさんの重荷を背負った日常生活からの逃避であり、自分の存在価値を自覚させてくれる暖かい人間的な交流である。一見平穏であっても、実際は心の通いあわぬ夫との性生活に比して、新しい男との恋は、彼女に心の琴線にあれる性生活を予想させるのだが、いずれ、男の感情はもっと単純な欲望の満足だけであったことに気付くのである。こういう時こそ女は、男を責め非難するより先に、自分の心の底にある感情を見ぬき、男と女の性の違いを知り、愛情関係において男をリードできないものだろうか。性の開放が宣伝される時代であるだけに、これからの女は真に自立し、聡明でありたいものだと思う。

#### 家庭の中の子ども

家庭の中で、夫婦に次ぐ重大な地位を占めるのは子どもである。「子どもさえいなければ別れるのに」「この子を片親にしたくないのでがまんしてきました」などといつも夫婦げんかの引き合いに出される子ども。日本のように親子のきずな強い国では、結婚は子どもを得るための手段であり、子どもを育てることが夫婦の愛情に先行する家庭も多い。

幼い子は自活能力がなく、大人に依存して生きているので、おどろくほど保守的な面がある。環境の変化や父母のけんかが恐しく不安である。夫婦げんかの中でびくびくしながら育った子ども、生ま

れる前から夫婦仲が悪くそれゆえ親から愛されない子ども、などは人格上大きな問題をかかえて育ってゆく。子どもは親を選べず、環境から逃げだすこともできないのだから、人の子の親となった以上は、夫婦は仲よく暮らしてほしい。離婚事件のはざまでゆれる子どもたちの姿をみていて、つくづくそう思う。

しかし、運悪くどうしようもないほど仲の悪い夫婦であったなら、お互いに愛情も尊敬の念も持てず、憎しみ合う夫婦であったなら、そのときは一刻も早く離婚した方が、子どものためになる場合が多い。子どもは偽善には敏感であり、幼い子であっても、母の不幸には打ちひしがれる。母親が生き生きと自信をもって生きている姿をみるのが、幼い子には何よりの生きる支えとなる。表面だけをつくらった父母でなく、正直に人生に立ちむかう父母の姿が子どもに生きていく力をうえつける。

子どもを抱えての離婚は経済的に不安であるからと、偽りの夫婦生活に耐えている母親、子を育てるために経済的な生活の便宜だけのために子連れで再婚をする母親、子どものためというのは口実で、自分で人生を切り開く勇氣がない場合が多いのは残念なことである。真に子どものためを思うならば、女も自分の力で自分の人生を歩もう。母親が能力を開花させて社会の発展に役立とうとし、父親もこれに呼応して家庭責任を分担するような家庭ならば、子どもはごく自然に人を愛すること、人生を肯定することを身につけるものである。そして子どもは、青年期には育った家庭から元氣よく、いさぎよく飛び立っていかなければならない。いつまでも巣立てないような青年を育てているとしたら、その家庭は子どもを育てることで辛うじて維持されてきたといえるのではないだろうか。(弁護士)

## 家庭・家族

# “家族” つてなんだろう

中村 美子



「訪問者」と「メッシュ」というマンガの事から書き始めたい。これは萩尾望都さんが一九八〇年の上半期にたて続けに発表した長編マンガだが、著者あとがきによると「訪問者」は、両親から漫画家をやめるように強く言われていた著者が「何故たいていのことを犠牲にしても漫画を描いていきたいかを、両親に理解できるように説明できなかった」当時の自分の悩みが反映されているとのことである。この二つのマンガは設定が非常に似た点があり、わずか半年の間の連作という点を考えてみても、作者にはよほど書きたいテーマだったと思われる。

「訪問者」の方は、「トーマの心臓」の登場人物の一人、オスカー・ライザーの子供時代を描いたものであり、「メッシュ」は金髪なのに頭の両脇が銀髪の二毛色のため、メッシュというあだ名で呼ばれるちんびらの話であるが、二人の少年は自分を父の愛を受ける資格に欠け、父に憎まれていると感じている。一方、父親たちは妻の浮気から息子の出自を疑っており、息子を抱きしめることができない。

い。オスカーの母は父に銃殺されるし、メッシュの母はよその男と駆け落ちする。二人の少年は、物理的にも心理的にも母を強奪されており、家族は父親しか残されていない。彼らはおずおずと父の肩に触れるが、その手はあるいは邪険に、あるいはそっとふり払われる。この二つのマンガは、頁を繰るごとに「愛してくれ、愛してくれ」という声が聞こえてくるような、不幸な家族の、不幸な父と子の物語であるが、父の不幸は息子の出生の時から始まり、息子の不幸は他でもない、この父の子として生まれたことから始まるのである。

おおかたの夫婦では子供が家族の一員として加わるにより、その結果は強さをいや増し共同体としてより堅固になると、常識は教えてきた。夫婦は子をもって初めて運命共同体となるのであって「子はいかがい」とはその所を言うのだろう。夫婦は性的結合を基礎とした共同体であるが、そこに性的結合から生じた子供という異分子の参加があると、夫婦の関係は変容を迫られる。女房が子供

の世話にかかりきりになるため、ほったらかしにされた亭主が、「子供と俺とどっちが大事だ」とダダをこねるなどというのは、その変容の、いかにも甘ったるいのどかな現れ方であるが、子の父が誰かという疑いがある場合には、「子はかすがい」などと悠長なことは言っておられない。かすがい役にはミスカストだった子供は、夫婦のいさかいに巻き込まれて満身創痍を呈する。

——しかしオスカーやメッシュの不幸の源泉がこうした異常な家族関係や、犯罪者としての父にあるとは私には考えにくい。

「メッシュ」にはギリシャ神話の「サトゥルヌス」を題材とした、父親が大きく口をあけて息子を食っているゴヤの絵が小道具として効果的に使われているが、昔話や神話というものが人間の心の深層を拡大して見せてくれるものだと思えば、ごく平凡な家族の内にも、親が子を食べ、子が親を食いちらす文字通り骨肉相食む姿がほのかに見えるはずである。少年の父たちの異常さは、家族が本質的に内包している暴力性が、むきだしの形で現れるのを助長しているにすぎない。これを、「親と子の永遠の相克」などと言えども何もかもわかったような気分になるが、一方で「焼野の雉 夜の鶴」という親の子想う真情をうたうレトリックにも、私たちは簡単に酔う体質がある。

大雑把に言えば、そうした家族の持つ毒、やりきれなさに敏感で、家族に対し攻撃ののろしを上げるのは、未だ親にならぬ人たちであって、一度人の親になってしまうと、そうしたことには鈍感になり、むしろ子供がいかに自分にとって重要な存在であるかということ、ことあるごとに噛みしめるのに忙しいように思われる。けれども、子の側は、親のそうした湿っぽい情緒を痛快に蹴とばして

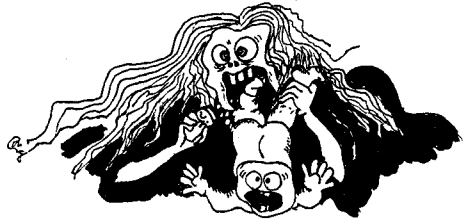
くれる。

「親の心、子殺し」、これは数年前の少年マガジンの読者欄に投稿された諺パロディであるが、「親の心、子知らず」という親の側の押しつけがましい言い分への、見事に痛烈なしっぺ返しである。しかし、こういうイキのいい子だけとは限らず、親の発する毒もなかなか強いので、私は子供に同情の念を禁じえないのである。

ところで私はこれまで「家族って何だろう」というタイトルのもとに、親と子の関係についてのみページをさいてきた。それは一つには、日本の世帯数の60〜70%を占める核家族という形態では、親と子の問題が焦点になるのは当然ということであるが、更にもう一つ、私の一人よがりな理由として、「家族」は子の誕生をもってはじめて家族の名に値するという思い込みがある。

第三者に「私の家族は……」と語る時、夫婦二人きりの時にはこういう物いいは何かそぐわない。子供ができるとやっと「私の家族は」という切り出し方が板についてくる。今たわむれにかたわらの小型辞書を引いてみると、三省堂版では「同じ家に住む親子・兄弟とあり、岩波版では「同じ家に住み生活を共にする血縁の人々」とある。つまり家族というのは、血縁のタテ、又はヨコの関係を言うのであって、私の配偶者は私にとって、親でも兄弟でも、はたまた血縁の人でもない赤の他人なものだから、私の「家族」と呼べないことになる。要するに私の独断と偏見によれば、「家族」成立のためのミニマム・ナンバーは3（夫婦＋子供一人）であり、必要十分条件は子供の存在なのである。

私は先に、子供にとって何らかの暴力的影響を与えることを免れる家族はないことを、いささか性急に書いたけれども、親にとって



子食いの図

よ

は不快なこのことは吐くに至った私的な事情というのを書いてみたい。

私は婚姻生活十有余年を過ごしてきたが子供はいない。コモタズ（私の生まれた地方では、子供のない女をこう呼ぶのである）に何がわかるかという声が今にでも聞こえてきそうであるがちょっと待ってほしい。恋を知らない少年・少女は恋愛論をかわしたが、未婚の子弟・子女は結婚論をぶちたがる。いずれもほほえましいが、本音を言えは聞いていてあほらしい。コモタズの家族論もそういう評価を受けるのだろうが、コモタズにも三分の屁理屈というものがある。おっしゃる通り、子供を持たねばわからぬことは世の中に多いだろうが、子供を持ったために見えなくなることも世の中には多い。その一つは、ヒトは自分の都合で子供を生む、ということである。

子供のない夫婦、それも「正当な」理由なく子を持つとうとしない夫婦は、世間様には大変気障る存在らしく、「どうして子供を生まないのか」という質問とおせっかいともつかぬものと私は長くつきあわされてきた。それはほととイヤ気のさす経験であったが、繰り返されるイヤ気の中で、石女と呼ばれる人たちの嘆きの一端をのぞくことがあり、又、「生め」という説得が常に産む側にと

っての利益（老後の不安、夫婦の安定と慰安等々）をタテになされることも知った。

人はいていのことは自分の得になるからやるのであって、子供を生むというのもその例外ではない。亭主のためにとか、子供のためにとか、人類のためにとか、あるいは出来てしまったので仕方なくと言いつの種はつきぬが、仕方がないことはなく、自分の健康をいささか（多少の運・不運はあるが）犠牲にすれば、宿った生命は抹消できる。

このことは、ヒトの側に、特にオンナの側にもっと反省の色があってもよからうと思われる。

ある女の人は、「子供なんていない方がよい。子供なんて生むんじゃなかった」と私に語ったが、それはコモタズへの社交辞礼もあるだろうが、ほどほどの本音は含まれているように私には感じられた。こういう言葉は私の耳には大変不快に響く。「自分の都合で生んでおいて今さら生まなきゃよかったはないでしよう。それは子供に対して渡世の義理を欠くことですよ」と私はつぶやくのである。

ヒトはあやまちと後悔なしに人生を送ることはできないが、言ってはならないセリフもいくつかあるはずで、たとえ子供の前で語られなくても、子供は確実に傷ついているように思われる。

たいていの子供は、一度や二度は「頼みもしないのにどうして生んだのか」と親に迫るのを常とするが、この言い分に勝てる親の側の論理があるうとはとうい思われぬ。私の場合は、インテリとは無縁の母の常識でもって「産んでやったのをありがたく思えっ」と大喝されたので、幼きニヒリストとしてはすこすこ退散するしかったのは、今に至るも残念なことである。

家族というのは血によって結ばれたタテとヨコの人間関係を包括したものだ。そしてその血の結ばれは永続的かつ宿命的である。

永続的だというのは、夫婦というのは離婚によって赤の他人にもどることができなければならない、親子兄弟の関係の解消はできないからである。

宿命的というのは、子供にとって出生するか否かの選択は不可能であるばかりでなく、どの親の下に生まれてくるかという事も選択できないことをさす。親にとっても子供を選べないという事情は同じであるが、少なくとも二十世紀の人間には、親になるか否かは可能な選択である。成人して己れの意志と目算で選んだ配偶者でも、共同生活が円滑にゆくのは難しく、はずれたアテの方がはるかに多いのは世帯もちの実感であるが、互いに相棒を選ぶ余地のない家族集団の場合、事態ははるかに困難のはずだ。しかし実際は、大いなる家族はまずまず破綻から免れている。それは新参者の子供は、白紙に近いバーソナリティでやってくるため順応が容易なおかげであって、血縁の万能を証明するものではない。

ケモノは外敵から子供を守るために自分の生命も賭すが、子供が成人したあとは実にそっけないものである。ヒトはそれを指して「やはり畜生だ」と嘲笑するが、その笑いが万物の霊長たる人間の文明と文化の証しだとすれば、文明とは実にわずらわしいものである。

ケモノの子供への冷淡さは、ヒトの家族の息苦しさ比べて私にはさわやかなものと思われる。

こういう話を昔、私はつれあいに聞いた。

学生時代の下宿先のオジサンが酒を飲みにつれていって酔

っていることには、「男なんて子供が自分のタネかどうか確める術がないから哀れなもんだ。女房に『これはあんたの子』と言われたら『ハイそうですか』と言うしかない。あそこの子、ここの子と言ってもどこからどこまで本当やら。だから俺の子もひとの子もない。子供は皆のもの、そう思って可愛いがらないかん」。私はこの話に感動した。息子が自分の畜であることを確認できないことは男をニヒリズムに誘う。それは、オスカーやメッシュの父たちのように、息子を抱きしめるのを邪魔するだらう。しかしオジサンはそのニヒリズムの故に、親としてではなくただの大人として子供の横に立とうとしたのである。

「私は一夫多妻という言葉をもっている、一子多母制・一子多父制という事を考え出し、血による因縁関係ではない、自分の『選びだした』新しい関係を考えています。そして親の側にも『子はわがもの』という考え方に執着しすぎぬよう、こうした転生譚（少年Aが生れかわって少年Bとなったという伝承）を読むことをおすすめしたいと思います」。これは寺山修二の「家出論」の一節であるが、オジサンの言葉が親の側から家族の永続性と宿命性を撃ったのに対し、これは子供の側から投げられた石つぶてである。どちらも虚構である。親も子も、なぜ自分が手塩にかけて育てたか、育てられたかではなく、血の純正にこだわらずにいられないのか。このこだわりの分子生物学の発達の前には意味を失う時代もやがて来るのかもしれないが、今の今の親と子にとっては越えがたい峰である。一子多親制はそうしたヒトの矮小さの上にすえた苦い虚構であり、「人類は皆兄弟」というオプティミズムの対極にあるものと私には思われる。男は自分の子と信じるためには妻の性的誠実にながらなけれ

ばならない。だから男は、骨肉の情に陶醉するのは時にシラケルこともあり、その結果、親子関係のとらえ方において、オトコや子のないオンナはよりラジカルに観念的になりやすく、こうした虚構を取り込み易いのだろう。

私の好きな深沢七郎さんは「自伝ところどころ」で、「人間は誰でも屁と同じように生れたのだ」と書いている。「一組の男女で子供を一人しか生まなければ一億の人間は一代に五千万になる」のだから、「四人の子持」は、「前科十五犯か二十犯ぐらいの悪い奴だ」とも書いている。私はこれを読んだ時、下宿のオジサンの話と同じくらい感動した。オジサンの言葉には、子を持った男の苦さと悲しみがあり、「訪問者」は少年の涙でしとどにぬれている。いずれも私にとっては同一性を持ちやすいセンチメンタルな世界である。

しかし深沢さんのことばは、生む・生まれるということへの詠嘆と思入れが全くない所がすごいのである。しかしこういう達人も、若いころ遺書を残して家出したことがあって、その遺書には、一、この世に生まれてきて損をした 一、勝手に子供を生んでいい迷惑だ 一、子供は親のおもちゃだ とかを箇条書に書いたというのだから「屁の如く生まれ死ぬ」という境地も一日にして成ったわけではないらしい。

ところでこの深沢さんのことばを、世の親御さんはどのようにお感じになるのだろうか。

(言語訓練士)

## ☆☆報告——“共に”とは☆☆

10月23日、24日の臨床心理学会のシンポジウムに参加した。

精神病院における“治療”とは、する側が常に有利に立つ。その差別構造の中で、ほんとうにする側とされる側のつき合、ささえ合いが成り立つのだからかとの問いかけがあった。

枚方市の障害児教育について話された宮崎隆太郎氏（枚方第二小学校）の報告が心に残る。

障害児も地域の普通学校へという取り組みが数多く行われ、健常児が障害児とかかわる中での変貌が市の研究会などで次々と発表される。

しかし、健常児と障害児とのかかわりの中ですばらしい集団を作った子供たちなのに、学年が変わったり、中学校に入ったりするともう続かない。眼が合ってもブイとし、あいさつもしない現実という。

教師がいくら子供たちに、大人になっても障害者と一緒にくらしたいと言ってもダメ。教師との関係だって同じやないか”と子供たちがつきつめた時”そんなにかかわってられない”という教師のホンネを見抜いているからではないかという。

改めて“共に”を考えた。

障害児と共に、障害児のために、障害児とつき合う、という言葉の中に、見た目に障害をもたない者のおごり、有利性があり、見た目に障害をもたないものの生き方の押しつけがないだろうか。

眼が合ってもブイは、このおかしさを感じとった子供たちの自己表現なのか。

“共に”ではなく“どの子も”から始まる気がする。

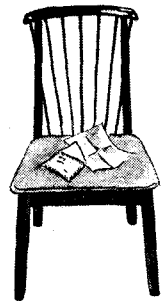
(馬場洋子)

## 家庭・家族

“ひとり歩きした男と女の関係”  
ひとり歩きできない男と女の家庭”  
をめぐって

その1

石館 弘国



創刊号の宮さんの文を読ませてもらってまず感じたことは、ひとり歩きした男と女の関係は、結婚した男女の間にはあり得ないのか? ということでした。私自身は制度としての結婚が必ずしも男と女の自立を妨げるものではないと考えております。私の友人には、いわゆる性別役割分業などつき抜けた夫婦関係を結んでいる人……身辺処理能力にもすぐれ、子育て、食事、洗濯などの家事処理をやりこなしながら働いている尊敬すべき男性が何人かおります。互いに相手を人間として丸ごと認めあった男と女は、たとえ結婚していても充分に相手を高めあい、ささえ合うことが出来るでしょう。誤解を受けるといけませんのでつけ加えておきますが、私は何も結婚をすすめている訳ではなく、ひとり歩きした男女は、結婚してもうまくやって行けるはずだと言っているのです。

ところで、「ひとり歩き」あるいは「自立」と言っても良いのですが、この言葉は、人間のどういう状態をさすのでしょうか。生活レベルに即して言えば、経済的能力、生活能力、社会的能力などをさすでしょうが、大きくは、精神的に自立し、一人一人が自己の哲学を持つことになるかと私は思います。このことに男女差などあるうはずがありません。自立するとは、まさに十分に発達した人

間、一人一人が小宇宙を形成するようになるということであり、教育はまさにそのためになされる壮大な事業であると言っても良いでしょう。終局的には「男の自立」「女の自立」などといったものはなく、あるのは「人間の自立」だろうと思うのですが、現実的には、日本の社会にあるあらゆる男女間の差別が「男の自立」も「女の自立」も困難にしているのだと思います。男である私の立場から言いますと、男が自立するにはこれまで日本の社会で伝統的に言われて来た「男らしさ」をいったん捨てさらねばならないと考えます。「男らしさ」は常に他者、特に弱者への抑圧・差別を内にはらんだ構造を持っていますし、弱者への抑圧の上には、いかなる自立もあり得ないからです。

「女の自立」を考える場合、職業選択の自由が保障され、賃金差別を受けず、家庭では夫の協力、子供の協力が得られ、保育施設の充実などの条件整備がなされなければならない等、あらゆる場面で日本はたち遅れているため、闘うべき道りはまだまだ遠いのです。

私の家庭では、妻が高校の養護教諭をしております。生徒数千三百人を数える大規模校に、一名の定員です。一日数十名にも及ぶ保健室来訪者を相手にし、ケガの応急処置に、カウンセリング。葉づ



けの生徒を叱りとばし、ツッパリ連中の話を聞いてやり、一日が終ればもうヘトヘト。その上、県教委は養護教諭の定数を増やそうとしないばかりか、教職員の健康管理者としての仕事まで押しつけようと画策しているのです。毎日、泥のように疲れて帰る彼女は、夕飯の仕度をし、洗濯をすませ、小学校二年になった娘を風呂に入れて寝かすともう余力がないといった様子です。幸い私が高校の夜学に勤務しているため、日中に、掃除、洗濯、皿洗い、買物などの雑務がある程度カバーできるのですが、それでも公平に見て家事労働の三割程度だろうと思います。定時制高校勤務という事で彼女とはまったく生活サイクルがかわらず、結婚していながら別居結婚のような生活が約十年続いているのですが、日曜なぞ、やあ久しぶりって言う感じで一緒にいる時間がまったく貴重に思えたものです。

結婚して二年目に子供が生まれてからは戦争のような日々でした。産休あけから保育所を探しまわり、個人で見えてくれる人や無認可保育所を渡り歩き、やっと娘が一歳の誕生日を迎えるころ、家から一時間もかかる公立保育所に入れたのです。市の保育所担当の職員とも随分折衝しましたが、朝八時半から夕方四時半までの保育時間を変えてはもらえませんでした。いったい正規の勤務をしている労働者で、朝八時半に子供を預けて出勤し、夕方四時半までに引きとりに来れる人がいるのでしょうか。その結果、母親がパート勤務とか自家営業の人たちしか入所できないという事態が生じているのです。女性の労働をただ家計のたしとしか考えず、母親が家で子供を育てるのが望ましい姿だとする論理。この論理は、政府や企業やマスコミが一体となって作り出している「保育所育ちの子はダメだ」という誤まった認識と共に深く国民各層に浸透しているように思いま

す。まったく冗談ではありません。私はむしろ積極的に子供を保育所に預けたいのです。たとえ、親が家で子供を見れる家庭でも、子供を保育所に預けた方が良くいと思えます。もちろん、保育の内容と質が大きく問題とされる事は言うまでもありませんが、最近のように核家族化が進む中で母子が異常に密着している姿を見るにつけ、集団保育の重要性をますます考えてしまいます。閉鎖的な母子関係は親と子の双方にとって不幸なことであり、かつ又、双方の自立を妨げるのです。ともあれ、公立保育園の増設と内容の充実は、家庭を持った男女の自立にとって緊急な課題であると言ってよいでしょう。

宮さんは子育てについてはふれられていなかったのですが、ひとり歩きした男と女の関係を考える場合に子育ての問題は避けて通れぬと思います。私の子供は今は、学童保育所に通っていますが、驚くべきことに千人を越す児童数の小学校で、学童保育所に行っているのは私の娘だけなのです。それでも学童保育所があるのは良い方で、皆無に等しい自治体もたくさんあるようです。こんな状況でどうやって父親も母親も自分の生活領域を守り「私らしい生き方」をしていけるでしょうか。暗澹たる思いになります。

女性が、母親が、自分の仕事・活動領域を持ち、自立して行くことは、結局男の自立をも促し、子供の自立の助けともなるのです。親がひとり歩きしていかないでどうして子供が自立していけるでしょうか。男も女も、自立をさまたげるさまざまな物理的・風土的障害を一つ一つ日本の社会から取り除く努力を続け、家庭を少なくとも互いの自立をささえあう場にして行くことが、私たちひとり歩きを志向する人間のとるべき道であると思っています。(高校教師)

## 家庭・家族

“ひとり歩きした男と女の関係”  
“ひとり歩きできない男と女の家庭”  
をめぐって

その2

大日向 雅美



私に与えられたテーマは、宮淑子氏の「男たちよ！」へのコメントである。賛意を表するもよし、批判するもよしとの自由なコメントを求められた。しかし、元来、私は批評という仕事に不得手である。殊に人の生き方というものには、長い生活史の上に築かれた、誰のものでもないその人だけの聖域とも言うべきものがある。生と共にし、その人を心から思う生活の中で初めて理解し、批判も出来るものである。しかし、結果として私はこの稿をお受けした。ご自身の生活を赤裸々なまでに開いて訴えておられる宮氏の主張に、他人事とは思えないものを感じたからである。もっともそれは、私が自分の土俵の中で勝手に共感した独断的なものである可能性は大きいのであるが……。

宮氏の文章に私が見たもの、それは既成の男と女という枠を越えて、より人間的な絆を求めて生きている一組の男女の姿である。私共が共感を覚えた部分もそこである。それはまた、一人でも十二分に生きていけるというお二人の自信に裏打ちされた姿でもあらう。宮氏の主張は、制度としての結婚を否定した男女関係という、形の新しいなどにはないはずである。もし、形の上での新奇さが批判の対象とされるのなら、それは気の毒であり、私にとっても残念な思い

である。

結婚とは、あるいは結婚という形をとらないにしても成人した男女の結びつきとは、本来、主体的に生きることの出来る男と女が人生を共に生きることではなければならない。一人でも生きていける、しかし、それでもなお、互いにいたわり合い、思い合える相手がいる、これこそ男と女の喜びであり人生の深みではないだろうか。

従来結婚を考える時、男も女もあまりにも未成熟であり過ぎたように思われる。身の回りのことが何一つ出来ないことが男らしさの象徴とされ、わが身一つ養えないことが女の可愛らしさ、良家の子女の条件でもある。そんな男と女が、家のため、子どものため、果ては会社や仕事のためという大義名分のペールに包まれて、しなだれかかって生きていることは決して珍しくないことである。共同通信社会部・日本の幸福班は、そうした未成熟な男と女が繰り広げる家庭生活の荒みを露呈させて見事である（日本の幸福・第二部『妻が夫を捨てるとき』82年五月〜七月）。「男も女も主体的に生きる」などと言うのはたやすい。しかし、現実にはかなり難しいことでもある。男は伝統的な男らしさに身を包み、女はそんな男に可愛く寄りかかって生きていく、未成熟なままで生きることの居心

地の良さも、なかなか捨てがたいものかも知れない。しかし、そんな男女の行き先には底知れぬ落とし穴が待ち受けていることの恐ろしさ、目を覆うことではすまされない実態を、日本の幸福班のルポはまざまざと見せてくれている。

私は宮氏が投げられた問題に基本的に賛同の意をもって筆をすすめている。しかし、宮氏と同じ生き方を私がしているというのではない。職業婦人であるという一点を除いて、外見上は宮氏と私の生き方は大いに異なるものである。見合いによって知り得た会社員の夫との間に、間もなく二人目の子を授かるうとしている一人の母親である。妻が夫の姓を名乗り、同じ屋根の下で暮らすことでスタートした結婚生活を営んでいる女である。しかし、私たち夫婦が九年近い歳月の中で、共に見つめ育もうとしてきたものは、宮氏の理想と少しも変わるところがないと言えるかと思う。自立した男と女が人間らしいかわりを持つことの素晴らしさを、宮氏は鮮明に映し出しておられる。しかし、それは必ずしも別居結婚という形の中でのみ得られるものでもないであらう。宮氏の主張に対する賛否が形の上の新奇さだけで論じられることを避けたいと私が思うのは、そのためである。要は何を理想とするかであり、目標に向かっていかなる道を選ぶかは別の問題である。宮氏と私の生き方の外見上の違いは、選択した道の違いであり、好みの違いに過ぎないと私は思う。

ところで、男と女が自分の生き方を持ちつつ共に生きることとは、前にも書いたが決して生易しいことではない。充実感がある反面、苦勞も多い。私の場合は、自分の時間を作ること一つが大事業に思えた時期もあった。しかし、仕事と育児・家事のはざままで綱渡りのような日々を過ごす時、私を支えてくれるものも夫の存在に他なら

ないのである。仕事の領域も生活時間も異なる夫が、私の仕事に寄せてくれる深い理解と期待、それは私にとって緊張した日々を乗り切る原動力である。共に歩みつつなお自分の生き方を持つことは、権利や義務の次元で片づけられるものではない。自分の存在が相手に与えている不自由さもきちんと見据えた上で、互いに相手の生き方を理解し、またそれを感謝する思いがなくてはならないと思う。

そして、自分らしさを持ち得た男と女が、互いに相手の生き方に共感を示しつつ生きていくことの意義は、何もその二人の間の問題にとどまるものではない。それは親として子に対する姿勢に求められる基本条件でもあると思う。宮氏のような生き方が、もし育児という観点から非難を受けるとしたら（老婆心かも知れないが）、それはものの本質を踏み外したものである。一方、これも老婆心ながら、男と女が主体的に生きていく上で育児が障害になると考えられるなら、そこにも同じく考え違いがあるような気がする。子どもにとって大切なことは、父と母が、人間らしい生き方の中で互いに愛を築いている姿を見ることがであり、そこに子どもとして愛される自分の存在を確かめることが出来ることはないだろうか。形の上で両親がそろっているか否かが問題ではないはずである。また、子どもを育てる側にとって、育児からうける身体的・時間的制約は、一時期、確かに小さくないものがある。

しかし、子育ては、男と女が親として幼い生命にかかわる中で、自らも育まれ、相手への共感をさらに深めることも出来る場である。自立して生きていくことは、男も女も自分を大切にしながらもなお、自分以外の対象を求めて愛の輪を拡げて生きていくことである。

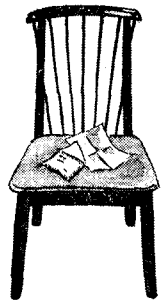
（彰栄保育専門学校）

## 家庭・家族

“ひとり歩きした男と女の関係”  
ひとり歩きできない男と女の家  
庭をめぐって

その3

### えんどうのぶお



「ほくなんか生まれて来たくはなかったんだ。どうしてほくを生んだんだ！」——二十歳はやはりほくにとっても人生の最も美しい時期ではなかったものであって、当時「存在の悲しさ」に堪えかねていたほくはちょっとしたいさかいの後に母親にこんな言葉を投げつけてしまったのだった。

母親が泣き出してしまったからというだけでなく、あまりに傲慢すぎる言葉だったことが自分自身わかるだけに、それを口にしてしまった後ろめたさがついてまわるある日のことだった。当時まだ知り合って幾月にもならないK子から「毎日カレンダーばかり見てるんだけど……どうもできちゃったらしいの」と衝撃の告白をされたのは！ 年に一度、牽牛と織女が逢瀬を楽しむという夜に、それにあやかた二人が交わした行為のことを今さら後悔してもはじまらなかった。「墮ろせ」なんてとても言えぬ気の弱いほくは、かといって「生もうよ」というのも照れくさく、結局「母親に投げつけてしまった言葉を身をもって否定したい」——こんな気だった言い方で遠回しに「生んで育てようよ」と言ったのだった。

ほくとK子との関係だけでいえば二人がいっしょに暮らすというのは必然なことではなかったし、また日程にものぼってはいなかっ

ただのだけれど——それこそ「通い婚」といった形でよかったのだ——この「はじめに子供ありき」というせつばつまった状況において、ほくたちは果作りを急がないわけにはいかなかった。つまりほくたちはその時、家族とよばれる、のびきならない関係の中で生きることを決意したのであった。

それは実際のところ、「ひとり歩きした男と女の風通しのいい関係」とはほど遠い「男と女と子供とがせまい空間の中で日々顔を突き合わずダサイ関係」ではあったのだ。

しかしほくはその時の子供が九歳半になった今、当時二十三歳、まだヨチヨチ歩きだったほくが、そうしたのびきならない関係の中に自らを投げこんだことを正解だったと思わないわけにはいかないのだ。自分のことにしか目がいかず、子供なんてめんどうくさいとしか思えなかったほくが、この十年間の逃げ場のなさ、風通しの悪さの中で自分でも驚くほど変貌したのであった。いつしかほくは同じ目の高さで子供と対するようになり、たどたどしい言葉に耳を傾けるようになり、子供といっしょにいる時の、えもいわれぬ楽しさに気づくようになったのだった。このことは自分が一回り大きくなったということをほくに感じさせたし、またほくに欠けていた他人

へのやさしさが培われていく過程でもあったと思うのだ。

他のどんな関係がぼくをこれだけ変えられたというのだろう。すべてがむき出しにならざるをえない関係の中で、子供と、そして見限ることを何度となく考えながらも気長につき合ってくれたK子と生きてこれたことを、ぼくはうれしく思うものだ。逆にいうなら、ぼくはこれだけ追いつめられないことには変わらうとしない人間だということが証明された十年でもあったのだ。

それにしても子供を育てる過程で学んだことの多さに驚く。例えばこんなこともあったのだ。病弱な子で何度も入院したりしたのだが、二度めの入院の時のことだ。猩紅熱で隔離病棟に入院させられていた子供を見舞って帰っていくぼくの後姿を、残された病室の窓枠にしがみつき、見えなくなるまで追っている子供の視線を背中に痛いほど感じて、ぼくは「後髪ひかれる思い」というものを、こみ上げてくる熱いものをこらえながら体で理解したのだった。「後髪ひかれる思い」——だれがどんな時に言い出した言葉なのだろう。

そしてその言葉をずっと使い続けてきた人々にはどんな悲しいことがあったのだろう。そう考えた時、ぼくはそれらの先人と、大げさにいえば彼らが築き上げてきた歴史というものと、やっと出会えたような気がしたのだ。そしてその時、母親に傲慢な言葉を投げつけてしまったことへの後ろめたさから、やっと自由になれたように思っただった。

すべてがむき出しにならざるをえなかった十年は、当然のことながらぼくとK子との関係をも大きく変えずにはおかなかった。日常のささいなことにこそ現れる違いをめぐって、いさかいが絶えな

ったことは事実だが、お互いがまるごとぶつかり合い、何日も口をきかなかったりした後におずおずと訪れる和解は、しがらみの別名であるかもしれないが絆を強める方向に働いた。そうしたことを積み重ねるうち、ぼくたちはそれぞれの思いを持ちよるミニコミを共同で発行することになった。

小学校の家庭科を、女の子に近づく絶好の機会とばかり面白半分に過ごしてしまったぼくが——家事の中での、そのことの事後処理がまた大変なのだ——その意味ではこれはぼくにとって全く場違いな雑誌であるのに、その誌上に今こんな文章を書くハメになったのは、そのミニコミにこの雑誌の創刊号のことを少し書いてしまったためなのだ。「風通しのいい男と女の関係を実践する二人の関係をうらやましいと思うものの、それは二人が子供をもたないこととひきかえにやっとなにしているもののように思え、ぼくたちのように「はじめに子供ありき」から始めざるをえなかった者にとっては態のいいのろけを聞かされているとしか思えない面もあったりする」——こんな内容だった。

「独り身の気ままな暮らしと、ひとの膚のぬくもりのある暮らしを自由に選べる関係」とは、お互いが変わらないことを前提に成り立つもののようにぼくには思えてしまうのだ。退路がなかったぼくとK子の双方が、侵し合い、依存し合ってたにせよ、お互いの新しい面を発見し合いながら日々変わってきたことを大事にしたい——ぼくはそう思っているのだ。

## 新しい家庭科を創るために \* \* \* 小学校では \* \* \* \* \* 名取 弘文

### つけ物

ゴミ問題を子どもと調べて、ゴミの多いことに改めてびっくりしてしまった。とくに疎大ゴミの回収日には、テレビ、冷蔵庫、ソファ、ベッド、戸棚、自転車、ふとんなどまだまだ使えそうな物がたくさん捨ててあり、子どももびっくりしてしまふ。そこで、ぼく疎大ゴミの回収日にはゴミの山をのぞいて、良さそうな物がある時には拾ってくることにした。戸棚、椅子、文学全集などが主な拾得物である。文学全集は汚れていた外箱を取りビニールのカバーをはずして、一冊百円で同僚に売ったところ、なかなか好評で五冊もまとめて買った人もいる。ドストエフスキーもゴミ置き場から拾われて、百円で売買されるとは思わなかっただろうと考えるとクックックと笑いがこみあげてくる。資源ゴミの日には中身の入ったスコッチも出ると聞いたことがあるが、そんな好運にはまだ出会わない。

四月から一人暮らしを始めた時に、ぼくは「愛のリサイクル運動」と称して友人や同僚に「押入れの中で眠っている石けん、タオル、コーヒークップ、せともの、シーツをかわいそうなほどにくだ

さい」と呼びかけずいぶんたくさん物を貰うことができた。そして、つくづく、今のぼくたちの生活には必要な物がいっぱいありすぎるのだと思った。女性向けの雑誌の特集に「収納の仕方」がよく組まれるのも、物があふれているからなのである。物を買う、物が多くなる、収納家具が必要になる、家具を増やせば部屋が狭くなる、広い部屋に移りたい、大きな家が必要だ、そこでたくさん働いて賃金を多く得なければならぬ、そうなる生活の時間が少なくなるから電子レンジや大型冷蔵庫が必要になるというくり返しをしていけば、ゴミはどんどん増えていくばかりである。そのサイクルを断ち切らなくてはいけないとぼくは思う。

そこで「 unnecessary 物は買わないようにしよう」を目標にして、六年生と「大きな店・小さな店」という授業をすることにした。ゴミ問題の授業と同じように、子どもたちがテーマを分担して、調査して、考えて、発表する形をとった。グループ分け、調査、まとめ、発表の練習、発表と時間は八時間かかった。発表のしかたは、スライドフィルムを使ったり、テープレコーダーでインタビューしたものを聞かせたり、OHPを使ったりと工夫がされていた。三十ページもあるパンフレットを刷ったクラスもあった。

#### 子どもの発表から

1、大きな店のいいところ  
。そこに行けばだいたいの物を売っている

- 。ゆったり買物ができる
- 。駐車場がある
- 。見た目がきれい
- 。レストランがついている
- 。送り物を送る時には、そこまで発送してくれる
- 。店員がわずらわしくない
- 。安売りしている
- 2、大きな店のよくないところ
  - 。いろいろ品物がありすぎてどこになにがあるかわからない
  - 。必要がい物の物を買ってしまう
  - 。専門知識をもった人が少ない
  - 。食品類のせんどの見分けがつかない
  - 。店をあげるのがおそくて店をしめるのが早い
  - 。店の人との交流がない
  - 。安いが物がわるい
- 3、小さな店のいいところ
  - 。買うときにその場で相談できる
  - 。お金がたりなくても貸してくれる
  - 。おそくまで店があいている
  - 。気がるに買える
  - 。よくいって知ってる人だから
- 4、小さな店のよくないところ
  - 。いろいろ物売っていない
  - 。長い時間品物を見ていられない
  - 。流行おくれの物、古い物がおいてある

- 。店に入ると、買わなくてはいけないうような気がする
- 。駐車場がない
- 5、働いている人にとって大きな店のいいところ
  - 。時間がきまっている
  - 。給料がいい
  - 。店員わり引きがある
  - 。きれいなユニホームを着られる
- 6、働いている人にとって大きな店のよくないところ
  - 。場所をはなれることができない
  - 。しっぱいすると責任をおしつけられる
  - 。帰りに買い物をしようとしても、しまっていることが多い
- 7、小さな店で働いている人にとっていいところ
  - 。近くの人がよく買いにきてくれる
  - 。注文した人は近所の人たちだからすぐにはいたつできる
  - 。売れ残りが少ない
- 。特売日にはたくさんの人が買いにきてくれる
- 8、働く人にとって小さな店のよくないところ
  - 。店がせまいので品物が多く入らない
  - 。店が小さくてあまり目だたない
  - 。客がすくない
  - 。営業時間が長くてつかれる
- 9、値段調べ
  - △調べた日▽十一月十四日
  - △調べ方▽同じ日に調べた 目玉商品はのぞいた 同じ品物同じ量を調べた



△調べて▽

。スーパーは、品物が安いと思っていただけとそんなに安くなかった。大売りだしをすると、ほかの店より安くなる。そこで、消費者の方ではすこしでも安いものを買いくる。店のほうは、人がいっぱいくるのでふつうの時よりも多くお金がはいる。

10、広告調べ

△調べ方▽新聞に入ってくる広告の枚数を調べる わら半紙一枚分を1とする。一週間調べる

# 値段調べ

商品	店	小さな店	デパート A	スーパー A	スーパー B
ネス カ フェ (大)		1600円	1548	1598	1549
インスタントラーメン		115円	108	110	108
牛 乳 (1000ml)		228円	198	198	198
ふた肉 ロース (100g)		196円	185	176	182
さん ま 1 び き		86円	115	80	76
レ タ ス		235円	198	212	200
三びし大型れいぞう庫		229000円	258000	228000	235000
三 輪 車		3600円	3450	3250	3360

△調べて気がついたこと▽

。スーパーとデパートの広告が多い。大きな店は品物がいっぱいあって、広告を作るお金がたくさんある。小さい店はまだ品物がないし、広告を作るようなお金はない。で

# 広告調べ

	日	月	火	水	木	金	土
小さな店	0	0	1	0	0	0	0
デパート	0	0	0	0	6	0	0
スーパー A	0	0	0	0	0	4	0
スーパー B	0	0	0	0	4	0	0

新聞名 朝日新聞

も、特売の日は広告を出す。

。広告が木曜日と金曜日に多いのは、休みが水曜とか木曜日で新しい物が入ってくるからそれを知らせるため。土曜日と日曜日にお客さんがくるから。

。広告には、安い物ばかりのっているの、つられて買いに行ってしまう。

。広告の印刷代なども品物の値段に入っている。

発表会から

このほかに、駅のまわりの大きな店について、オープンした日、規模、働いている人の数、店舗の数、特色を調べたり、地域の小さな店について調べたグループがある。スーパーについて、「この店ができる時に反対運動がありましたけど、どう思いますか」と店長に直撃インタビューをして「それはもう済んだことだから」とケムたがられたグループがあったり、カメラ屋に行って「大きな店ができて売れなくなりましたか」と聞いたたら「先生は誰だ」と怒られたので「名取先生です」と答えたたら急に愛想がよくなって「先生に買いにくるようにな」と言われたというグループもあった。

母親たちに「どこで買い物しますか。それはどうしてですか」とアンケートを取ったグループもあった。その結果は予想どおり、大型店に行く人が多く、理由は安い、便利というものであった。

発表のあとで、ぼくは、スーパーなどでのまとめ買い、ついで買い、衝動買いは結局高い買い物になってしまうことを話し、安い高いはケースバイケースであるからと「三人家族でみそ汁に入れるネギを買うのに、三本百円と六本百八十円のどちらが安い」と問いを投げかけてみた。こちらの意図を見抜いているからだろうか、子

どもたちはすぐに「三本百円。だって六本も買ったらムダになる」と答えてくる。続けて「買って五年も使おうとダメになってしまおう一万円の椅子と、五万円もするけれど百年もつ椅子とどっちがいい」と聞くと「百年もつ椅子」と答えてくる。大型店の広告につられて、買い物に出かけ、ついつい余計な品物を買ひ込んでしまおうという「安物買いのゼニ失い」になってしまっている今の生活様式を変えようというぼくの考えを理解してくれたかどうかは知りようもないが、「大きな店・小さな店」について子どもたちはこんなふうに感想を書いている。

。みんながうるさくて聞きづらかったけど、棒グラフなどで大きな店のよいところよくないところの人数を示したのはわかりやすかった。自分たちでやったにしてはよく調べていると思います。

。大きな店も小さな店もいいところもあればわるい所もある。大きな店ばかりがふえると小さな店が困る。小さな店がなくなってしまうと、買い物がかんたんにできなくなってしまう。ぼくたちが困る。

。大人にアンケートをとったけど、白紙があったり、「特にありません」という答えがあったりしたので、「その他」が四〇%になってしまいました。大人の注文は大きい店にも小さい店にも「良い物を安く」が多かったけど、子どもはだいたい「おもちゃ、文房具など遊ぶ物を多く置いてほしい」という意見でした。

### つけ物をつけよう

たくさん物を買って、いらなくなった物は次々に捨ててしまおうという生活から、本当に必要なものだけを求めよう生活に切り換えようということは、自分なりの生活のしかたを見つけようということでもある。隣りの家がビデオを買ったから自分の家も買うという生活、どこの家でも車を持っているから自分の家でも車をといるのはやめて、隣りの家ではこうしたいけれど、わが家はこうしているとしたいものである。これはぼくの中では、学校教育についての一つの対処方法にもなっている。学校で、知識・学力・テスト・進学と煽<sup>あお</sup>っても、うちはこうですよ、うちの家風には「他人をはねのけるな」とあるのでですよとやり返し、どこの子が進学教室に行っている、塾に通っていると聞いても、うちは「勉強はなるべくしない」が家訓なのでですよと馬耳東風と聞き流してしまおう。そして、わが家秘伝のおいしいものでも食べようというのである。

そこで、五、六年生とも「わが家のつけもの」をやることにした。子どもが聞いてきたつけ方から始める。

1、わがはいはねこであるの家の場合（学芸会で「わが輩は猫である」の主人公をしたのでこんなネームがついた女の子の家）

。キューリーの即席づけ

①たて半分に切ったきゅうりを「カノコ」に包丁を入れる。

③少し多めのしょうゆに三時間はどつけていただく。

「カノコ」にすると出来上りがきれいだから。

2、かわいいぼうやの家の場合

。たくわんづけ

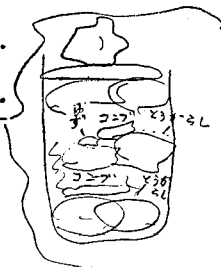
材料 だいこん二〇本（ほした物、塩カップ三ばい、ぬかカップ一

### 〔3〕 三ツ葉家の場合

#### 白菜 づけ

- 材料
- ・はくさい 2つ(1束)
  - ・あら塩 1つかみ
  - ・赤唐辛子 10こ
  - ・コンブ(大) 1まい
  - ・ゆず 1/2こ

- ① つけ方  
はくさいを4つ切りにして半日ぐらい日に  
ほす。
- ② ほしたはくさいをたるに入れて塩をふりか  
ける。
- ③ そり上からコンブを $\frac{1}{2}$ に切つてつける。
- ④ 赤とうがらしをすこしつける。
- ⑤ はくさいをそり上からつける。
- ⑥ ふたをのせて1週間から  
2週間おもしろせる。



五はい、さとう(赤ざらめ)三はい、赤とうがらし(三〇二)一たば  
つけ方 ①材料をまぜ合わせる ②たるにだんだんつめていく  
③ふたをのせ重石をのせて二〇日間つけておく ④ふたをする前に  
だいこんのハッパをのせる。

子どもの家のつけ物のやり方を聞いていると、まだまだ豊かな暮  
らしが残っているのだとうれしくなってくる。ノートをとっている  
子ども「うまそう」「作ってみよう」と声をあげる。そこで、タ

クアンは六年生、白菜づけを五年生がやることにする。大根は近所  
の八百屋さんに注文する。塩は赤穂の天塩を買う。つける樽がない  
ので、酒屋さんの子どもに一斗樽を分けてもらえないかと頼んでお  
く(樽は二つしか手に入らなかったの、足りない分は金ダライを  
使った)。

白菜づけの方は簡単で、白菜を四く六つに割って、洗って、半日  
干し、タライにつめ、塩をふり、トウガラシ、ユズ、コンブを好み  
で入れ、上からタライを重ね、石を乗せておく。一週間ほどで水が  
あがってきて、十日目ごろから食べられるようになった。学校で試  
食して、家を持って帰る。

子どもたちに家での評判を聞くと、「おかあさんとお姉ちゃんが  
うまい、うまいってみんな食べちゃった」「おばあちゃんが、松前  
づけがうまいとか、野沢菜がうまい、京都のがうまいっていつてう  
るさかった」とおおむね良かったらしい。なかには、酒好きの父親  
に売りつけて千円ももうけたという子どもがいた。「学校で集めた  
のは一人五〇円だからぼくにも少し回してくれない」と聞くと、ま  
顔で「え、嫌だよ」と逃げていく。

タクアンのほうは、大根干しから始めた。大根を二本ずつ結び、  
屋上の柵にかける。朝干し、下校する時にしもう。霜にあてるとい  
けないからである。これを一週間する。当番を決めて、土曜日も日  
曜日もやることにした。おもしろかったのは、月曜日の朝である。  
朝会で運動場に並んだ子どもたちは屋上の大根に気がつき、ザワザ  
ワする。校舎を背にしている校長たちには大根が見えないから、今  
日は騒がしいなあと変な顔をしている。

当番は決めておいたのだけれども、それでも心配だからと毎朝自

分で干し、帰りにしまっていく感心な子どももいる。一週間たって、わかったことだが、彼はなんと、自分の大根をいつも南側に置いて陽によくあたるようにしていたのである。ほかの人のよりもシナシナになった大根をみて、彼はとてもうれしそうであった。

ぬかは、米ぬか袋以来お世話になっている隣の米屋さんに取り寄せてもらう。赤ざらめ、塩、とうがらしをまぜる。その時、どういうわけか、女子は女子、男子は男子で漬けるという意見がでてくる。一緒にいいじゃないかと説得してもきかない。ぼくはちょっと気嫌を悪くしたのだが、やがてそのわけがわかった。女子の何人かは、柿の皮を持ってきていたのである。男子はだれも持ってきていない。それで、女子は自分たちのを甘くつけて、男子を負かしてやろうとしたのである。

大根をつめて、ぬかを振って、大根をつめて、いちばん最後に葉をのせ、ふたをして重石を乗せる。そして三週間じっとがまんの子である（もっともがまんの間は冬休みだからどうということもない）。

お正月が終わって、子どもたちが元気に学校に集まってくる。家庭科の授業も再開となる。大根がタクアンになっていくかどうか、味はどうか心配である。重石をとって、ふたを取って、葉をどかして、最初の一本を取り出す。ここでもた、ぼくはびっくりしてしまふ。なんと子どもたちは、配置図を持っていたのである。最上段右はしはだれのもの、次はだれのものとする。そして、自分のものはさつさと新聞紙にくるんでビニール袋に入れてしまふ。残ったタクアンは三本しかない。その三本も行方が決まっている。一本は冬休みに転入してきた子どもの分だそうだ。そうしなければかわいそう

だというのである。もう一本は担任の分である。ナルホドナルホド、最後の一本がぼくの分なのか。ところが、それは職員室のみなさんの分だというのである。ぼくは正月早々、イジケ虫になってしまった。

味のほうはおおむね好評だったが、塩がきつすぎるといふ人と、塩が薄すぎるといふ人の両方がいた。塩かげんはその人その土地に合うものがよく、誰にでも向いている塩かげんというのはないのである。つけ方を教えてほしいというお母さんもしれば、お返しに自分の家のタクアンをくれた人もいた。

子どもたちにとって、「タクアン漬け」の授業は、水気の多い大根が陽に干されてシナシナになっていくことのおもしろさ、空気の乾燥と気温によつてはうまく干せないという微妙さ、野菜の保存方法などを知ることになったのと、改めて添加物のことを考えることになったようである。店で売っている黄色のタクアンが本物なのか、着色料や甘味料を使ったニセモノなのか、教師がいわなくてもよくわかったようである。

#### 公開授業のお知らせ

△日時▽十二月二日（木）午前十時半～五時

△所　▽村岡小学校（国鉄・小田急とも藤沢駅下車徒歩十三分）

△内容▽そばづくり（名取午前中）「家族」ってなんだろう（ますのきよし氏一時半～二時半）研究会（三時～五時）交流会（五時半～八時）

研究授業というより、ちょっと見にきてというレベルです。過期待しないうで来てください。詳しいプリントの必要な方は、藤沢市弥勒寺一の一六村岡小名取あて手紙で申し込んで下さい。ヨロシク。

# 新しい家庭科を創るために ＊ ＊ 中学校では ＊ ＊

熊本県家庭科サークル  
中山 京子

## 男女共学による自主編成

### たん白質・脂質の学習

——大豆を中心に——

#### 一、はじめに

家庭科の男女共学について熊本県では一九六〇年代末から論じられ、七〇年代から個々の実践もすすめられてきていた。しかし、私人間としては、一九七五年ごろまでは、その必要感に迫られていなかった。

国際婦人年を契機として、あらゆる場で、男女平等について論じられ、多くの女性の意識変革の機会が作られた。私もまたそれによって動かされたひとりである。当時、多くの女子高校生が二十三歳どまりの人生設計しか持ち合わせず、あなたまかせの主体性のない人間に育っているという報告を耳にしたことがある。現場の一女教師として、このような主体性のない女の子を育てていることに強い

責任を感じた。

終戦後、平和憲法のもとに民主教育がすすめられてきたはずである。しかし、現実には長い歴史の中で意図的に培われてきた男の子女の子に対する意識は変わっていない。これには、いろいろの要因があるが、学校教育のあり方にも原因があり、その中の一つが、家庭科の男女別学である。男は仕事、女は家庭という意識をうえつけ、女子を主体性のない人間にする一助ともなっている。

こうした疑問の上に立って、男女共学にふみ切り三年目を迎えた。当然のことながら、指導内容も異なってくる。子どもたちが、将来生きていく力となり得るものは何か、その点に視点を置いてカリキュラムを作成した。ここでは食物領域——それも二年生の実践を報告する。

#### 二、食物領域の学年別指導計画

##### 第一学年（20時間）

炭水化物を主とした食品の研究

##### 第二学年（20時間）

たん白質・脂質を主とした食品の研究

##### 第三学年（30時間）

地域の加工食品の研究（食品添加物）

バランスのとれた食事の研究

### 三、一年次の題材

(詳細は、『熊本の実践集、家庭科教育、創刊号』参照)

- (1) オリエンテーション
- (2) 米について
- (3) 小麦粉について
- (4) 炭水化物と人体とのかかわり
- (5) 学習を終えて

### 四、二年次の題材

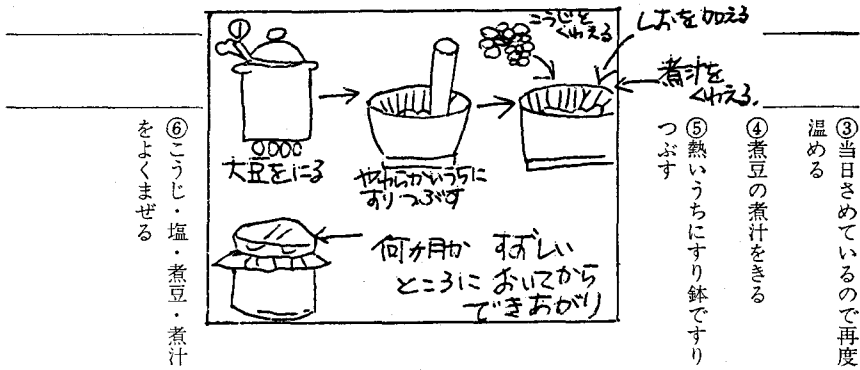
(○内は授業時数)

- (1) たん白質を多く含む食品さがし ..... ①
- (2) 脂質を多く含む食品さがし ..... ①
- (3) グループ研究をしてみよう ..... ①
- (4) みそづくりと大豆班の発表 ..... ②
- (5) ムニエルづくりと魚班の発表 ..... ②
- (6) ハンバーグづくりと肉班の発表 ..... ②
- (7) 中間のまとめ ..... ②
- (8) シュークリームづくりと卵班の発表 ..... ③
- (9) バター・チーズづくりと牛乳班の発表 ..... ②
- (10) 油とりとお好み焼きづくり ..... ②
- (11) とうふづくりと、味噌汁・いりおからづくり ..... ②
- (12) まとめ ..... ③

### 五、二年次の展開

番号	(1)	(2)	(3)	(4)
生徒の活動	・ たん白質・脂質を多く含む食品のベスト10を、食品成分表より選び出す ・ 選び出した食品を板書して、たん白質と脂質を共に含有する食品が多いことを知る ・ 二年生で学習する六種類の食品を選ぶ	・ 六つの食品を各班に分担して、グループ研究をする	・ 味噌づくり ① 大豆を洗って水につけておく ② 大豆を煮る(前日)	
留意点・反応	※班競争でさせたので、どの班も分担、協力しながら一生懸命に選び出していた	・ 大豆・魚・肉・卵・牛乳・油の六種類(六班分)を意図的に選ばせる ※2時間予定であったが4時間扱いとした。それでも不足した班は、放課後とした ※食品に関連した実習名を知らせた所、何をかん違いしたのか、卵を選ぶのではなく、シュークリームを一番に選び、最後まで残ったのが味噌の大豆であった。現代っ子の嗜好がうかがえる	・ 資料1参照 ・ 前々日の放課後、材料係が洗って水につける ・ 前日のあき時間を利用して教師が、やわらかくなるまで煮ておく	

資料1 味噌づくり



※大豆のにおいに、「あつ、ぜんざい!」と言って飛びこんでくる子ども

※煮豆をみて、「おいしそう」といかにも食べたそうな子ども

※みんな大喜びですりつぶしていた。いつもチロロチロロしている子どもも、実に生き生きと参加していた

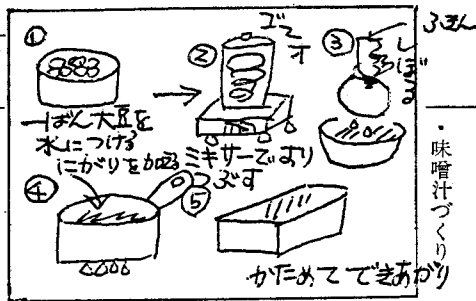
※師範用につく大型ミキサーを用意して、煮豆をつぶしてみせた。汗だくですりつぶしたものが数秒できれいになるのを見て、「ワァーッ」と機械の威力を感じていた(後の母親の労働とのかかわりにつないでいく)。しかし、一方では、機械のあつげなさに引きかえ、手仕事は、自らの手を通して進んでいくことで、目に見えて成果がわかり、喜びも大きいようだった

※「これがこうじね、食わるとね」とすぐ口に入れることを考える

※「これ食べたらがんなつとね」と心配そうな顔(すでに食べてしまった子ども)

(11)	(8) (9) (10)	(7)	(5) (6)	
<p>④豆乳にニガリ液を入れて凝固させる</p> <p>③煮て、こし袋で、豆乳とおからにわけ</p> <p>②大豆をミキサーにかける</p> <p>①大豆を水につける</p>	<p>省略</p>	<p>・中間のまとめ</p> <p>①発表の補足(教師)</p> <p>②ビデオをみる</p> <p>③感想を書く</p>	<p>省略</p>	<p>⑦みそがめにつめる</p> <p>・大豆班の発表</p>
<p>※好奇心に満ちた子どもが、ミキサーにかけた生の大豆を食べてみる。「くさーい」と何とも言えぬ顔をした</p> <p>※豆乳を少しずつ全員に飲ませる。全体的に良い顔ではなかった。しかし、「生よりおいしいよ」と右の子ども</p> <p>※ニガリ液までもなめてみる子ども、無事とつぶができるようにとお祈りをしてから入</p>	<p>・資料2参照</p>	<p>・大豆・魚・肉の発表に対しての補足をする</p> <p>・ウルトラアイの「納豆について」をみせる</p> <p>※納豆の起源や納豆の作り方に非常に興味を持ったようである</p>	<p>(資料省略)</p>	<p>・各班二百グラムづつを、みそがめにつめる。残りは各自持つて帰り、自宅で観察をする</p> <p>・密閉することや、冷暗所に保存することをよく指導する</p>

資料2 とうふづくり



・味噌汁づくり

- ⑤型にサラシの布を敷いて
- ④を型に流す
- ⑥冷水でさらす

・おいしく  
おから  
づくり

れる子ども。さっと凝固したとき、「ワーツ」と歓声をあげたり、「成功」とVサインをする子ども、牛乳のようなものからどうしてこんなのができるのか不思議がる子ども

・型に流す前に袋の端に菜ばしを巻きつけながらしばらくよい

※さらす時間が待ち遠しそうだった。とうふができた喜びで一杯という感じ。教師も全く同感だった

・自分たちの作った味噌を使

※とうふの他に、なす、かぼちや、たまねぎの入った味噌汁が格別においしかった

※とうふは市販のものよりずっと固いが割に喜んで食べた

※おからをはじめ見て、「これ食べるの」と聞く女の子。すかさず、「お前おからを知らんとか、パックして売ってあつどがー」という男の子

※ミキサーのかけ方が少なかったのか、おからの味がとてもよかった

(12)

・まとめをする  
①ビデオ

②手作り食品と母親の労働  
とのかわり

③感想を書く

・NHK、『明るい農村』（八二年七月）の、とうふづくりのビデオを見せる。

※農村婦人が毎朝交替で作っている様子に、「あんなに作って作るといいね」という子ども

・学校で作った味噌は、すぐかびるが、買った味噌はかびないのはなぜか考えさせる

・なぜ手作り味噌やとうふが少ないのか、なぜ手作りしないのか考えさせる

・共働きの多い中で、母親の労働がきびしいことに気づかせる

・現状を解決するその方法として、機械の利用、消費者運動の推進、家族の協力など、自分に今、できることを考えさせる

(資料省略)



## 六、「大豆」の学習を終えて

一年次に、炭水化物を中心とした食品の学習を終え、二年次ではたん白質・脂質を中心とした食品の研究を試みた。現在の子どものちの食事が、欧米化した肉食に流れる中で、日本古来より伝わる大豆や魚の見直しをさせたいという願いをこめて実践にふみ切った。

まず大豆を考えるとき、日本人の食事に欠かすことのできないものは味噌である。そこで味噌づくりに取り組んだ。私自身、母が作るのをながめたことはあっても、主体的に取り組んだことはなかった。昨年の夏休み、県のサークルでの味噌作りに参加して、大体的要領はわかったものの、どうも味がよくなかった。その理由は、大豆のつけすぎ、夏場二昼夜つけっぱなしの大豆を使ったためである。それから私の味噌の研究が始まった。何とかして市販のよりおいしい味噌を生徒に実習させる前にどうあっても作り上げたかった。母はもちろん、生徒の母親や味噌屋さんに聞いてまわった。そして、ついにおいしい味噌を作ることに成功した。それは、干大豆500gに、こうじ24g塩380gの割合（一班の出来上り量44g）としたためだと思う。

昨年度の三学期に実習した味噌も素晴らしい出来だった。四月の家庭訪問時に、思わぬ所で、「息子が持ってきた味噌を冷蔵庫に入れて忘れていたのですが、先日食べてみたらとってもおいしくて——」という声を耳にした。お母さんから、「お味噌がとてもおいしいです」というお便りもいただいた。

当初、「味噌ば作っとね」と不満そうだった子どもたちも、授業にあつては実に生き生きと取り組んだ。教師自身も初めての取り組みで不安があつたが、成功した現在、「やってよかった」という満

足感がある。食べてみてほとんどが、「おいしかった」と感想に書いている。しかし、実習をして、「おもしろかった、楽しかった」が男の子に多く、「きたない、気持ちが悪い」と書いたのが女の子に多いことは何を意味するのだろうか。

次のとうふづくりも、いろいろな人に尋ねてみた。昔作ったことのある店の主は、「温度が大切なんです。そして、にがりの分量やまぜ加減でその都度、味が変わってできておもしろいものです」と教えて下さった。「明るい農村」でも同じようなことを報じていた。第一回目の実習時、私は温度計を何度も見た。しかし、不安は一瞬にしてふっ飛んだ。みごとに沈殿したのだ。子どもたちと一緒に喜びあつた（サークルでもわが家でも失敗に終わっていたので尚更のこと）。

みごとにとうふはできた。しかし、市販のより固いことに、ちょっと不満そうだった。「これが本当のとうふよ」と言う私に、「ふーん」とまだ理解できそうにない。ここで市販のとうふについての説明をすべき所であつたが、私自身不勉強のため上手に話ができず、「市販のは舌ざわりをよくするためにいろいろ入れているのよ」とだけ言った。とうふの型にも、やや不満が残る。適当な型がなかったで、ザルを利用したが、やはり、「四角のものがとうふらしい」と子どもたちは言う。小さく切れば同じだが。この次には、何とか工夫してみよう。

大豆については、生徒の発表を中心に補足する程度にとどめ、ウルトラアイの、「納豆について」のビデオをみせた。これが意外と子どもたちの心に残ったらしく、友達同士の話題にもよく上つていた。ある男の子曰く、「ビデオの話をしたら、お母さんにも納豆の

作り方を教えてちょうだい」と言ったので、山川アナウンサーの納豆づくりを教えたよ」「納豆を作ってみようよ」と何人かの子もたちにせがまれている。納豆を食べるのは嫌いな者が多いが、作ることへの興味は示している。

大豆の学習の一つとしてのとうふ・味噌づくりを通して、生徒とはもちろん、生徒の母親との交流ができたことは、今回の授業の副産物であった。学級PTAの中にも味噌づくりを取り入れ、母親同士にとっても、母親対教師にとっても、非常に有意義な一時を送ることができた。この次にはとうふづくりに挑戦しようと張り切っている。

## 七、おわりに

今回の実践を終わって心の中に残るものは、最近にない快い満足感である。私自身未知の分野への挑戦で真剣に取り組んだが、生徒もよく活動し、様々な反応も示した。授業後の感想も、「楽しかった、おもしろかった、役に立った、もう一度やりたい」などが多かった。このことは、やはり教材の内容が適当であったことを示すものと言えよう。また、教材研究を、サークルの仲間の実践に学びながら進めつつ、男女共学で実践したことが、より自然で楽しい雰囲気をもたらし出したのであろう。

最後に、母親の労働と手作り食品のかかわりについての中で消費者運動まで考えを発展させたかったが、時間不足もあり十分理解させるまでには至らなかった。これは、発達段階から言っても、やや無理であったのかも知れないと思う。三年生の食品添加物の中でしっかり押えたい。現在、子どもたちは、「手作り食品の方が、買

ったものより、おいしい」とか、「家でも作ってみたい」というような発展的な感想も書いている。しかし、これでは、食品添加物が使用されている社会的背景をふまえた解決とは言えないので、この点が、今後の私の課題と考えている。

今回の実践が、将来、子どもたちの生きていく力のほんの一部にでもなればと願いながら筆をおく。  
(荒尾市立荒尾第四中学校)

## 原稿募集 (薄謝をお送りします)

① 研究論文・実践報告 (図表を含めて五千字まで)

② 発言

▼ 学習の主人公たち——小・中・高生徒の率直な声を  
▼ 明日の家庭科教師たち (二千八百字まで)——家庭  
科教師を志す大学生の希望、疑問、提言など

▼ 市民として (二千八百字まで)

▼ 親も言いたい (千三百字または二千八百字まで)

▼ 教師のつぶやき (千三百字まで)

③ Weに、なんでも言おう、なんでも聞こう (本誌の内容・体裁などについての建設的な意見)

④ わたくしからあなたに (読者・執筆者・編集者の交換室) ③④は、はがきでお気軽に

## 新しい家庭科を創るために \* \* \* 高等学校では \* \* \* 寺島 紘子

### 授業の感想、家庭科学習の

#### 導入に新聞記事を使って

転動して一年ほどの、短い三年生とのつきあいであったが、生徒はどのように授業を受けとめたか。

授業の感想を通して

家族・家庭の問題状況から始まって、生活の中の公害、栄養点検と調理実習、女性と職業、性、障害者、子どもの問題などの学習の中で、生徒は「ユニークな家庭科はとても新鮮だった」「知らず知らずのうちに授業に引き込まれた」「深く考えさせられた」「楽しかった」「退屈しなかった」「自分の将来に直結していたのは三年間で家庭科だけ」などと多くは肯定的に授業を受けとめてくれたようだ。しかし本質をついた鋭い批判もあった。

まずは肯定的な感想、（以下、原文のまま）

A、「知らないことがたくさんあった。驚いたこと、悲惨に感じたこと、喜ばしいこと、楽しいこと、怒りを感じたことなど、さまざまな出来事に関して気持ちが変化した。『私のとびら』を書いて

先生にはめられた時、とてもうれしかった」

この生徒は、『私のとびら』と題して自分の生育歴を綴った。それ以来、彼女は、私に話しかけてくるようになった。

B、「今こうして生きているのは『自分自身』なのに、生きるということ、自分をとりまく社会の現状というものを、今まであまり考えずに流されてしまっていたということに、この家庭の時間を通して気づくことができた。

女としての生き方とか、障害を持つ人とかについて考えることができたし、本当に有意義で、授業を受けて良かったと思う。

小学校の時は、人間としてどうあるべきかなど、みんな考えていたけど、中学・高校と来るうちに、そんなことを授業という形で考えることはなかったし、自然、勉強さえすればよいのだ。勉強が大切なのだと、みんなそれぞれ、いつのまにかそういう意識にさせられ、一見、自分本位のようにもあるけど、実はその自分自身の生き方というの、自分で色々考え、そして判断し、歩む自分の道というのではなく、大勢の流れの中に、飛び出さないようにしているだけの、そんな主体性のない考えのない、そういうものになっていた。

この家庭の授業を受けなかったら、私は今まで通り、まわりのいう女のワクにはめられたまま、考えもなく政治にも関心を持たず、社会についても無関心の、そしてさらに自分の生き方をも真剣に考

えることはなかったと思う」

C、「子どもと障害者の問題について一番興味を持った。今までとはずいぶん違った考えを持つようになった。先生に影響されて、いろんな本も読んだ。それらの本は、みな私に大きな衝撃を与えた。また読んでいると心が洗われるような気がした。自分が恥ずかしくなった。いろんなこと教えられた。元気が出た。がんばれそんな気になった。今の私の悩みがちっぽけなものに思えた。優しくなれそんな気がした。先生には感謝している」。

この生徒は、卒業間近か私のところへ来て、授業を受けて世の中の見方が百八十度変わったと言いに来てくれた。

D、「一年前までは、私はすべてのものに必要以上に不満を抱いていました。そして、『さめる』ということがとても素晴らしいというか、大人のような気がしてあこがれていました。『人生なんてなりゆきでどうにでもなるんだ』という考えだけは少なくともずっとと遠くへ消え去っていった気がします」。

E、「先生みたいな人が家庭科の先生でいるなんてとってもカンゲキ!! 家庭科の女教師ってみなしきたりとかにうるさい先生ばかりだったけど、先生みたいな女性がもっと増えればいいのになー」。

なんだかこそばゆい気がするが、Eは性の学習のあとで、自分の今までのうっ積した気持ちを書いた生徒である。

F、「初めは実践的なこともしないで本当にこのままでいいのだろうかと疑問に思った。でもだんだん今まで勉強してきたことは、そんな実践的なことの前に大切なことなのだということがわかってきた。まず、人としてどうあるべきかが第一である。料理や育児法

などこれから先いくらでもできる。でも今までの授業で習ってきたことは、めったに学習する機会はないだろう。それが今、人生の大切な時に学習できうれしく思う」。

この生徒は、大学入学後、障害者のところで勉強したことが気になって、障害者介助をしながら差別と闘うサークルに入り活動している。

G、「約一年足らずの家庭の時間は、私にとってどの授業よりも一番人間的時間であつたし、今の私たちにとって必要なことを真剣に考えることができる有意義な時間だった。公害や性や男女平等や保育や障害者問題は、高三になって初めて深く触れた新しい授業であつたため、なかなか自分の意見の整理ができなかったが、とても心に残っているし、これからも考え続けていきたいと思う」。

先生の授業を受けて私は精神的にも、私自身の人生にもたいへん影響を受けました。大人になる時に、考えねばならない大事な問題が、今までは、子どもだからと甘えていて、もやもやとしていたものが、はつきりした感じできびしく受け止めることができるようになったし、問題について、もっと調べてみたいとか自分で実行してみたいという積極的な気持ちがあらわれてきたと思う。

それに今までは、女だから結婚して家庭に入って楽にやればいいっていう考えだったけど、それじゃ自分自身はどうなるんだろう? って悩んだこともありました。でも最終的に女としてではなく一人一人の人間として考えれば、親や兄弟や友達や夫や子どもとは別の自分自身の人生なのだという事に気づきました。生きているから私なんだって思うんです。

それだったら、結婚して夫や子どもを愛することだけに満足する

人間として、負けた女になりたくなくて、男が仕事に生きがいを与えるのと同じ気持ちで、私は仕事に生きがいを持ちたいと思います。

自分の仕事である教育に積極的にとり組んで飛びまわっている先生は他の先生たちにくらべたらずっとずっと美しいですよ。

静かで目立たない生徒だった。彼女とは一言も声をかわすことなく別れたのは残念だ。

生徒が肯定的に授業を受けとめて、主体的に授業に参加したのは、受験や就職を間近に控え、彼女らなりに切実に自分の授業を模索している時期にあったということ、三年生として精神的な成熟と社会的認識力も高まっている中で、緊迫した時期であったのが、却って生徒の中に入りやすかった。ということもある。また、科学的知識の断片を習得するにすぎない受験体制の中で、今の「教育」への反発からきた肯定という一面もある。次は批判的な感想である。

H、「つまらなかったというのが一番の感想、家庭というより保健が政経のような気がする。

それと何かにつけて文章を書かねばならないということ、そういうことが大の苦手の私にとって地獄でありました。それがなければ、こんなに家庭が嫌いになつたりしないでしょうに」。

I、「保育というけど私としては社会学ばかりしていたような気がする。今の時期、ただでさえ陰気なのに先生の授業をうけるともっと落ち込んでしまつて家庭科がいやだった。

四月のはじめ、生きがい……の質問の時、私たちは『今まだ探している最中です。先生の生きがいは何ですか』と言ったのですが、先生はその答はおっしゃらず、言葉をにごしてしまわれて、私

たちにすれば逃げていった、話をそらしたという感じがしました。

そんな感じを持ちながらでは、いくら良いことを教えていただいても、どこかにひっかかったままで、すんなりと受けとめられなかったのです。それでも考えることにおいては有意義な点も多くあったとは思いますが」。

J、「はつきりいつつまらなかった。大部分常識的なことばかり、誰もがそのことについて心の中では考えていたのではないだろうか。そしてそれぞれ、それなりの自分の意見を持っているのではないだろうか。授業を受けてきて、別に何も感じませんでした。時々、先生の考え方？と私の考えが違っていることがありました。ほとんどがそうだったと思います。

先生の考え方——といっても、私は先生の意見というものをあまり聞かなかつたように思います。ほとんどは、本、フィルムそんなものばかり、生徒の意見を聞くばかり、そんなものが、何がおもしろいといえますか。本当につまらなかった。あーつまらなかった。家庭なんて全然おもしろくなかった」。

この三人の感想は、ある理科コースのクラス女子六人中三人の意見である。かなりまじめに授業を受けていたと私には思えた生徒たちであつただけに意外だった。しかしこれらの指摘は一面真実をついている。

生徒自身に自分の問題を抱え込まずことのない限り、授業は教師の一方的なものになる。私は授業では生徒と「態度」をあわせることを重んじるが、彼らとはからむことがなく、むしろ当初の私への失望から、彼らは反発を持ち続けたままで終わってしまった。だから書かせることが、彼らにとって苦役になった。彼らには、この反

発をテコにして、今後、現実になぶつかってほしいと思う。

私は、生徒の感想をふまえて、また悩みつ、「家庭科は唯一の人間らしい教科であった」といつてくれた生徒もいたということに勇を鼓して、新しい出発を始める。

### 丙午と新一年生

今年の一年生は大部分が一九六六年、丙午生まれの女子だ。これはよい教材になる。『考える高校生』の特集記事「迷信は今も生きている」を参考に、一九六六年と一九〇六年では、前後の年の平均と比べて出生数の減少はどちらが大きかったか予想させる。結果は生徒の予想に反して、一九〇六年の一〇%減に対して六六年は二七・六%減であるのだが、産児調節という文明の進歩がかえって迷信に順応する手段となり、さらにマスコミの発達で、迷信を広めてしまふという結果になった。「丙午の女は不幸になる。夫をくい殺す」という迷信が今も根強く残る中で、みんなをうんだ親は実に勇気があったのだ」と私はのべる。

運勢や予言の魔術に支配される高校生は多い。早くから能力（一面の能力にすぎないのだが）の決定をしいられ、自分を見限ってしまふ、展望のない高校生の置かれた混沌とした状況が、ここにも反映している。何かに頼らねば自分の道を切り開いていくことのできない運命論者になっていく。

丙午生まれだからじゃ馬だ、女らしくないと周囲から吹き込まれ、育ってきている生徒にとって、逆に占いに免疫になることによって運命論を克服していくことは可能であろう。

このことは、「女に生まれたこと」道は一つ」と、積極的に既成の女の役割を受け入れていくことによって順応する。この心情とも

一致する。家庭科に期待するものは次のようなものが多い。「もっと女らしくになりたい。そのために女として身につけておかねばならないことや、良妻賢母の道を家庭科で学びたい。具体的にはもっと料理のレパートリーを増やすために、調理実習をたくさんしてほしい」。

### 生活を取りまく現実注目させることから

将来の主婦への役割の自覚を受け入れようとする生徒にとって、現実に触れたそういう生活認識はきわめて乏しいという一般的状态がある。生活体験の貧しさから、自分の根っこところで考える現実を自らが持っていないから、それを掘り起こすことはかなり困難なことだ。

ちなみに、家事労働への参加を聞くと、「親から言われると手伝う」という生徒がほとんどで、自ら家事の一端を担っているものは各クラス（四〇人中）一〜二名である。家庭での労働体験も親まかせであるため希薄で、受身な生活をしている生徒が多い。生活能力の面でも高校はまだまだ未熟だ。

だから日常の生活事象を客観化してとらえることはよほど意識的に働きかけないとできない。今食べているものが、どこで作られ、どんな流通経路を経てわが家の食卓にのぼったか、食品添加物として、何が使われ、安全性や価格や食糧生産とどう関係しているのか、などという消費財の生産・流通・消費のしくみなどは、彼らの意識に入っていない。彼らにとっては「関心のないこと」なのである。

受け身な思考や生活をしているのが大半の生徒にとっては、科学の概念と生活の概念はあまりにも遠いことだ。そこをつなげるのが

家庭科の役割なのだろう。

そのような生徒に対して、家庭科学習の冒頭に、「生活の現状把握」の学習を組む。しかも、こちらから提示するのではなく、新聞記事を用いて、生徒自身に協同作業、話し合い、発表などをさせ、自ら把握させることにしている。

新聞記事から現状を探る学習は、彼らのパターン化した生活認識の視座を変える契機として有効だ。新聞には典型的な生活矛盾が豊富に含まれている。記事を分類・整理することにより、生活課題を把握させ、それを家庭科の次の学習へと発展展開させることができるからだ。

#### 所要時間は八時間。

一、戦後の生活の流れを写真（資料集）を通して、簡単に触れる。そして歴史的な流れの中で今の生活状況への注意を喚起する。

二、学習班を設定し、班ごとに約一週間分（一人、一～二日分）の新聞を持参させる。

三、個人の作業として新聞から生活問題をもっとも象徴的にあらわしていると思われる記事を二～三点切り抜かせ、（料理法、ファッションなどのハウツウ的な記事は省く）、色ペンを用いて、切り抜いた記事の要点を把握させる（事実関係、問題点の把握）。

四、班で、自分の選んだ記事の概要を報告しあう。その上で、似かよった記事をいくつかの山に分けて分類し、マジックを使って模造紙にその見出しを書き、分類ごとにワクでくくり、適当な表現を工夫し、大きな見出しをつける（やり方について生徒は初めとまどうが、壁新聞みたいだね、といいながら喜々として、取り組む班が多

い。レイアウトは彼らの得意とするところだ）。

五、分類した山から一つの山をとり上げ、その問題について、原因、背景、問題の所在について話し合う。話し合いの結果だされた要点を模造紙に書き込む。模造紙は、各班の創意工夫を生かし自由にまとめさせる（模造紙に書かせることは、問題の山を大きく把握するのに効果的である）。

六、発表、模造紙を黒板に掲示し、次の二点について発表させる。

#### ①新聞にあらわれた生活問題

#### ②班が選んだ問題についての背景

七、それぞれの班の発表のつど質疑応答。他班の発表を聞いての自分の意見や感想はプリントに各自まとめて書く。

八、まとめとして、私の方でクラスで出された問題を再度整理しながら、家庭科の学習課題を明らかにしていく。生徒は「生活問題を自分はどう受けとめたか」を書く。

時間配分は一～三の個人の作業は一時間、四～五の班での作業に三時間、五～七の発表に三時間、八のまとめに一時間である。

新聞からどのように生活の現状をとらえたか  
作業のイメージをはっきりさせるために「豊かさの中にある貧しさに注目しよう」という言葉を添えた。

暴力、殺人、アル中、覚醒剤、自殺、心中、心身症など、複雑な社会機構の中で人間関係の病理や、教育問題、老人・障害者・環境問題、行政改革、福祉、防衛費の増大、国家財政の赤字、農産物自由化、物価、核兵器、戦争、失業、サラ金、災害、医療ミスなどから、自分たちにとって身近な婦人問題など、今の社会が抱える問題の多くが出された。

しかし背景について話し合った結果についての報告では、彼らのとらえ方は純粹であり、正義感に裏うちされているのだが、社会認識が未成熟なためか、とかく観念的であった。

例えば、「空き缶公害」というタイムリーな話題を取り上げた班は、結局はどこにでも捨てる私たち自身の責任というふうに、個人の心がけの問題に帰してしまつて、生産、流通、消費、廃棄、資源の問題として追求する目を持たなかった。

また傍観的に受けとめがちで、記事が内包する問題と自分たちの生活が、深いところで実はつながっているというとらえ方も、なかなかできない。

従つて、発表の際には、生徒の分析の甘さ、彼らの認識の矛盾を指摘し、問いかける。そして、このようにして出されてきた生徒の問題意識が、さらに次の学習へと発展するような働きかけをすることが大切だと思う。

生徒のまとめの中の感想には、「問題がありすぎる。しかし、私たちは自分に関係のないこととして目をつむつていた」「便利で豊かな生活だと普段、慣れ切つて生活している中に、いろんな問題が含まれていることがわかった」「生活に危機感をもった」「自分たちの身近な問題だ」などと、これらの生活問題が、初めて、自分の視野に入ってきたというのが多かった。また、「やっぱり、今の私には他人事にしか思えない。自分が大人になり、直接関係するようになったら、無関心ではなく、考えるようにしたい。しかし正直なところ無関心な人間になりそうだ。結局、人間は自分中心主義なんだろう。自分が不自由せず、それ相応なくらしができれば、考えることもしないだろう」という感想もあった。

#### 新聞を教材に使う問題

新聞記事を教材に使ったことは、導入として有効であつたと思う。生徒は、日ごろあまり新聞を読んでいない。政治・外交・経済面を読んでいる生徒はクラスにゼロか一人。社会面は約半分が時々読む程度である。評論・コラム・社説、ルポなどは、めつたに読まない。それだけに、かえつて新聞を読ませることは新鮮なことでもあり、彼らなりの発見もある。

生徒の家庭の九割近くは地元新聞を購読しているが、新聞社の姿勢によつて、記事の扱い方や取材の角度の違いは大きい。新聞報道を権威として、うのみにするか、しないかで、読み手の受けとめ方もかなり違ってくる。二・三紙は読み比べる姿勢が大切だ。記事には平面的な事実のみしか書かれていないので、記事だけを見て、問題を一般化できるかという問題も残る。

そういう問題について、生徒たちへは、簡単な指摘にとどめてしまったが、実は大きな問題である。新聞を読みとるには、総合的な学力が必要であることを痛感する。

生徒の感想の中に、社会科の授業のようだ、という指摘があつた。社会科の先生から、現行の社会科の中では、今、私などが家庭科でやっている問題などについては、とてもやれないので、家庭科の目で、追求してやつて欲しいといわれた。現場としては迂遠な教科論よりも、こんな現実からともかく出発したい。

△参考資料▽『考える高校生』八二年四月号 高文研

家教連編『たのしくわかる高校家庭科』あゆみ出版



# 新しい家庭科を創るために

\*\*\*大学では\*\*\*

柳 昌子

## 家庭科における教師性の発達と

### 教材づくり

—

教科教育はその受講生に、否応無く教職への問題意識を覚醒させる。教科の目標や内容を理解し、その教育方法を作り出していく仕事は容易でないことは、彼ら自身の教育実習生としての体験から知っている。それに従って授業を展開しなければならぬ教案（指導案）には、題材観や児童観・指導観が書き込まれてはいるが、たいへん指導書や担任教師の指導案モデルの引き写し的なものが多い。

実習に出る前の半期の間に、家庭科では基礎理論として教科論、教材論、現代の生活課題や子どもの問題状況、そして家庭科の現状と課題について概論的に講義している。だがそこで触れたはずの事柄が、具体的な指導案の中に生かされるということはない。部分的

でも、形式的でも引用されれば良い方である。

これらのことを踏まえて、教育実習終了後に開講する家庭科教育研究の演習では、題材観、児童観、指導観の総合的把握を課題としている。題材観、児童観、指導観などを書く場合、ともすれば形式にこだわり、抽象的・一般論的になり易い。あるいはまた、その三者の関係が不明確なことが多い。教科指導にあつては言うまでもなく、「なぜ」「何を」「どのように」教えるかということとは、相互に切り離せない事柄である。従って借り物の児童観や御仕着せの題材観をつなぎ合わせて指導することは本来考えられないことである。

教師に専門的力量が要求されるのは、高度化し増加する知識・技能に対応しながら、更に社会変動に伴って変化する国民の教育要求や子ども自身を見据えながら、教師自身の教育観を鍛え続けなければならないからである。指導案を書くということは、教師自身の教育観を具体的に表現すること以外何ものでもない。演習では最初に、現代の社会的状況の中で家庭科に課せられた課題を確認した後、五、六人の組で班を作り、自由に具体的な教材研究へと進む。

## 二

テーマ別あるいは題材別にグループ研究をするという授業形態を取り始めた当初は、演習の中心はどちらかといえば「何を」教える

か、ということにあった。しかし学生の、際限なく進む専門的知識への関心（教えるためには自分自身が知っていなければならぬ、という理由で）は、私の指導能力を越えてしまえばかりでなく、限定された時間内で、教材化への関心を薄れさせ、その時間を保障できないという問題を生じさせた。そこで二年前より、教材化の過程そのものに重点を置いた演習に切り替えていったのである。それには家庭科における教科専門科目の担当者からの応援が得られ、彼らとの提携が可能になったという事情にも支えられた。

教材化の作業が内容研究の努力を中断させたかというところではない。それまでの「自分が知らないから、もっと知りたい」という一般的な知的好奇心に一定の歯止めをかけ、「どのように教えるか」ということを常に念頭においた専門知識への接近となった。

大学生としての「わかり方」と小学生の「わかり方」は同じではない。自分の得た知識を教材化しようとする時、自分自身の「わかり方」があらためて問われてくる。「何を」「どのように」教えるかは、「自分がどのようにわかるか」と結びつくことによって、専門的領域の知識・技能の探究の方法に、一定の方向性を与えることになった。

### 三

教育実習の際に実習生の「発問」を記録していくと、授業の不慣れからくる発問のまずさというものの他に、指導内容の理解の不十分さからくるものがある。前もって予想した反応がもどってくるまで、同じ言葉で、同じレベルの発問を繰り返している。これは家庭科に限ったことではなく、どの教科の場合にも見られることだが、

家庭科の場合、「前もって予想した反応」そのものに問題が含まれる場合が多い。それは学習内容の理解の仕方に教える側と教えられ側の、それぞれが有している社会的背景が無意識的に反映され易いということである。

指導法といえは狭義に指導のスキルを指して言われる場合が多いが、子どもの内実に迫る指導をするためには、子どもをいかに理解するか、彼らの生活状況をいかに把握するかということが大変重要な課題となるのである。教育心理学・教育社会学などの方法論を習得することが、家庭科教師の指導能力にとっていかに大切なことであるかは、その能力の有無が、例えば家族領域の指導などにおいて、具体的な発問の質の差となって如実に現れることもわかる。方法論を鍛えるために必要なこれら教職関係の授業科目を、学生は実際には受講しているのであるが、その経験を各教科教育、少なくとも家庭科教育と結合させることに成功してはいない。あるいはその必要性についてさえ明確な問題意識を持っているとは思われない。そのため、題材観、児童観、指導観を総合的に追求しようとすると、演習の時間は総合学習の様相を呈してくる。受講生も多く、短時間でのこのような演習には、当然さまざまな問題が含まれてくる。

ともあれ、選定された一題材を、他者の引き写しでなく、自分自身のものであるために自分自身の指導案を書くことができる、ということに演習のねらいを置いてきた。部分的にはあるがここに、学生との演習の過程で得られた五つの事例を紹介し、諸氏の御批判を仰ぎたい。教師性の発達を、教科教育の中で担うというにしては、あまりにも微々たる成果ではあるが、教材づくりを通して少し

でもそれにかかわりたいと思っている。

#### ①「実感」の教材化―調査の意義―

日常生活に比較的観傍的な態度を取っている現代の子どもたちは、家族員の日々の生活の営みのために、特定の誰かがいかに煩瑣で多様な仕事を遂行しているか、について無関心である。「家庭の仕事」を書き出すという作業をやらせてみると、日常の再生産生活にどのくらいの仕事内容と仕事量があるかがわかっていない。

#### 事例「家庭の仕事」

「日常の家庭の仕事の多さに気づく」「自分が実際にかかわっている仕事の少なさに気づく」という学習のねらいを達成するための資料作りは、まず学生自身の生活の自己点検から始まった。さらに、休日の母親の観察、NHK調べの生活時間調査の分析と進んだ。そこから日常の作業項目一〇五項目を作った。非日常的他は、家族構成からくる特別な作業（乳児とか老人に対する）については、若干抽象的な部分も出てきたが、それでも、それぞれ二〇項目前後を考えることができた。ところで、「夕食の準備（総菜を作る）」と「カーテンを開ける」を同点で集計することに異議が出た。「大変さ」が違うという実感が含まれないというのである。そこで、項目ごとに作業時間、拘束の度合、要求される知識・技能の程度を勘案して家事労働項目の配点表を作成した。ある家族員の家事参加度は、その家庭に存在する家事労働項目の総合計得点に占めるその家族員がかかわった項目の合計得点の割合、という形で見出すことにした。

小学校の協力を得て行った調査では、核家族形態の場合、父親一・一、母親八五・五、六年の児童二三・九となった。直系家族の

場合、父親八・〇、母親六六・〇、祖母五八・五、子ども二九・六と出た。

やろうと思えば自分でやれる仕事は、男子で五六・二、女子で六八・四。実際の参加度は、一五・二と三一・九にすぎなかった。共働きが否かにかかわらず、母親への家事得点が高いこと、などが数字の上から読みとれた。学生自身、これらの数字を前にして性別役割分業の現実をあらためて考えざるを得なかった。

教科書には、家事労働項目が「食事のしたく」や「せんたく」「アイロンかけ」など比較的大きくくくられている。ここではそれを子どもに理解できる形で細分化し、一つひとつの項目の「たいへさ」を加味して数量化することによって、当初のねらいを達成しようとしたのである。調査票作成過程が、この場合重要な教材研究のポイントとなった。

#### ③学生の関心事と結合した教材づくり

演習の受講生には副免許で小学校免許を取得するための者もいる。彼らの「学習意欲」を喚起させる事は、思ったよりむづかしい。

#### 事例「朝食を食べよう」

いつまでもテーマの決まらなかつた体育専攻生たちが、朝食の必要性を教材化する気になったのは、彼らにできる体力テストの方法を家庭科の指導の中で利用してみようと考えたからであった。朝食を抜いて登校した子どもは昼食前の体育の時間に十分に力を発揮できるだろうか。そのこととのかかわりで「食べ方」に問題意識を抱いたのである。

三回食事をとる我国の食生活習慣の形成過程と、現代の新たな貧困現象としての欠食状況、そして成長期の子どもの朝食抜きの問題

は、文献や新聞の家庭欄などの記事から調べられた。しかし班員自身の中にある「我慢しさえすれば、朝抜きは大したことではない。慣れてしまえば何ともない」という思いは抜き難いものであった。

朝食抜きの、体力への影響を調べる方法として、PWC一七〇の体力テストが採用された。班員が被験者となり二つの自転車エルゴメーターペダリング作業を行う。二つの各作業負荷を、それぞれ五分間続けて終了直前の三〇秒間の心拍を測定する、というものである。朝食抜きの日は八時半集合、そのまま授業を受け、十二時半に集まって測定する。次週の同じ曜日の八時半に集合、全員同時に朝食をとる。前回と同じ時間に測定を行う。得られた結果から言えば、朝食を抜くということは、身体作業能を低下させるということである。前日の夕方から翌日の昼まで約一七時間空腹であるということが、成長期の子どもにとっていかなる意味をもつか。少なくとも身体的影響については班員自らの体験から、問題あり、という数字を作ることができたのである。彼らはあらためて子どもへの朝食アンケート調査を実施し、食事内容への関心を持った。更に夜食との関係、排便と生活リズムについても調べ、自分たちの指導案を作りあげることができたのである。

### ③素材の面白さをてこととしての教材づくり

家庭科の新しい課題である消費者教育の教材づくりをしたい、と言いつ出したものの、商品とは、品質表示の意味、流通過程の問題、消費者運動の成果や行政指導の現状などを文献で一通り見てしまうと、月並な形で「賢い、考える消費者の育成」に言及して終わってしまいうようになった。田中恒子氏の教材研究に「どらえもん鉛筆」という消費者教育の実践があるが、それを見せても「のってこな

い」。そこで「何を」教えたかを一応棚上げして「消費者である自分は、どんな状況に置かれているか」を、コマージュの面からさぐる、という課題を与えた。

### 事例 「私たちのくらしとコマージュ」

子どもの好きなテレビコマージュを、二つの小学校五、六年生に尋ねてみると、二〇〇項目くらい上がって来た。一五〇名中半数以上の子どもが選んだ上位のCMの、選択理由は、出演者の性格や所作の面白さ、可愛らしさによるものであった。商品自体の価値・魅力で選択されたのは、ゲームウォッチくらいである。そこで「今一番食べたお菓子」を尋ねてみると、子どもは迷うことなく菓子の商品名をあげた。それらは例外なくCMによって名の知れ渡った商品であった。

班員はテレビによるCMの総量を得るためにある日曜日の一放送局のものを終日見た。十七時間四分の間、交替でストップウォッチをにぎり画面を見続けた。正午までに四八分四五秒間、正午から十八時半までに四三分四五秒間、十八時半から二十四時まで五二分一〇秒間、計二時間二四分四〇秒の総CM時間量と、CM内容（番組名、CM提供会社、商品名）を得ることができた。

班員は、この身体を拘束しての馬鹿ばかしいほどの単調作業に一日中かわり合うことによって、初めて企業の消費者に対する優位性の一部を実感したのである。画面を通して無意識のうちに繰返し刷り込まれた商品名とそのイメージは、いつの間にか消費者の行動を一定方向に誘導していく。そのことを自分自身の中に見出した学生たちは、消費者教育の必要性、「何を」教えたかについて、自分たちなりのきつかけと方向性をつかんだのではないだろうか。

現代を情報化社会とおさえ、その中で行われるCM放送は、主に販売増強のための「売り手」の情報である点を強調し、そのことの自覚と商品に対する正確な価値判断の重要性を中心に教材観を書いた。商品化社会の中でCMに影響されて商品を買わされていることに気づいていない子どもたちの状況を、児童観に書いた。そして、単に商品に関する豊富な知識の習得ということにとどまらず、それを、生活の計画的、合理的管理能力の育成という文脈の中に位置づけた指導観を書いた。年間計画では、「計画的な家庭生活」の題材の中で「生活時間のくふう」と並べて「私たちのくらしとコマージュル」三時間を用意している。

#### ④「実験」と教材づくり

岩手の細川ミサオ氏が「からだの熱や力をつくる食物——ごはんづくり——」で試験管やビーカーを使った家庭科の実践を公開した時、みんなはその斬新さに目を見はり、やがて全国各地で模倣するようになった。演習の時も学生は何か目新しい試みを紹介すると、すぐ模倣しようとする傾向がある。義務教育段階以来、教師が手ばかり無く準備した教材・教具を使って予想された結果を導き出す、という学習方法に馴れきっており、自分で何か独自の方法を見出すということに抵抗があるようである。子どもにわかり易く理解させるために、また、子どもの既製概念を砕いて教師の教育意図を通すために、時として実験は有効な教育方法となる。しかしそれを自分で仕組むとなると、さまざまな問題に遭遇する。

#### 事例 「明るいすまい」

七九年度本校の附属小学校で、「快適なすまい——明るいすまい方——」の授業を公開した。勉強する時のよい照明の仕方を理解する、と

いうねらいを達成するために全体照明と局部照明の明るさの違いから、どの照明の仕方がよいか、を考えさせるものであった。その中で、問題のある照明の仕方は「目を悪くする」というのがあった。しかしそこには具体性がなく、実感として定着づけるような場の提示は必ずしも成功したとはいえなかった。

演習で「明るいすまい」に取り組んだ班員は、この附属小学校の指導案を叩き台として、子どもが「目が悪くなる」を簡単に理解するような方法はないか、検討し始めた。目が悪くなるのは、目の疲れにも原因があるのではないかということで、目の疲れをフリッカー測定器で測ろう、ということで見解が一致した。問題はどんな作業をさせて「疲労」を発生させるか、ということである。最初の試みは、ビーズ通し作業で、明るさと作業能率の関係はうまく見出せなかった。ただ糸を釣糸（テグス）、ビーズを透明に近い乳白色にして、照度をかなり低下させた場合に差が出てくる、という程度であった。疲労を発生させることは可能で、そのための所要時間も見出された。また、暗いところで本を読むと目を悪くする、ということに裏付けを得ようと、細かい字の本を読んで測定したが、短時間では欲しい数字が得られなかった。国語の辞書を読む、も失敗。乱数表を使って「9」を探すという作業で「暗い方が疲れる」という結果が出て一同ホッとした。室内灯と電気スタンド併用の一、四〇〇ルクスの時に比べて、室内灯の二二五ルクスの時、被験者になって班員全部のフリッカー値が低くなったのである。

「明るいすまい」の指導過程で言えば、わずかに数分で終わる一つの学習項目にすぎない、といえは言えないこともない。しかし、どのような場面設定をすれば無理なく、わかり易く子どもが理解するか、

ということにかけた意気込みは、彼らの教師性の発達に意味のある努力であったと思う。大学と違って義務教育の学校には、フリッカ―測定器は無いかもしれない。しかし彼らは多分、新しい方法を見出すために挑戦するだろう。

#### ⑤ 教具の手作りの意義

今日の教育産業の目覚ましい発展は、学校へも多大な影響を与えている。商品である市販の教材・教具は、教育効果をねらい、子どもに興味関心を引くさまざまな工夫で至れり尽せりの感がある。それらは教師間の力量差を埋めることに貢献するという一面もあるが、しかし教師のかかわり方によっては、教師自身の教師性を減少させることに手を貸しかねない、という面もある。何も教材教具の手づくり礼讃者ではないが、「思いを込めて教具を作る」という教師の活動を、情緒主義と一笑に付す訳にはいかない。思いを込めるということは、その製作中に、具体的な子ども動きや授業場面を想定する、ということ、指導計画や展開過程が教師の頭の中を駆け回っているともいえるからである。教具完成後、早く授業に出たいという教師の心情は、教具作りが授業づくりと結びついているからに他ならない。

#### 事例 「暖かいすまいの工夫」

暖房の面でカーテンがどのような役割を果たしているかということを見せる教具を作ろう、ということになった。そこに至るまでには紆余曲折があった。雑誌「暮しの手帖」(カーテンの吊るし方と暖房効果を灯油代に換算したもの)を真似たもの。女子寮での体験的な実験など。後者の場合、初めに室温の上り方を比べたがうまくいかず、寮の暖房が切れる時間から、設定された二つの部屋の室温の

下り方を記録する方法をとった。これを発展させて、簡単な模型を作ろうということになったのである。三つのダンボール箱を横になぎ箱の接する面にガラスをはめた。両側の箱が比較される二つの部屋で一方にカーテンを取りつける。裏面を取りはずした真中の箱には、氷を入れたボールを置き裏側から扇風機で送風する。両方の部屋を電気器で暖め、箱の上部に取り付けた寒暖計の目盛が三〇度になってから電熱器をとりはずし「木枯らし」を吹きつけながら「室温」の下り方を見ていく。短時間で大成功だった。立派な住居模型があつて、電球の熱で室温を暖めながらその上り具合を観察させる、という研究授業を見せてもらったことがあるが、発想の面白さ、手軽さなどの面で学生たちのダンボールの部屋の方がよかったのではないかと今も思っている。

自分自身の指導案を書けるように。実践記録を公開している教師たちのように。独創的でもしも核心をついた授業が時々でもいいから出来るように。文献資料の引き写しや、他人の考えた実験の安易な真似ごとで授業をするところからは、教師性の発達は望まれない。商品化社会の真只中で、手回ひまかけて教材研究をする中から、家庭科とは何か、学校とは何か、自分は何を教えたのか、といったことが次第に浮び上がってくるに違いない。遠回りかもしれないが、このような演習をやりながら、学生たちと家庭科の中心を作っていきたいと考えている。

(福岡教育大学)



## 視 点

### 〈五感としての知識〉

長谷川 孝

朝鮮（韓国）や中国などからのきびしい抗議で大揺れになった教科書問題は、「政府の責任では正措置を誠実に実行する」という日本政府の決定で、政治・外交的には結着した、ということになった。国民に向かっては、国を守る気概を要求し平和憲法の改悪を打ち出し、靖国神社への公式参拝や国家護持を実施しようとし、戦争行為を美化しようとする自民党・政府の指導者たちが、外に向けては「侵略」を反省し軍国主義化をしないと約束し、「侵略」の表現を削りとった。教科書の記述は「政府の責任」では正することになった、というのだ。

こうした結着で、今後の教科書問題が抱えざるをえなくなったのは、手続的には審議会への諮問という段取りがとられたものの、「政府の責任による教科書記述の改訂」という既成事実が残されたことである。政府、つまり国家行政権力が教科書の内容に責任を負うという「外交的な約束」は、国内においては教科書国定化につながる既成事実としてはねかえっていくだろう、と考えなくてはならない。

だいいち政府・文部省は、国民にたいしては、これまでの教科書の記述内容への教々の介入について、まったく「責任」を認めてはいない。国民の側からの批判は無視してきた姿勢を反省したわけでは

はないし、ましてや外交問題にまでなった検定のあり方を根本的に改革する気などもありそうにない。審議会がどう反発するか、などと期待してもはじまるまい。

「やっぱり、教科書には真実が書かれていなければ困る」し、「国が書きかえを強要した記述を元にもどさせることを、国に認めさせるべきだ」というとらえ方もあるようだが、たとえ「よい」ほうへの記述の是正であっても、国に教科書の内容への発言を許すようなことがあってはなるまい。政府や文部省に、「真実」そのものについての「責任」など、負ってもらう必要はない、と私はいいたい。政府や文部省の「責任」は、私たち人民が真実をつかみとっていくよう、制度のワク組みのなかで行政行為を着実に行い、その情報を公開することであって、真実とは「わたしの認識のプロセス」のなかに形成されるものだ、というべきではなからうか。

ところで、私にとって教科書問題を考えることで残された問題は、「教科書に真実を」というときの「真実」——それが知識として記述されるのだから「知識」といっても同じだが、その真実・知識とは教育にとってなにか、ということである。今夏の教科書問題で「活躍の方々」のかなりが、「教科書に真実を」と発言しているが、よく気軽に言ってくれるよ、という気がしてならない。

教科書の存在を前提にしようとするれば、教科書とは子どもらと教師が協力して「ボクらの真実」をたぐりよせるための材料なのではないか、と私は考える。たとえば中国侵略の記述にしても、当時の日本の支配者が「進出」などとなえて軍事的侵入と支配を行った「事実」と、いまわれわれが現代史の認識として「侵略」ととらえる事実とがあつてはじめて、歴史観（歴史の価値認識）が問われる、ということだ。だから私は、「侵略」と記述が是正されることで、教科書の授業の素材としての内容は、むしろ薄くなった、といえるようにさえ思う。「侵略」という結論だけを知識として教えられることになってしまふ、ということも、心配なことだ。

「進入」（そう記述を書きかえさせられた例があるかどうかではなく、教科書記述への権力的介入の表象である）が歴史観をくぐることで「侵略」となる、その認識のプロセスは、歴史的事実を知識として知ることよりもだいじだ、といえよう。侵略性を陰蔽して行われる（た）国家の行動を「侵略」と判断しうる認識の過程——「わたしの真実」をたどる歩みが大切であり、その過程をたどることのできるちからこそ、大きく育ってほしいのである。

「知識」とは、中央博物館の展示品のようにケースのなかに陳列されてあるものではない。いわば原子模型のように、複雑な関係のなかで動いている。だが、教科書に記述された知識は、まるで中央博物館の展示物のようだ、と私には見えてしまふ。

卑近な例を二つほど挙げて、知識について考えてみよう。

まず、四則計算は、生活にとって不可欠の知識か、という問題がある。だが、計算はてんでできなくても（割り算の知識などなくても）、電卓を上手に操作できさえすれば、当面の処生には不自由しな

いかもしれない。一方で、学校のテストでは0点ばかりの子が、遊びや生活のなかでは、みごとに計算するということもある。それでは、四則計算の知識とは、子どもにとって、または教育にとつて、いったいなんなのだろうか。

もうひとつは、家庭科の自由研究である女子中学生が調べた、コトワザ・ノートを見て感じたことだ。祖母や母親などから聞き集めたのだろうか。生活（とくに食物について）にかかわりのあるコトワザなどが、その意味や問題点などともに大学ノートに書きこんであり、たいへんおもしろいと私は思った。それとともに、たとえばおばあちゃんにとっては生活のなかで自然にやっていること（それをことばに表せばコトワザのようになる生活の知恵だが、知識として念頭におくことは、ほとんどあるまい）であるが、調べた女子中学生にとっては「知識」なのだろう（コトワザにいわれているように、なにかを行う）、とふと考えさせられた。

いま私たち人間は、肥大化した外部環境（人工的環境）疎外態としての知識に囲まれている。その知識があるていど以上になると、教育が必要になる（教育問題が発生する）のではないかと私は考えているが、現代はまさに「教育社会」になっている。しかも直接に「もの」（自然的環境）から学べる余地の乏しい人工環境過密の時代にあつて、知識への依存が高まり、教育は強迫的観念とさえなっている。そうしたなかで、四則計算の知識も、コトワザの知識も、自らが知識化された環境を切りひらいていくための「五感」の役割をもつのではないか。自然環境（もの）を切りひらくための手ざわりや肌ざわりのように、である。「五感としての知識」とは、教育においてどうとらえ返されるべきものか、難しい課題だと思う。



### 児玉 すみ子

私がカウンセリングなるものに興味をもちはじめたのは、何となく参加した夏期講習会で、ある講師が使った「受容」という言葉がきっかけであった。問題をかかえた人(生徒)の在り方があるがまま受容していくという内容は、私に、衝撃と驚嘆と疑問を起こさせた。「そんなことあり得るはずがない」と動揺しながらも、無条件に他人を受容する経験を味わったことがない私には、ぐざりと突きささるものがあつた。他人を批判し評価することにおいては、人後に落ちない人間で、それ故の生きにくさはあつたとしても、特に不都合もなく生き延びてきた自分の、これまでの生き方を根本からくつがえす呼びかけのようにも響いた。私を手こずらせた何人もの人たちの、どうしようもない在り様が心に浮かんで、それを「受容」するなんて、私に出来るはずもないし、やる気もないと思まきながら、自分には無縁であつた「受容」する世界に、心惹かれていくのを覚えた。いわゆる駄目人間を矯正したり、こらしめたりする、世間一般の通念とはまるで逆のやり方で、ほんとうに人間が変容するものなのか、どうしてものはっきりさせたい、納得したい、と私は思った。そして、その日から私のカウンセリング

グに対する挑戦が始まったのであつた。

カウンセリングにもいろいろな流派があるのだが、私は主としてロジャーズの、いわゆる非指示療法から入つていった。評価という権力を振りかざし、高所から、生徒に向かって、教え、諭し、命令し、服従させる教師の世界に、真向うから切りこみを入れるような非指示・非評価のカウンセリングの方法は、清新な刺激を与えた。しかし、そこまで徹底して生徒に自由をゆるし、その内的な力を信頼することができるか、といったら、やはり、自分の好ましく思う鑄型に生徒をはめようと努力してきた私自身には、思いもよらぬことであると思われた。しかし、こと自分の問題になると、これまでの行動や、発言や、生き方が、他人の枠組みによつて、批判され、評価され、服従を強いられた時、どんなに腹立たしく、いら立ち、不自由さに苦しめられたかを思い起こして、ロジャーズのアプローチに強く惹かれ、首を突込んでいくようになったのである。

いよいよ実際に研修に入つてみると、次から次へとカウンセラーに要求される条件が、私にはとても荷が重すぎると思ひ、がく然となった。受容、共感、純粋性、敏感性、安定感、統合、どれをとつても、私には欠けていると思われた。『技術』より『態度』が重要である「カウンセラーの人格との触れ合いによつて、クライアントは変容する」「カウンセラーは、人間に潜在する力を信頼し、どんな

人間の在り方をも尊重し、所有的でない愛に満たされていることが求められる」。そう在れたらとは私だって願うけれども、そう在れるかと問われれば、尻込みせざるを得ない。

それに加えて、私の接したプロのカウンセラーだって、ロジャーズの要求する条件を満たしているとは思えなかった。心理学的な知識は深く、クライアントの症状や問題の分析や分類は的確であったが、ある高みに立ってクライアントを見下ろしているような、専門家の傲慢さが私には感じられて、躰きの原因となった。一方、研修生は、そうした専門家のやり方をそのまま、うのみにして真似し、擬装し、クライアントについて知ろうとはするが、彼を知るには至らず、ましてや、自分自身を知ろうとすることなど、考えてもみない様子であった。自分をそうではないものに見せかける偽善が躰きとなって、私は、カウンセリングの研修を断念しようと思えた。

\* \* \*

そしてある時、事例研究会で紹介された事例との出会いが、その悶々たる感いから私を解き放ち、心ゆるがす内的体験をさせ、私のものの見方に決定的変更を迫ることになった。

### ヨーちゃん（3歳）のケース

主訴・言葉が出ない、行動にぎこちなさあり、自閉的傾向を示す  
○セラピストと身体的接触をせず、セラピストが頭をなでたり、手をつないだりすると、警戒を示す。

○おもちゃで遊んでいて興奮すると、異様な声を発し、「カ」「キ」「ク」「ケ」「コ」などと叫ぶ。

ヨーコちゃんの生育歴にかかわる家族関係

母（22歳）（別のカウンセラーが担当）

孤児。親戚にひきとられて、虐待された幼児期、少女期。中卒後、上京、17歳で結婚、すぐヨーコちゃんが生まれる。

父（23歳）同じく身寄りのない境遇に育つ。

結婚して間もなく、共働きをしていた町工場の工場主に見込まれて夫婦養子縁組。

義理の祖母（60歳）事情があつて子供を産めなかった。ヨーコちゃんを珍しがり、母親から取り上げて自分の手元に置く。

義理の祖父（65歳）裸一貫から叩き上げたワンマンの工場主。家庭では暴君。

母親担当のカウンセラーの話。

「ヨーコちゃんがカキケコと叫ぶのは、子供を生み育てたこともなく、工場の一隅に閉じこもり、世間との接触も絶ってきた祖母が、赤ちゃんの扱い方も知らずに、絵本ばかりを買い与え、アイウエオ、カキケコと、字ばかり教えていたからである。

母親は、幼少のころから母の愛を知らずに育った孤児で、思わぬ内に、自ら母となってしまうと、子供をどう扱い、どう愛したらよいかわからない。おどおどして、何も明らかにしようとしなかったが、少しずつ心を開いてきた。泣きながら、自分がどんなにつらい子供時代を送り、自分を残して死んだ父母を恨んだか、その思いのたけを、生れてはじめて打ち明けて以来、安定して来たようである。帰る時に、ヨーコちゃんと手もつながない、セラピストがヨーコちゃんを抱っこしているのを見て驚いていたのが、最近では、少しずつ、母らしい接し方が出来るようになった。愛するということ、母になるということすら、学ぶものなんだとしみじみ思う」。

ヨーコちゃん担当のセラピストの話

「意味のわからない奇妙な音を出すか、異様な声で叫ぶだけであつた子が、はじめて意味ある言葉を言ったのは、母親が、自分の感情表現をカウンセラーに怖れずにするようになったところと一致している。プレイ室にヨーコちゃんを迎えに来て、自分の方からさっと自然に手を握れるようになり、身をかがめて、ヨーコちゃんに両手を差し出し、『ヨーコちゃん』と呼びかけられるようになってきた時である。もう四歳になりかけていたヨーコちゃんが、初めて、『ママ』という言葉を発表したのであつた。それから、次々に、いろいろな言葉が言えるようになった。言葉が何から発するものであるかを、しみじみ悟つた」。

\* \* \*

この二人の話の聞いている内に、私は、私の内部に、驚くべき変容が起こるのを感じた。これまで後生大事に築いてきた私自身の枠組、その枠組に照らして他人を批判し、世間を糾弾し、人生の不条理に抗がい、絶望もしてきた。狭く頑なな構えが、がらがらと音を立てて崩れていくのを感じた。いたいけな幼児の上のしかかっている大人の生きざま、そこからにじみ出てくる毒の汁、一滴一滴が無垢な子供の心にじわじわとしみこんでいくのだ。だが、いったい、誰が、ヨーコちゃんの母を非難することができようか。彼女自身も又、幼いころから毒に犯され、伸びるべき芽も縮み、豊かに養われるべき根も枯れんとしたのではないか。その義理の祖母の悲しい生きざまにも、いったい、誰が石を投げ得よう。人と人との連鎖が作りあげる、この苦渋に満ちた人間の現実を直面して、私は、初めて、これを「受容」する以外にないと悟つた。この解くに

解けない、絡まりあつた人間同士の、そうとは知らずに、傷つけ合ひ、さいなめ合う世界に自分も又、確実にその一人としてかかわっていることが痛感された。「共感」するとは、この世界から目をそむけたり、逃避したりすることなく、そこに共に立つことから生まれるものであることを知つた。

ヨーコちゃんを前にして、ヨーコちゃんの母を前にして、この人間のなまの在り様を前にして、人はただ謙虚に頭を垂れ、共に立ち、心を差し出し、彼女たちのすべてを、まるごと、受けとめていくしかない。「こうあるべきだ」「何故こうなったのか」と、高所から眺め、論じて何になるろう。これ程までの制約の中に生き、もがき、あえいでいる人間の実存に、偽りの、うわべだけのカウンセリングなど、恥ずかし気もなく行えるはずもない。かと言って、私はカウンセリングの任にあらずと、ここで断念することも、もうできない。未だ、カウンセラーの条件を欠く人格であるにしても、私は見てしまった、知ってしまった、こんなに深く心動かされてしまった人間の現実、私なりにかかわっていきけるように、精進したい、そう思った。

これが、私のカウンセリング研修の、はるけき道、出発点であり、原点であつた。今まで躓き、惑い、悩み続けたものが、大きなカサブタとなつて、今や、ポロリとはがれたというのが実感であつた。何と、私は、厚着をしてきたことか。カウンセリングの研修ですら、もう一枚着こんだにすぎなかつた。しかしヨーコちゃんの事例が、取るに足らぬ私の煩いを一度に脱ぎ捨てさせてくれたのである。

(東京都立小金井北高等学校)

♥バグマン最期の映画となった「秋のソナタ」をあわてて観る。「ある結婚の風景」の監督ベルイマンによる母と娘のエゴの激突。国際的ピアニスト、家族を放り出しての愛人との生活、ひるがえって娘を独占し強権を振るう母親——「勝手な母」の過去を娘は告発し糾弾する。「母と娘……だからこそいがみ合い傷つけ合うのね。なんと恐ろしい関係なこと！」しがらみのいやらしさ、人間の孤独に共感しつつも、涙ながらに謝ってしまう母親のだらしなさに、私はあきれた。

♥確かに自己本位の母親なのだ。次女が障害者という重い問題もあって、長女の糾弾は正当性を持つ。双方を等価とし有無を言わせぬところに閃光が走る。だが、私はふにおちなかった。なぜこの母は開き直らなかったのだろう。「働く女」が子育ての手抜きを老境で突きつけられたとき、謝ることしかできないのか。逃げ帰った母に娘は和解の手紙を書く。「まだ手遅れとは思いません」と。これは母に言わせるべきだった。「遅くはない。自分の育ちと和解なさい。私のせいにしないでいい加減に大人になったら？ その上で助け合いいたわり合う方法を考えましょう」

♥映画を観ながら二月前のわが家のシーンを思い出す。話の発端は忘れた。娘がボロボロと泣きつつ叫び出す。「私はママのコピーじゃないわ！」「私がいつコピーであってくれと頼んだ？ あなたの選択は最大限に尊重しているわ。校則に反することでもね」「そうよ、表面的にはね。私が先生に抗議を

## 里雅舞十丙 バラード

(8)

するとき、確かに私がそう考え私の言葉で言っているわ。だけどその後で、ああ、またママに言わされちゃったと思うのよ」「だって言わなければいいでしょ」「それが言わずにいられない。いつもママを引きずっている。ママのいうイイ子であらうとする私が言ってしまう。でも、ママがいうほど私はステキじゃないわ。もっと悪い子よ」「じゃあ学

校の評価に乗って、勉強のできない子Ⅱダメな子と言って欲しかったの」「それは嫌だ。私にも誇りがある」「一体なにを言いたいのか」「私の中のイイ子と悪い子のどっちが本当の私なのか、私って一体なんなのだろうかとわからなくて苦しくて、消えてしまいたくなるの」

♥一瞬、ビビった。娘に覆いかぶさる母親の重圧を知ってたじろいだ。だがここで「そう、わかるわ。知らない間に私が重荷になっていたのね」ナンテ言ってみる。すぐにつけ上がつて次の刃を用意する。私はビシャンと言った。「甘ったれるんじゃないよ。私とはなにか、人間とはなんなのかなんて、誰もが苦しんで一生かかって追求するんだ。せいぜいもがいて本当の自分をつかむことね」

♥背を向けてニヤリとする。十六歳、自我の確立期だ。「反逆母子連合軍」の分裂が始まったのだ。今後ますます母と娘の違いがあらわになり「恐ろしい関係」になるのだから。「違いのわかる女」になりたいな。そのために自分を生きるのだ。母も娘も自前の道を歩いてこそ女同志だ。(門野晴子)



## 学習の 主人公たち

### 中学生から

#### 「世の中の親について」

堀 明美

中学三年間も、あっという間に過ぎ去ろうとしている。私は中二の終わりがらから、「二中の番」といわれるようになった。私の友達之母親からは、自分の子供が悪くなったのは、私のせいだと、よく言われた。又、「堀さんから電話がきても、出させませんから」とまで言われた。スカートを長くしたり、パーマをかけた、目立ったことは事実だけど、何でも私のせいにされるのは冗談じゃないと思う。

小学校のころの私は「いい子ブリッ子」だったから、友達之母親たちからも、しっかりしている子と信用されていた。でも、中学になったら、私の顔をいやそうな目で見るおばさんたちもいる。たかがスカート一枚長いだけで……と思う。自分の子供がどう変わったか知らないが、それを他人のせいに、どうしてするのだろうか。もし、私に影響されたとしても、私は影響させているつもりはない。その子次第だと思ふ。私は私でやっているんだから……。スカートを長くしたり、ゲームセンターに入入りすれば、不良、落ちこぼれ、つっぱり、「まあ、○○さんは……」など、そんなことばには、もううんざりしている。

#### 「先生とのこと」

真鍋由紀子

今まで出会った先生と、私は、わりにうまくやってこられた。その理由は、私がこの先生はこんな先生だと内心決めてかかって、つき合ってきたからだと思う。中学でも、私は授業やクラブなどで、必要な事以外は話さなかったが、先生の間では信用されていたかもしれない。

二年の十一月ごろ、吹奏楽部のコンサートで打ち上げパーティーの買い出しに、私を含め六人が出かけた。買い物も終わろうとした時、おじいさんに声をかけられた。初めは何を言っているのか、わからなかったのだが、要するに私たち六人は万引きとまちがえられたのだ。そのおじいさんは私たちが流し用スポンジを取ったと言いはる。そして、私たちが袋や上着をもって、確かめに行こうとし

た。私が、「ひどいことをするじゃない！許可もしないのに、人のものをもっていくなんて」と、いってしまった。

「もう帰ろう。いくら話してもわからない」と、私たちはその店を出た。悲しくて、みんな泣いていた。その夜、私の担任の先生と私たち六人の母親と、その店に行った。先生は私たちの強い味方だった。この時ほど、助けもらったことはないと思った。

この先生のお蔭で、私たちの無実が証明された。中学生が五、六人集まると、すぐ万引きと結びつける世の中もどうかしている。

先生と深い人間関係がつけれるのが一番いい。でも、どうしても、気の合う先生がいな場合には、自分から、積極的に働きかけて、接触していく努力が大切だと思う。このことはWeの合宿で出会った人々たちから、学んだ。

## 番場先生について

伊藤真希

番場先生とは、私が小学校三、四年の時担任だった先生である。私は先生に勉強を教わった記憶はあんまり覚えてないけど楽しくて、生徒の気持が、良くわかってくれる先生だと、印象深く残っている。私は、こんな先生が大好きで、だから今だにこうして、先生とつき合っていると思う。それに先生も、私たちのことを覚えていてくれて、夏休みの合宿によんでもらえたことが、最高にうれしい。それに、私だつてきらいな先生の所になんか合宿に来ないよ。そんだつたら、家で勉強やっていた方がいし、夏休みがもつたいたいもん。(中略)ここにすれば、なんか自分から勉強する気にもなれると思つたし、家で勉強もしないでゴロゴロしているより、なんか先生と一緒に夏休みを過ごした方が楽しいと思つたしね。これは、本当、真剣な気持だよ。それだけ、まきは先生が大好きだよ。不思議だなあ。だつてさあ、ここ三年間近く会ってなかったのに、まきが、先生に対する気持が小学校の時と変わってないなんて。それとも不思議じゃないかもね。だつて、まきたちと、先生の関係はそんなにやすっぱいもんじゃないよね。きつと、切っても

切れない関係じゃないのかな。まき、合宿に来て本当によかったと思っている。だつてここにきて、先生のいい所沢山、見つけちゃったし、又、先生とまきの関係は今まで以上に、深まったんじゃないかなあ……とまきは思つたから……。

先生、まきこれからも、ずっと先生のこと忘れないからね。一生つき合つて行こうね。先生もまきのこと忘れないで!! まきは、勉強もできないバカだけど、人を感じる気持ちは、みんなと同じだと思つたから……。

最後にまきは、先生と一生、おばあちゃんになつてもつきあいたいから、先にあの世に行つたらダメだからね。

## 犬の赤ちゃんの誕生

先生の家に来た時、犬のジュンのお腹が大きくて赤ちゃんが生まれるとは、聞いていた。その犬のジュンは、しば犬で大きさは、あまり大きくないりこうそうな犬だった。そして毎日いつ生まれるのかなあーと思つて、ジュンを見ていた。そしたら、八月二日の夜、勉強している時、へんなどぶねずみがないたような音がするなあーと思いながら、勉強していたけど、その音がなかなかおさまらないので、なんだと思つてだんなさんが庭へ

出て見ると、ジュンが、小さいピンク色で、茶色いちょぼちょぼした毛が生えている子供を生んでいた。まきたちも見に行きたかったけど、人間が見ているとジュンが子供を食べちゃうとこまるから、少しはなれた所でそつと見ていた。そして一時間くらいすると、二ひきめの子供が生まれた。生まれた時は人間と同じように、犬にもへそのおがついていて、そのへそのおを、ジュンが口でかみ切つた。その時のジュンは、なんだか今までのジュンとちがつてなんだかりっぱに見えた。だんなさんが毛布を持つて行つてあたためてあげた。ジュンもなんだか、よるこんでいるように見えた。次の朝、犬小屋を見ると子犬が、五ひきになっていた。私はまだ小さいジュンが、子犬をペロペロなめてかわいがっているジュンの姿を見て、感心した。子犬の色は、四ひき茶色で、一ひき白と茶色が交っているのがいた。その後、まながその白と茶色が交っている子犬をもらうことになった。その犬は、まなに似てふとつていてよく眠るが、ただ一つ似てない所は食べるころとろいことである。(日野市立日野二中、三年)

この三人のWe合宿体験記はまたの機会に。

(編集部)

26日間の合宿を終えて

番場 春枝

小学校三、四年の担任以来五年ぶりに、かつての教え子三人と、夏休みに我が家での合宿を行った。私の個人的な友人、鈴木晶子さんが担任している中学三年の女子生徒である。六月に鈴木さんがネフローゼで入院してから、生活指導面での問題を彼女から引き継ぐような感じで、彼らとの接触が再開された。

三人の生徒のうち二人は中学で「つぶばり」と言われ、鈴木さんの入院は、彼女たちの精神的支柱を失うほどショックを受けた。もう一人は、小学時代は、二人の親友的存在だったが、中学になってからは、グループも別で、いわゆるまじめな、地道にクラブ活動に熱中していくタイプである。今は全くグループが違うので、はたして、三人がうまくやれるかどうかも心配であった。私とも担任を離れて五年目、しかも居住地区も大分離れているので、かつてのように、うまく気持が通い合えるか不安があった。

合宿を始める前に、勉強を教えるという私の労働と、家事労働という彼らの労働を交換しようと契約をとりかわした。私の方の経済的事情は、給料表を見せ家計内容を示して明らかにした。

二、三日たつと、食事の用意は指示を与えるだけで、スムーズに進むようになった。盛りつけやメニュー計画も、楽し

みながらこなしていき、自然に、彼らの中で、分担作業になっていた。買い出しは私プラス生徒一人が交代でというように行った。その間、留守番の子はそうじ、片付けにあたっていくというように、家事労働のペースは、すぐできた。学習も、初期の日課表を越えて、夜中まで続く日が多かった。一人がやる気をなくしても、残りの二人ががんばっているということで、再びやる気を起こす場面もあった。

期間中、彼女たちの担任の先生や、同級生、私の友人たち、私の現在の教え子たち、彼女たちの母親などの来訪が重なり合い、多数の人たちが泊まっていた。他人の出入りが激しくなると、受験勉強の時間が減ったが、ふだんの学校生活ではできない、徹夜の話し合いが、じっくりとされた。

我が家への訪問者が帰り、後片付けがすむと、みんなで「やれやれ……」とため息をついて、落ち着きをとりもどすこともあった。

私と夫とのささいな口論の場面も彼女たちの前で遠慮せずに見せた。そんな時ちらつと目を伏せ、その場に居つらいムードになるとその表情は、私の息子が見せるそれと似ていて、思わず、笑ってしまった。彼女たちは自分の家から我が家に来る時、「ただいま」と玄關に入ってきた。26日間、同じ屋根の下で、共に、食べる、働く、学ぶ、排泄する、眠る、話すという単純な営みの中で、家族という意識が共有化されてくる不思議さだ。

「テレビがなくても生きられるし、暇にはならなかったね」。  
26日間、テレビがない家で過ごした彼女たちの実感である。  
テレビより生々しい一人一人の人間の話の方が、よっぽど刺  
激的だったのかもしれない。人間同士、自分の気持ちや考え  
を、ことばや表情で伝えていけば、わかり合えることもある

んだということを、彼女らも、そして、私も学んだようである。  
今、26日間の合宿を終えて、まよめの意味で文集をつくり終えた。  
毎晩、虫の声を聞きながら、何回も何回も読み返している。

(福生市立福生第七小学校教諭)

## 優生保護法反対論

森 冬美

政府は、今年三月十五日、参議院予算委員会で「国にとつ  
ての生命について」を問題にした。村上正邦議員(自民党)  
と宗教団体、生長の家発行のパンフレットから、その表現を  
引用すると『大量中絶は民族の衰退を招く』『胎児の生命保  
護は、国家権力の義務である』という結論を導きだしたので  
ある。そして、一九七四年に女性および障害者などの激しい  
反対にあい、審議未了廃案となっていた優生保護法「改正  
案」なるものが「……法案は、通過するところまでいかなき  
や、政府の権威にかかわる……」というメンツの問題となっ  
て、九年ぶりに再燃。七月十三日生命尊重の日と優生保護法  
の「改正に関わる論議」が抱き合わせとなって登場した。

以下、前回審議未了廃案となった内容と今回のものを比較  
し、合わせて同日の議事録を資料としながら分析したい。

前回の政府の改正案とは、優生保護法の内容から、経済的  
理由の五文字を削除し、人工妊娠中絶の適応事由として「そ  
の胎児が重度の精神又は身体の障害の原因となる疾病又は欠

陥を有しているおそれが著しいと認められるもの」を新たに付加。  
又、優生保護相談所の業務として「適正な年齢において初回分娩が  
行われるよう助言及び指導する」という内容が盛り込まれるもの  
で、その実質とは、身体的理由を文言として残したものであった。

今回の政府の改正案とは、経済的理由の五文字のみ削除するもの  
となっている。そして今回の政府の改正案の理由とは「何といつて  
もやはり胎児の生命尊重というものをただしていないから……最  
近、青少年の性非行が著増……人工妊娠中絶がふえている……生命  
の問題は、いわゆる人口問題と宗教問題……中絶手術は、家族計画  
の失敗の後始末に利用されている……法の曲解は許されることでは  
ない……」(村上正邦)等。そして、鈴木首相は今後の方針につい  
て「……国家はすべからず国民の間に健全なる宗教心の勃興するこ  
とを奨励していく……」と述べた。

優生保護法を改めようとする政府の意図とは、国にとっての生命  
について大すじでこのように考え、実行しようというものであるら  
しい。つまり政府は、宗教心の勃興することを奨励すれば、生命は



尊重され、青少年の性非行がなくなり、家族計画の失敗の後始末に人工妊娠中絶手術が利用されなくなり、したがって法の曲解はなくなり、世界にも通用する、というのである。

字句としては響きがよい「生命尊重」という言葉に、多くの人たちが「そうだ／＼」とうなずきがちになる。また、現実的な認識の甘さが討論の不足などから生じ、一層問題がある。



今回の改正案には、宗教観念が多く援用されている。父母の縁、受胎告知、生命尊重、自然人、自然人の直線上にある母親の胎内などで、「妊娠した」ことを「父母の縁」という表現におきかえ、更に自分を「自然人」と称する。そして自然人の延長線上に「母親の胎内」があると考えるのである。

また、日本国憲法十三条前段の「すべての国民は、個人として尊重される……」に、西ドイツの裁判所のある判例「……胎児の生命保護も国家権力の義務であると判断……」という文言のみを抜き出して援用し、「……日本国憲法十三条前段についての解釈と同様の解釈をとられたものと理解してよろしいですね長官（政府委員、角田禮次郎）、そういうふう」に理解して」（村上正邦）と、「胎児は国民」ということを位置づけたのである。

このような解釈は、大時代的な万世一系図と重なる。つまり、近代日本を支配してきた、天皇を宗家としての家族制度、家族国家観、天皇の赤子（子どもたち）の図式である。それは、戦前における天皇の赤子から、国家（国にとっての）赤子へと形を変えたものにほかならない。

これらの制度に忠実である、ということが自然人であるのならば、それに対置しているのが、人工的の妊娠中絶手術であり、それを攻撃する手段が随胎罪で、今その強化ということを政府が声高に言っているのである。



優生保護法の改正案は、「……早急に取り組みたい」という森下元晴厚生大臣の答弁から、現在すでに中央優生保護審査会で「改正」にむけての検討が進められている。ところで、政府がこの十年間特に熱心だったことは、国にとつての国民を、個々人として判別し、監視し、国にとつての利益を追求するために、市町村の自治体をはじめ、広範な分野にコンピュータ管理システムを完備することであった。個々人の思想・信条に対する保護対策を行わない政府の国民管理の内容全てが、個人生活の侵害につながっている。

政府の「胎児に直接干渉し得る」という考え方は、母子手帳の項目をデーターとして監視できるところからきている。母子手帳は、一昨年、先天性異常児の早期発見、早期治療を目的として、項目を増設した。そこに今回は「胎児は国民」の図式が持ち込まれようとしている。医療および保健の分野でのコンピュータ化への傾向は、一元化への中止を／＼と、多くの人たちが批判しているところである。まさに政府は「個々人の性の方向性」をも支配・管理しようとしているのである。

政府は、こうして行政を国民支配の手段とするのと、並行して、宗教観念教育によって、現在生きている子どもたちに、「国民のための国家ではなく、国家あつての国民である」、「胎児もまた国家にとつての赤子なのである」という思想教育をしようとしている。

優生保護法とコンピュータ管理システム行政、宗教観念教育などが補いあう日本の社会状況とは、障害児の出生を妊娠判定の段階で予測し、福祉予算の増加をおさえるために政府が「女性には産むな」「子どもには生まれるな」と強いるもののである。羊水、尿、血液などの検査、超音波断層装置検査などのデータ結果によって、胎児に異常を発見した場合、優生保護法の身体的理由の文言に従えば、中絶手術の対象者であると思われる。政府は「優性」と考えられる者のみの出生を認めることによって、「国にとっての生命」つまり、国家にとっての活力を期待しているのである。

◆ 本来ならば、現在生きている女性と男性と子どもたちが、人間らしく安心して暮らすことができる社会的な経済の保障、環境の充実をすることが急務である。がしかし、国家優先の考え方に立つ政府は、生命をはぐくみ、育てようとする女性と男性が切望している事柄を受け入れ、実行するどころか、その主張を聞くことすらしない。政府が、新しい生命を管理することなど許されるべきではない。個々人の「性」の方向性<sup>性向性</sup>に干渉する権利は、政府にはないのである。

一方、今私たちが問題として正していかなければならないことは、優生保護法「改正」で、経済的理由の五文字を削除するべきであるという点のみに目を向けた法改正の論理である。今回政府とその一部門である厚生省は、優生保護法から経済的理由の文言を削除することをめぐって、実にデタラメな論理を展開させた。

まず優生保護法第十四条で定めている指定医について「……医者に経済的理由を判断させることがどうなのか。……私はどだい無理なことじゃないかと思えます。患者のいうことを、うのみに信じて経済的条項に○印をつける……」（村上正邦）と指摘した。

その答弁は「……身体的理由、経済的理由、この二つに分けた統計は、厚生省にございませんが……総理府が昭和四十四年にいたしました『病弱で、産むと健康が害されるおそれがある』というのが24%ございました。『生活保護を受けるほどではないが、生活が苦しい』が7%あるわけでございます。そのほかにまだ『計画外の妊娠だったから』とするものが46%ございます……ただ医師がこの判断をする場合につきましては、一つには、現在生活扶助、医療扶助を受けているか、あるいはまたこれと同等な生活状態にあるということ、産むことによりまして、あるいは妊娠を継続することによりまして、母体に著しい影響があるということになっておるわけでございます……もう一つは、生活の中心者本人が妊娠した場合、あるいはその世帯が妊娠の継続または分娩によって生活が著しく困難になってしまふ、こういう経済的理由があるわけでございます……いずれにしても経済的理由というのは、母体の健康が損なわれるおそれがあるということが一つの要件でございまして、法的には単に経済的な適用というだけではなくて、身体的な適用というところでいま運用しておるわけでございます」（政府委員、三浦大助）というものであった。（傍点は筆者）

本来ならば、女性が妊娠を継続させて、分娩し、子育てするという場合に、からだの健康と生活者として生きる経済的保障のいずれもが社会的な要件といえる。がしかし、村上正邦議員は「……計画

## 市民として

外という、これは入らないんじゃないですか、中絶の理由に。——わからないなら申し上げる。家族計画の失敗の後始末ということでしょう。言うならば。これは人工妊娠中絶が利用されていることになるんですね。法の曲解なんですね。……刑法第二百十二条は何が規定されていますかという、まさしくその墮胎罪に当たるのではないか……」と述べ、女性の母性（妊娠し、産み育てる性）に対する保健や経済的自立を保障する方向性については一切語らない。

このような村上正邦議員の主張に対しては「……墮胎罪で起訴された人員は大変少のうございます……また告訴も告発等もないというのが実情……」（政府委員、前田宏）

「……人工中絶件数は、昭和三十年の約百十七万件を境に毎年減少……人工死産届け出件数は、昭和二十七年の約十一万件をピークといたしまして年々減少しております……」（森下元晴厚生大臣）と述べるなど、実態に即した人間の性の方向性というものは、統計によって正確に把握し得ていない。そして何より政府には、優生保護法の経済的理由を削除する論理が明確でないのである。

結局このままでは、経済的理由の文言を削除しかねると見て（？）、次に村上正邦議員が援用したのがマザーテレサの言葉であった。この箇所では、マスコミなどを通じて報道された『日本は豊かな国、しかし墮胎を許している』という言葉を引きいたと考えられる。「……もはや経済的理由、この文言は（経済大国日本として？）世界に通用しない……」（村上正邦、（ ）内は筆者注）。さらには、青少年の性の非行化

というのは、安易な考えから生じているものであり、優生保護法の「経済的理由」というこうした文言があるから、金さえ出せば中絶ができるんだと、そういう私は考え方につながっていくんじゃないだろうか、こう考えます……」と述べた。

今年三月十五日の参議院予算委員会では、かなり宗教観が援用されたことでもあり、マザーテレサの表現にも触れておきたい。政府は、マザーの「全ての宗教は生命を尊ぶという観念」を都合よく利用した。が実は、マザーの考え方は必ずしも日本政府の利益となることばかりではない。つまり、政府は、人間の性の方向性について語るとするならば、当然なすべき福祉政策というものが、妊娠や保育を含んでいるのだという認識に立たなければならぬ。ところが、マザーがその点について一貫性のある論理をもっていたにもかかわらず、政府は、その点を全く了解してはいない。単に、感傷主義的に援用したにすぎない。

マザーは、宗教上の立場から、<sup>ミユカス</sup>の観察方法と禁欲方法しか指導ができないが、避妊によって女性のからだを保護することには熱心だ。ところが、この方法は確率の上でおぼつかない面がある。マザーの立場としては、宗教上の立場から墮胎を許すわけにはゆかない。それで、妊娠した場合には産みなさいという。そして、世界に百二十箇所ある「ホーム」に引きとって育てると、保育上の対策を持ち実行に移してもいるのである。

こうしたケアというものは、本来政府が福祉行政を完備し、女性の生活を経済的に保障することによって解決すべきことである。ところが、日本政府はこうした点について方策を見直し、改善をめざすとは決していなかった。

それどころか政府は、優生保護法の「改正」理由を「国の生命の問題」へと論理展開していった。国務大臣、田辺国男、桜内義雄、中川一郎の各議員が、建国記念の日の式典についての感想を述べ、鈴木首相は「建国をしのび、国を愛する心を養う。……その日は国民がひとしくそれぞれの立場におきまして祝意を表しておるわけでございます。……それが年とともに国民に浸透し、定着してきておるということを感じておるわけでございますして、大変結構なことだと喜んでおるわけでございます」と述べた。

今年三月十五日の参議院予算委員会とは、政府各議員が、

## 私と夫と娘と

四、五日まとめて休みをとろうとすると、その前後は猛烈な勢いで仕事をしなければならぬ。電話をかけまくり、原稿を書きながら、街の中を文字どおりかけ抜けて、ホッと時計をみると、もう新幹線の最終便の発車時刻だ。

あわててとび乗り座席に腰をおろすと、いつの間にか眠くなる。ひと眠りするともう名古屋。ホームには三週間ぶりの夫の顔がある。「コンニチワ」なんて、私。ちょっと照れちゃうなあ。

この四月、夫の名古屋勤務が決まった。私は東京・立川で小さな編集プロダクションをやっている。仲間もふえ、仕事もようやく軌道に乗ったところだ。夫の転勤ごときで、これ

「国にとつての生命」の問題を、以上のごとく認識したのであり、そのために七月十三日生命尊重の日制定案と優生保護法「改正」にかかわる論議が抱き合わせで必要なのであった。

現在こうしてこの一連のことがらを分析して得た私たちの結論とは、政府の「優生保護法改正にかかわる論議」に抗議することである。そして、一方的に人間を支配・管理し、優性・劣性と規定する優生保護法を撤廃することを要求することである。同時に、現行刑法第二一二条「堕胎ノ罪」の廃止を要求することである。

(からだのおしゃべり会)

## 桜井 陽子

までの苦勞をバーにするのは真つ平だ。そこで私は娘にたずねた。「どっちへ行く?」

娘は「どっちでもいいよ」とのんびりしたもの。私はすかさず、「それじゃあ、父子家庭をやってごらんよ。案外面白いかもしれない」夫も「そうしようか」

これで決まり。以来、小学校四年の娘は名古屋で父子家庭。私はそれまで三人で住んでいた東京の借家で一人暮らしの毎日だ。そして、月に一、二度の通い妻。

娘、夫、私の三人は、これが自然のなりゆきとばかりに選んだ父子家庭と母親身居残りであるが、世間さまは結構うるさい。

「お嬢さん、かわいそうね」から始まって、「ダンナに女ができるわよ」

のご忠告。揚句は「おタク、離婚？」

共働きで頑張っている友人でさえ、「子どもはやっぱり母親のそばがいいんじゃないかしら」と、私たちの選択に否定的だ。もっとも娘にこの話をしたら、「どうして。私はどっちでもいいよ」とアッケラカンとしたものだ。

私と夫は娘が生まれたころから、家事も育児も二人で共に担ってきた。共に担うとは、どちらかがどちらかに協力するということではなく、二人共が主体的にかつ具体的にかかわるという意味だ。だから夫の家事当番の日に娘の遠足が重なれば、夫は少し早く起きて娘の弁当を作る。学校で雑布が必要とあれば、慣れない手つきで針をもつ。普段の料理、買物、共同購入の当番、洗濯などももちろん私と折半だ。

「男にも家庭科が絶対に必要だ」とぶつぶついいながら、週

に三日はクッキング。あまり器用な人じゃないから、はじめは随分と時間がかかった。それでも、人間辛抱だ！ 最近では冷蔵庫の残りものをきれいに片付ける料理を、しかも手早くする。

娘が「どっちでもいいよ」というのはこうしてみれば、ごく当たり前のこと。私と夫との間には、ほとんど役割の差がないのだから。差があるとすれば「ママははがらかで、ものをはっきりいう人、パパはやさしくて恥ずかしがりやさん」という性格的な違い。娘にいわせれば「あとはおんなじ」ということになる。

夫の名古屋勤務は当分続きそうだ。娘は「中学生になったら、ママと住もうかな」という。私も「どっちでもいいよ」といいながら、でも、家族って一体何なのだろうかと、しきりに考えるこのころである。

(フリーライター)

## 重度障害者の叫び

重い障害を持ちながら、重度障害者の自立を目ざす山鳩の会を主宰し、会員の交流をはかり、文集を出版するなど、地道な活動を続けてこられた森章二氏から、「重度障害者の叫び」と題した生活実態調査報告をいただいた。いま、森氏は、お母様が高齢で介護が無理になったため、三十八年間一歩も外に出たことのない故郷岐阜を離れ、

## 重度障害者の自立をめざす

### 山鳩の会

熊本の友人のお世話を受けておられる。そこに、日本の福祉の遅れを見る、と森氏は言われる。

岐阜市内に住む重度肢体障害1・2級の方一、四三八名に郵送したところ、数日の間に三〇五通があて先不明でもどってきたという。大変な苦勞の末、医療面では、通院、待ち時間のこと、歯科診療、リハビリテーション等々、介護面では、主な介護者である肉親の健康管理、

## 市民として

一時入院、一時収容制度の充実、外出時の介護ボランティア確保などが浮かび上がった。障害者自身によって行われた調査であるだけに、熱い血の流れているのを感じる。紙幅が乏しくて残念だが、その一部を紹介しよう。

・被調査者は、五〇歳以上が七五％を占める（全国的にも障害者の高齢化が進んでいるという）

・無職は、男六一・二、女七八・七％で圧倒的に多く、重度障害者の就業が保障されていない日本社会の現実を物語る。有職者も手内職的なものが多く、一般企業に雇用されている人は非常に少ない。

・家族状況は、単身者が僅か四・九％、二世帯（四五・四）三世帯（二五・八）が多い。岐阜市は核家族化の進行が激しくないことと障害児（者）を家族ぐるみで支えねばならない社会施策の遅れとが原因であろう。

・通院先は開業医が多い。これはタクシー利用か、介助者に運転してもらわなければ病院に通えないという事実からくる。

・医療上の問題として、歯科、耳鼻科などの医療が受けにくく、リハビリテーション的治療を六八・八％の人が望んでいることが挙げられる。緊急時の医療体制の制度化を求める声も高い。

・介護者は、下表の通り。主に母親と配偶者であるが、「妻」に対して「夫」は殆どの比率である。また介護者の高齢化、健康問題が表出している。

	男性の主たる介護者		女性の主たる介護者	
～19歳	母親(63.2)	父親(26.3)	母親(58.3)	
20～49	母親(31.3)	妻 (20.3)	母親(25.0)	夫(13.5)
50～	妻 (48.9)	嫁 ( 5.9)	夫 (22.1)	嫁(20.2)

・介護についての要望では、「介護者の健康管理制度」（二一・六）や「家屋改造費の助成」（二六・〇）に比し「家庭奉仕員、介護人の派遣」（二〇・一）「介護ボランティアの訪問」（三・九）の要望が少なすぎる。介護問題の対策を家族内での介護の強化に留めているが、これは行政施策の上で、社会的援助が立ち遅れていることの反映といえるのではないか。

・ほとんど外出しない人の、外出しない理由は「トイレが心配」（一六・五）「介助者がいない」（一一・九）で、外出する人の外出時の方法は「介助者の運転」が最も多い（三二・七）。介助者の確保が、日常生活の保障にも、社会生活空間の拡大にもつながる。よく行くところは、病院や理髪店、美容院だが、行ってみたいところには、ホテル・旅館、映画館・劇場、デパート

など。  
アンケート調査を担当した吉田朱美氏は、養護学校の一年先輩が母親と心中事件を起こしたことから「死を選ぶ前に声を出してほしかったと思った。けれども誰に向かって言えば良いのだろう。声を出せば心中をふみとどまらせ、親子が健康に安らかに暮らせる術はあったのだろうか。声は吸い込まれるようにして消えてしまうだけだろう。そんな気がした」と書いている。



楽しくて、満足したと思います。企画して下さった半田さんに心から感謝いたします。

ブツブツ文句を並べてばかりで、行動する努力をしない私には、永畑さんの講演は強力なストリートジャブでした。「学校のPTAで意見を出しても体制の作った常識に流されるだけ。みんな少しも解っちゃくれないんだから」でなく、私の真剣さが足りないし、努力も足りないんだというところがよくわかりました。短絡的に考えずに地道に根気よく行動しようと改めて心に誓いました（そこにだれからも学びとる柔軟な気持を持つ努力をしながら）。

◆まず第一番目に、八月二十一日、二十二日の合宿のお礼を一言。参加の意志はあったものの、少なからずの不安も持って青梅線に乗りました。自分の学習のために思いきり自分をさらけ出して相手にぶつかり、そこから学びとるしかないと考えて。初日の永畑さんの講演。もうこれを聴くことができただけでも、たとえすぐその後帰ったとしても（実際はその後も本当に多くのことを勉強させていただいて、そしてとても楽しくて

昨日「We」十月号受取りました。はやる心を押えながら早速手に取りました。今月のテーマは「人間の自立」。私が毎日思い悩んでいるのも私も含めての「人間の自立」。トップの奥田さんのところで早くも共感を持ちました。ただ一つ「はたらく」ことはイコ

ル賃労働のようにしか読めなくて残念でした。「はたらく」ことイコール生活に必要なものを得るための行動で、空腹を満たすためには食べものを作ることを、寒さを防ぐには住いを作り衣服を作ることであって、賃金を得ることはその手段の一つであり、イコールとは思えないのですが、自分の不得手な部分を他人と補い合うこれまた一つの手段に貨幣があると考えています。もちろん補い合う時に感謝をしながら。これも奥田さんの言われている「人間の自立」かもしれないですね。私が勝手に解釈しているのかも知れません。読みがえていたらごめんなさい。

いつも楽しみにしている名取さんの家庭科。読んでいくうちにここではなぜか何時も悲しくなってきました。この春から五年生になった娘の家庭科をぬきにしては読めないから。ほとんどの子供たちがおそろいの道具を学校で一括購入して習った運針にボタンつけ。男

の子は青い布、女の子はピンクの布で。そして、学校で一括購入した農薬つきの野菜で作ったサラダ。キュウリは20g、トマトは30g、キャベツも30gというようなサラダではお腹も四角に硬くなっでしまいうすです。（明朝排泄す予定のウンチも何gと決まるのでしょうか？）

やはり今度の懇談会で皆に聞いてかけてみようと思います。疑問を保持ったり意見がある場合、胸に納めてしまうことなく、そして身近にグチルことなく意思（中野さん！この場合私はやはり「志」ではなく書きたいのです）を表すことにします。

山崎さんのつぶやきを読んですごく惹き付けられました。優しさ（全くこれは切り離すことのできないものですが）グングンと感じられとても暖かい気持ちになりました。

最近読んだもので、大牟羅良著『ものいわぬ農民』があります。

まえがきに『ものいわぬ農民』と言われ、改まった集会の席上や、いわゆるおえら方、背広族などと言われる人々にはものいわぬ農民―その農民も、常にもものいわぬ農民でなく、いりり端では巧まず飾らずに、自分たちの言葉で自分たちの生活をいきいきと語っていました。農民のよろこびや悲しみ、なげき、それは一体何であるか、それがもつとも素直に顔を出しているのがいりり端だと言つてよいでしょう。だのに、そのいりり話に誰が耳を傾け、誰が活字にしてとり上げてきたのでしょうか。そういう不満が私にこの本を書かせた動機でした」とあります。この『ものいわぬ農民』に落ちこぼれや非行と決めつけられた子供たちや、働きバチといわれるサラリマンたち、専業主婦と呼ばれる人たち、そして熱意がなく体制的との評価を受けた教師たちもみんな置き換えることができるのではないのでしょうか？ 表現力を持て

たインテリたちの他に、このものいわぬ農民の声を（私もその一人です）聴き合えたらどんなにかよいでしょう。山崎さんのつぶやきの中から、そして時を少しもどつての合宿の時の番場さんの発言の中からその実感が感じられます。私がWeを好きなのはこのことがあからず明かされていくからでしょう。じつと読まないで全然消化できないのでまだ半分位残っています。全部読み終わるとまた感動を覚えることでしょうが、今日はこの辺で鉛筆をしまします。

△追伸Vなぜか今月号は誌面が明かるいような気がします。どうしてですか？

（埼玉 近江谷まつ美）

◆雨の中、しっとりとした甘みの香りを、金木犀が贈り届けて下さいます。秋の幸の、美しさ・おいしさに心のはずむこのごろです。十月号のWeすてきでした。「新しい装い」ってどんなのかなー

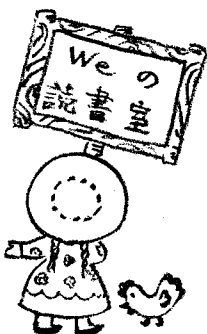
と、扉を開けました。S美さんの文章に心ひかれました。今もなおある私の差別意識に気づかされたようにも思います。

「中学校では」の熊本家庭科サークルのみなさんの文章、いつもいいなあ―と思っているのですが、あの会話の熊本弁が生き生きして、すてきです。私が高校生の時、国語のペーパーテストに、方で解答を書いてしまい、評価されなかったことがあります。確かに、地方を出たら通じない方言は大学入試などの際は通用しないものでしょうが、方言だって日本語だぞーなどと思っていました。（東京 落合伸江）

◆十月号「自立とは」大変興味深く読ませていただきました。幅広い視野に立って、他の自立も考え、地球市民的な自立まで考えを及ぼしている論文に、自分の足元からしか物を見ない、というより、足元しか見ない考え方を反省







「かつて廁（かわや）は、女がひそかに泣く場所だった。胸にあふれる思いを、女はことばにし得ずに泣いた。涙は、ひととき心をうるおすだけと知りつつ……。」  
—『あごろ26号』巻頭詩より一部抜粋—

知り合って間もない女の人と、小さな集まりの打ち合わせをしていて「話す力」に話題が及んだ。どうしたらそんなに？と問われ、「前からこんなではなかった。だんだん言えるようになってきたの。思い切って言い、言うことでまた鍛えられ、して——」と答えたら、エエッと声に出して驚かれ、そのことでさらに私の中に呼びおこされるものがあつた。

ほんとうに言えなかった、言わなかった自分。モヤモヤと渦まくおもしろい、ピリリと感じとったことをきちんと表すには、いく重にも衣を脱ぎすてる勇気がいった……。けれど、思いきって言うことで、たしかに何かがゆらぎ、動いていった。その手応えに励まされて、私は道をたどってきたのではなかったか。

変わったんだな、私は。変わるといふこと——すばらしい。活動を始めてから十年という時を経た『あごろ26号』いま女がモノを言うということ』を読んでいたら、東京・練馬区婦人学級で、『あごろ』編集部斎

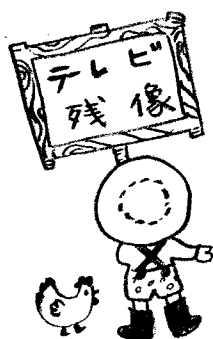
藤千代さんを講師に「話し下手からの解放」という講座に参加し、成長していった女の人たちの紹介が載っていた。その一人、神戸明美さんはこう書く。

「少しは話せるようになってみると、話せなかったのは、心が十分解放されていなかったのだと、はじめはとても理解できなかったことばが、胸に落ちるようになりました」「話を受けとめてくれる人がいる、聞く耳をもった人がいる、ということがいちばんの励みになるのね、というのが、いまの私たちの感想です。（略）話すことによって自分をみつめ、聞くことによって他人を知る訓練をもっともとしたい。」

神戸さんのみじかい文章には、どこにでもある女たち一人ひとりのの中に潜んでいる可能性、もっともつと伸びていきたい、という人間としてあたりまえの感性が光っている。そして、女がきちんとものを言うことによって、自分を、まわりを確実に変えていく道筋が示されている。その姿は、私や私のまわりの誰かれの姿にも通じていてまばゆく、うれしい。『あごろ26号』の見開き二頁の前にたちどまったひとときは、私に、女がみずからのことばを獲得していく過程、その支えとなる存在（卒直に批判しあえる、ほめあえる仲間）を改めて考えさせてくれた。

一九七二年以来、「共に生き共に考える女のひろば」として、各種の資料をはじめ論文、インタビュー、討論など豊富な情報を提供してきた『あごろ』に、さりげない日常を生きる女たちの姿がチラホラ見えるようになったことをよろこびたい。

『あごろ26号』いま女がモノを言うということ』BOC出版部・一、五〇〇円下160東京新宿区一の九の六、振替東京三三九三三一



下に、第二小山田特別養護老人ホームは創立された。  
入所している人の眼にこの専用施設はどう写っているのか。学校の講堂、工場、お寺などと思ひこんでいる人が多い。鉄筋コンクリート建、廊

訪ねてきた知人に近況を尋ねたり自分の生活を説明したりソツなく談笑していたおばあさんが、その直後「今ここに人が来ていたでしよう？」と尋ねられて、「そうですか、誰が来とってたかな」とハンナリ笑ったきり、「リンゴの唄」をうれしそうに唱和するのを見て、思わず涙が出た。

「人殺し！ 殺されるウ」と叫び続ける人、夜ごと徘徊する人、クズ箱ごとに丁寧に放尿して回る人……カメラは、昨年春、四日市市郊外に開所したボケの老人ホームの二四時間を映し出す。

ついに人格崩壊をもたらす老人性痴呆の原因は、医学的に十分に解明されておらず、有効な治療対策も確立していない。そのためにボケ老人（日本全国で推定五〇万人）を抱えた家庭——特に現実ではその看護を一身に背負わざるをえない主婦の肉体的疲労、精神的苦悩は計り知れない。看護人が共倒れになる悲劇も少なくない。このような状況をふまえて「ボケ老人にはそれにふさわしい独自の介護が必要だ」との主張の下に、第二小山田特別養護老人

下をはさんで番号順に並んでいる部屋、食堂は椅子にテーブルといった具合で、確かに明るく清潔だが、冷たさは否定できず、乱雑だやがわらかくぬくもりのある家庭的雰囲気は感じにくい。生活適応力が衰えている老人たちがなじめないのは当然で、入所直後は激しい異常行動を起こすというのは、人間的な不安や恐れ of 自然の現れだろう。だが、ここに働く寮母たちは忍耐強くやさしい。夜間は二人だけの担当になり、オモラシをした後のシート交換を含めかなりの重労働なのだが、全てを女性が担う（スタッフに医師以外は男性がいない様子。そのあり方には多いに疑問を感じた）。

手篤い看護にもかかわらず、老人たちの家族への愛着は強烈だ。嫁から来た年賀状をなでさすり、何回も読む和やかな表情、面会に来た孫をあやす満ち足りた笑顔、「かわいいねえ、よう肥えている。ベッピンさんだねえ」。愛情に満ち、心細さにうち震えている今は力を失った人間が幸せな時を過ごせるのはやはり自分の家庭だけなのか。別の可能性は全くないのか。この間に答える一つのシーンがあった。「私、お金をちっとも持っとらん」と不満を訴える一人に、もう一人が肩を抱くようにして、「そんでいいの。うちだつて持っとらん。一人だけじゃないの」と慰める。この二人はホームの中で新しい人間関係を紡いでいると思われた。

粗相して、「すまんね、ごめんね」とあやまる老人の小さな姿に、人間の誇りと深い悲しみを感じた。「二度童子」といっても決して子供ではない。もつとも人間的な感情は最後まで破壊されない」ということは、老人問題を考える際に忘れてはならないと思う。その意味でもボケとか痴呆とかいう言葉はなんとかならないものか（抵抗を覚えつつ私も乱発しているが）——『二度童子の館』NHK TV

## 銀輪のうた

### 私のボランティア考

ボランティアという言葉を見たり、聞いたる機会が、皆さん最近是非常に多いと思う。海外の難民キャンプに派遣される青年ボランティアが始まって、盲人のガイドヘルパーや、寝たきり老人の話し相手まで、そのニードは多種多様だ。ここ数年ボランティアという言葉や行為が、一種の流行のようになりつつある。特に子育てを終えた中年の主婦たちのボランティアが多い。

ボランティア活動は余暇を利用してやるものというように、どこか養成講座に行ってもそう教えている。私もまた最近までは、そう思っていた。しかし、それでは私たちやってもらう側の立場は一体どうなるのか。お金を払うアルバイトの形を取れば、ある程度時間の拘束はできるのだが、無料奉仕の形ではする人の意志で決まってしまうのだ。される側の要望は無視されても文句が言えない。

私の場合は、外出のときの介助を主に、ボランティアに頼んでいる。主婦代わりをして

### 栗原 実抄

かけている。年配のお手伝いさんが住み込みで二年以上働いてくれているが、朝は父の朝食の仕たくや、洗たく、そうじなどの用が立てこむので、私はそれにかち合わないように、いつも九時ごろに起きるのだ。大学のスクーリングがあるときは、朝七時前後に起きないと間に合わないのだ。近所の人を二、三時間頼んで、着がえや食事を手伝ってもらう。ところが、どういうわけか私の家の近くには、頼めるボランティアがあまりいないのだ。そうなるとうしろでも遠くの人に来てもらうことになってしまう。そして、同じ人に集中してしまい、ボランティアが息切れを起こしてトラブルが起きるようになるのだ。

障害者の外出は、健常者と違い時間どおりにはスムーズにいかないものだ。私たちも時間を守ることに気をつけなければならないが、ボランティアもまた、多少の余裕をもって来てもらいたい。ボランティアの中には、そういう時間の拘束がいやだとはっきり言う

いるので、買い物や銀行、はてはお盆、お彼岸などの墓まいりまで行かなければならず、一週間に三日以上は出

人もいる。大学を卒業したら、暇が取れないからできないと、はじめから割り切っている人もいる。しかし、ボランティアをすることですら私たちがかわり、そこから何か自分の生き方を見つけるヒントを得られると思うなら、ただ時間がないからと断わるのではなくて、何か他のよりよい方法を一緒に考えてほしいのだ。自分は体力がなくて、古切手の整理や点訳の方をやっているのだが、娘たちに手伝ってくれるかどうか聞いてみる、というような年配の主婦ボランティアを二、三人知ってれば、私たちはどんなにか心強いだろう。

もし、障害者の生活にかかわりたいと思ったり、車いすを押してみたいと思われる方は、左記にご連絡下さい。

112 東京都文京区白山 4-21-10

栗原 実抄

TEL 〇三一九四一―二〇六六



## 「K子さんちのね子たち」

ニセ父ちゃん「トラ」

さとう けいこ

トラはわが家の猫族の中では唯一の外来者だった。トラがわが家に来たのは、チー子が住みついてから半年あまりたった冬である。

その頃私はとある事件にまき込まれて、人間の心の闇の深さに暗澹とする日々であった。所用があつて池袋の駅近くを歩いていると、何だか足どりのおぼつかない猫

がネオンのつき始めた歓楽街の入口をうろうろしている。いつもの習慣で、私はネコに「どうしたんだい？」と声をかけてみた。

その時振り向いたトラの顔は、とてもまともに見られたものではなかった。眼はくずれてお岩さんの顔のようになり、耳も傷つき、前足は左が骨が見えるほど深くえぐれていた。尻尾にはくもの巢のようなススがつき、鼻がつまっていて息をする度に子どもの泣き声のような音がした。

「まあ……！」と言ったきり、私も二の句がつけなかった。お前もこの世に生まれてきた

うものを、こんな生き物の尊厳をはぎ取られたあわれな姿をさらすとは、猫ながら何たる不運！と思うと、あわれさに涙が落ちた。

かがみ込んだ私に、なぜか、その猫はアオ、アオと啼いて突然ひざの上に上がり込んで、動かない。「明日死ぬかも知れないネコだけれど、私の家に連れて行って死なせてあげよう、ネ？」

そういうと、私はあたりにあつたダンボール箱の中にトラを押し込んで山手線に乗り込んだ。何とトラは一言も啼かずわが家にやってきたのである。

今日死ぬか、明日死ぬか、などという私の心配をよそに、何とトラは三回の通院で回復してしまつた。病名は、トラホーム、鼻炎、かみ傷であつた。

チー子はトラの出現がおもしろくなかつた。私は二匹が家の中で顔を合わせないよう工夫してみたが、いつまでもゴマ化せるもの

ではない。そこで、チー子に、「トラちゃんは病気で、お家がないから、このお家に来てのよ」と言い聞かせた。

トラはしつけのゆき届いた元飼い猫で、たぶん発情期に遠出して家に帰れなかったのでは？と獣医さんは推測した。野良としてボス猫を勤めていたのに、キバが折れてその座を失つたらしい、とのことだった。

トラは五キロもある大きな猫なのに、わが身をよくわきまえて、決してチー子にも、チー子の子猫（ボス猫赤毛の子）にも逆つたことがなかった。

チー子の子猫が生まれてからは、ひたすら子猫のじゃれつくの逃げまわるばかりで、子猫に手をかけたことなど一度もなかった。もちろん、子猫が騒ぐのは大の苦手で、いつも渋い顔をしていたが。

しかし、子猫が大きくなり、近隣の野良猫におどかされるようになるや、トラは突然、虎のように馳け出し、子猫を守ってやったのである。いつもは不自由な足をひきずって歩いているのに……。トラはやはりわが家の父さん猫だつたと思う。

# 波

半田 たつ子

▼某月某日▲ 宮淑子さんは、刺激的なテーマを私につきつける人だ。彼女が本誌創刊号に寄せた「男たちよ！」には、共感・反感がどっと届いた。今月のテーマは、これに応える意味もあったのだ。

We の合宿で永畑道子さんが「子どもが私を支えてくれた」と洩らされた。私もまたわが子によって初めて親として育てられたと述べたところ、宮さんから「子どもを強調する」とは、産めない女、産まない女を差別しかない」と指摘された。その後も宮さんと話し合ううちに、「産む・産まぬ」のテーマが浮かんだ。来年は必ずこれを取り上げよう。

「家庭科」という教科名は、家庭をつくることを強制しているようで気に入らない。自立した人間を育てる視点から「生活科」にしたら、との意見もよく聞く。だが、「産まぬ」「家庭をつくらぬ」選択をした人にも親はあり、多くは家庭に生まれ、多くは家族によって育てられた。そのことによって現在がある以上、人間は、産まなくとも（男は産めない）、家庭をつくらなくとも、「はぐくむ」という問題を避けては通れない。

「産んだ」ことは自然現象だとしても、子をはぐくむ営みの中で、子どもから喜びと苦し

みを贈られた。そのことによって育てられ鍛えられた、という実感は、私にとって揺るぎないものだ。家庭・家族を解くカギの一つがこの辺りに隠されている、と私は思う。

▼某月某日▲ おめでとう！ハーコさま！ 門野晴子さんの『わが家の思春記』（現代書館刊）が届く。高三のわが家の娘が先に開いてあとがきの中の悦生君の手紙を声をあげて読む。予備校で聞けば聞くほどおもしろい授業に出会った悦生君が「高校の三年間、九年間の義務教育、あれはたして学校だったのだろうか！」と述べているところに痛く共鳴して、おもしろそう！ と叫ぶ。

取り上げてむさぼり読む。ハーコさまの歯切れよいタンカ。ユーモアがビチビチ跳ねる語り口。ハーコさま語でいえば「ヘントウセンまで見せて」笑っちゃう。でも、中身は痛烈な教育批判だ。

私には一種の感慨もある。門野親子とのつきあいは、智子ちゃんはまだ小学四年生の時に始まる。もう六年たったのか。私は彼女の文に閃光を見たが、晴子さんは少し気取って「娘の詩をいつか一冊にまとめるのが夢」などのたもつた。いまツイギーオカンは、ジャンボ娘とニキビヅラを後手にかばい、偏差値なるエンマ大王を、ハッタとにらんで自ら言う。「この時代、徹底した親バカになるのもラクでないという親バカの論理」と。この開き直りがさわやかだ。

▼某月某日▲ 俵萌子さんから『親は逃げられない』（サンケイ出版社刊）が贈られる。俵さんのホンネで記された教育論にはいつも励まされる。この新刊では「人はみな、生育歴を離れられない」がこたえた。俵さんと同じく、娘の勉強のデキにヤキモキする私には、教育ママだったお母様によって「一番病」に拍車のかかった少女

時代の体験から、俵さんはほんのちょっとひと頑張りすれば、誰でも一番になれる、一番になりたいはず、と思ひ込み、お嬢さんに「ほんのちょっとの努力」の仕方を教えようと試験勉強をみて上げる。首尾よく百点がとれた。しかし協子さんは、喜ぶどころか「もう、金輪際ママに勉強は見てもらいせんからねッ」と逆恨みし、「私、このくらしい成績が好きなのよ」と言った。俵さんは目からウロコの落ちる思いがし、名の知られた両親を持つ子の「何としまして、目立ちたくない、普通の子どもでいたい」思いを理解する。

俵さんに教えられた私は、「一番になりたいくない、目立ちたくない」心理があることを初めて理解したと娘に話す。「そうよ、やっ」とわかったの!」と言うと思いきや、娘は「それはやっぱ俵さんの子どもさんだからでしょうよ。ふつうは、目立ちたいし、できれば一番になりたいと思うんじゃない」と言い、私はまたわからなくなる。子どもって、ホントに難しくて面白い。俵さんの本では、「父でなければ出来ないこと」の章もよかった。「父のいない子育て」をひきうけた俵さんが拾い上げた「女親には出来ないこと」八か条は、なるほどと考えさせられるが、私には、その内容よりも、欠けている点を直視し、それを明らかにした上で、どう解決するかに取り組む発想と態度が快かった。欠けている点を見ないばかりか、指摘されると逆にムキになって抗弁し、現状肯定のための合理化理論を考え出すことが、私たちにはあまりにも多いと思うから。

▼某月某日▲ 新島淳良さんの『こども時評』今、どのように親になるか(『野草社刊』)は、すごい本だ。この本は、自費出版の形で昨年刊行されている。その時も衝撃を受けた。あとがきに「私はいま私塾をひらいて哲学を教えているが、哲学とはさしあたって身辺

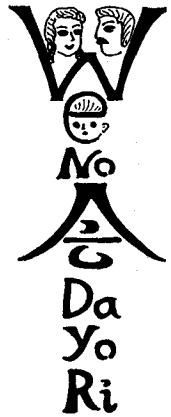
の現実におこったことを、自分自身になっとくのいくまで考えぬくことだとしている」とあった。私は、この言葉で、私のいままでが肯定されたやうでうれしく、一人合点で新島さんの弟子になった。今、その本に最近の文章を加え、谷川俊太郎さんの推薦文と美しい装幀で世に送られたのである。

谷川さんが「新島さんは今の日本に珍しい危険人物である」「矛盾にみちたいのちの暖かさに根ざしている」とはいえ、「おそろしい人」と評する。至言だ。第一、書いた新島さん自身「親が読んだら親がおこり、教師が読んだら教師がおこり、保母が読んだら保母がおこる、そういう本」で、自分が書いたとわかっていても、ちょっとギョッとする、というのだから。

新しく加えられた文章の中に、谷川俊太郎さんの絵本『おばあちゃん』に息をのむほどの緊迫感を持ったことが記されていた。九月十日の「女の自立と老い」のシンボで、谷川さんは「植物人間」となられたお母様について述べられた。その言葉は棘となって私のハートを刺した。新島さんの文章で、棘はそのままだが、周りの筋肉となじみ始めたような感じを持った。

魯迅によると、親には二種類あるという。子の親と、人間の親と。子の親は子どもを解放に手をかさない。人間の親は、自分たちを出発点として、次の世代の解放をやるうとするのだそう。人間の親として、次の世代の解放をはかるとは、どういうことなのか。よくはわからない。でも、それを自分に課すことが、家庭・家族をつきつめていく手がかりになるだろうとは思ふ。

宮さん、やっぱりあなたもママになって。子どもを育ててみて。



## 《We 埼玉の会より》

埼玉県所沢市周辺在住の読者会が十月三日(日)、中嶋里美氏宅で開かれました。前日までの雨もからりと晴れ上がり、心はずませ馳せ参じた者八名。早い者から順に肉まんあんまん作りにいそしみました。家事技術優秀(?)な者はかりなので、たちまち100個近い、美味栄養たっぷりの肉まんあんまんがテーブルにゆげをたて、ランチタイムとおしゃべりが同時開始となりました。食べながら聞き手、話し手となり共感、驚きの相づちや笑いにもぎやかに、家庭の話、夫の意識や、彼に家事を教える大変さ、学校の話、大学生の結婚観をめぐって、夢や幻想でなく現実をみつめ考えさせることを中学高校の家庭科でやるべきだとの意見も出ました。半田さんのジュエチャーたっぷりのぶりっ子の演技に拍手したり、優生保護法の話や、学校の管理体制のことなど、話題は尽きませんでした。結局す

べては「自立とは何か」に行きつくのです。

この集いにとってとりわけ印象的だったのは、二日前から中嶋氏宅に泊っておられたドイツ人(二十二歳、学生兼フリーランサー)ベルギットさんでした。彼女は八月二十三日来日、マイッチングマチ子先生の抗議にも一緒に行き、それから一人で一ヵ月余り日本各地を旅行して来られたのですが、その勇氣、感受性の鋭さ、まさに自立の化身を見る思いでした。日本人が概して個として生きていない面も見抜いていて、「キャラクターが乏しい」と評していました。ドイツ人男性は半分位が家事能力があるそうです。彼女のように一人で生きる訓練ができてこそ、豊かで手ごたえのある人生が自分のものとなるのですね。

今回は所沢周辺の人たちが集まりましたが、いずれは埼玉県全読者の会にも広がりたいと願っています。次回は中嶋氏宅(0429-427560)で十一月六日(土)二時からです。多数の参加を待ちしています。(前田敦子)

### Weの会カレンダー

- 11・6 埼玉 所沢 中嶋里美さん宅
  - 11・21 中野 中野区新井地域センター
- (二時~tel 3851-2293・増野)

## ひき続き “We” のご購入を

どれだけの方が読者になって下さるのか——創刊の時の不安と期待。いま、同じ思いで心が昂ぶります。

“We” は、おかげさまで9月には、当初の予定部数を越すことができました。発刊を、好意的に報道して下さったマスコミ関係の方の力も大きいのですが、何よりもまごころでご支援下さったあなたのおかげです。ありがとうございます。

“We” という名の炎をともし、強め、拡げていくのは、あなたであり、そして私たちです。いつかこの炎が荒野の枯草を焼きつくし、新しい芽が萌え出ることを願い、信じて、支援と連帯の輪を大きくして下さるよう、心から訴えます。

“We” 発刊時のアピール文を、祈りをこめて再びあなたにお届けします。私たちの願いとは裏腹に、日本の現実は当時よりいっそう憂うべき状況にあります。どうぞ、“We” と共に考え、行動するために、いつまでも仲間であって下さい。

二年目の“We” は、定価据置きで増頁し、男と女の自立を、差別のない人間らしい社会の構築を、生活と教育を私たちの手にとりもどす。“つぶて”としてがんばっていきます。“巻末の振替用紙をご利用の上、いままが二年目のご予約を！”  
あなたが仲間にごひお送りします。新しいチラシもお送りします。

# Watakushi kara Anatani

▼セントラルパーク

百万の女たち、男たちが  
反戦のうたをうたい、

サイモン&ガーファンクル

と五〇万のファンが

愛のうたをうたったところ

九月からわたしも

その公園の横の住人になり  
ます

晴れた日には

百五十万が残した余韻の中

で

わたしはわたしのうたを

うたってみます

フルブライト奨学生として

コロンビア大学大学院で

教育学を勉強することにな

りました

……

こんなご挨拶状を出しまし

たね。

ゆうべは「夜をとりもど

せ」行進に参加しました。

大声を出して、

「女よ団結しよう！ 女は負けな

いぞ！もうレイブはいやだ！」と

歩きました。三百人位いたかな？

行進の最後の集会には、全盲の女

性、難聴の女性、耳も目も不自由

な女性、エルサルバドルの女性な

どが通訳つきで発言しました。

Feminist Movement は、当然な

がら、白人だけのものではない、

ミドルクラスだけのものではない

と実感させられました。

(ニューヨーク 三井マリ子)

▼こんにちは。フェミニスト・セ

ラビイ門野晴子さんの門下生とし

て、児玉すみ子さんのカウンセリ

ング入門、いつもうんうんうなり

ながら熟読しています。

突然の交通事故で足の筋肉まで

切る傷を負い、生まれて初めての

病院生活をし、弱者の立場でもの

ごとをみる事ができました。色

々な苦痛を看護婦や医者に訴えて

も充分に私の気持が伝わらず、全

く逆の反応が次々に出て人間不信

より人間恐怖に陥りそうです。

医者「痛かったら痛いといいな

さい」私「痛い、痛い」医者「そ

んなに痛いんか」私愕然とする。

脳波テストの時、呼吸が乱れ、苦

しくなり止めてもらった。とんで

きた看護婦「あなたの顔色、くち

びるの色、脈搏から判断して苦し

い状態でない。そんなに苦しいの

なら注射でも打つ」私顔面そう白

「チアノーゼを起こすところまで

がまんしなければ私は助けを呼べ

ないのか」私心の中で（ここに

ては殺される！）。ここは新設の

個人病院。いずれ老人病院になる

とうわさされていて、ギリギリの

人数の看護婦でまかなっている。

看護婦に訴えても聞き流されるの

で、必要なことをメモして渡した

（全部、無視された）。病院を換

えなくては私の神経はメチャクチ

ヤになると思い、県立総合病院に

乗りこんだ。

ここでも、整形外科・脳外科・

内科と転々とする度に医者に訴え

るが、わかってもらえたのか不安

になる。私「傷口がまだ痛むし、

何よりも見苦しいのでガーゼをは

って下さい」看護婦はガーゼをは

ろうとするが医者は押しとめる。

私「足がむくみ、うずく、腰や背

中が痛いので湿布をはって下さ

い」医者「傷のあと、ある程度の

痛みはある。湿布は気休めだ」私

オロオロ。夫が私を励まそうと説

得しようとするはするほど、私は

苦しくなる。ロジャーズの「受容」

「理解的態度」の大切さ、まさに

その通りです。グチのようなメソ

メソした訴えでも、まず、じっと

フムフムと聞いてもらえた時の安

心感。そこから、おのずと病人の

心ははぐれる。身をもって体験し

ています。

(奈良 岸幸子)

▼We相模原の会で「知識」の問題

が出ましたが、これはヨーロッパ

の教育社会学が取り組んでいる、

きわめて難しい問題のようです。

私としては、なぜ「知識」が必要



いと思うし、その必要さを庭科を通して教育の仕事に携って  
だれがどこで決めるのかという姿勢、絶えず持ち続け  
いうことを聞いかけたいというものです。生徒から学ぶこと  
思います。「知識」が、客も多いし、生徒とふれ合うことに  
観的・絶対的に外部に喜びを感じつつ働いております。

(鳥取 大森一恵)

仰の内実なのだと思います。▼今日、うちの区内で0歳保育園  
です。ですから相模原の会で(無認可)をやっている人が二人  
出た問題は、「知識」とか急に訪ねてきました。一番お金の  
「真実」とかと、それを教かか0歳児保育の建物を建てる  
育する」こと、とが含む問よりは、月額十分の一ですむ家庭  
題の難しさを教えてくれて 福祉員を増員して、施設費を減ら  
いるように思います。そうとする動きがあるようです。

(神奈川 長谷川孝)

◆We 読んでいます。慣れる 十歳以上三人と、もうすぐ六十歳  
までは、少々しんどい本になる私共の身分保証よりも、区  
思うこともありました。特役所の意のままになる若返り増員  
にカウンセリング入門楽し 計画がいつのまにか進められてい  
みに読んでおります。この ようで、何だか「はみ出させら  
三年間多少かわって来た れそうな」予感がしてきました。  
仕事でもありますので、大 都内でも福祉政策の最も貧しい区  
変ありがたく読ませてもら で、残り少ない人生を生きて行く  
っています。としたら、今から子供を育てる若

「私が望む家庭科教師」も い親たちに、少しは知恵と手を貸  
おもしろく読みました。家 せる「となりのバアちゃん」にな

るしかないのです。

オトトイ、又しても「四か月の  
子を預かってくれるなら働こうか  
なあと」思つて」という若い母親か  
らデンワがきました。「イクラで  
預かってもらえるか聞いてから仕  
事捜します」と言うので「ハナシ  
はあべこべでしょ。預かるかどう  
かお目にかかってからキメます。  
ご夫婦でおいで下さい」と言つた  
ら来ませんでした。彼女の説明が  
ふざけています。「赤ん坊、生ん  
でみたら案外お金かかるんですよ  
ネー。やっぱり働かないとやって  
いけないミ、タイだから」

私、忽ちイジワルバアさんに変  
身。「生んでみなくたってお金か  
かりますよ。生きてりや、ペット  
だって餌代かかるでしょ」。かかっ  
てユーウツなのは金じゃなく、手  
なではないか、とビンと来まし  
た。こういう人に限つて、熱があ  
つて下痢しても連れてくるんで  
す。きっと、爪を赤くしてハイヒ  
ールをはいて連れてきます。こう

いう親ザラにいます。こうい  
う親に区役所はひとことの説明も  
なく、私共に話をまわすのです。

(東京 武末久子)

▼十月号、表紙・カット・見出し  
が新鮮に衣がえして、オヤッ  
という感じでした。発言の欄に登  
場する方、その層が広がるにつれ、  
Weの内容も厚みを増しているよう  
に思われます。Weを手渡した方  
の中に、私も書いてみようか！と  
いう気持ちを起こされた方があ  
り、書いてみて、と励ましていま  
す。

(鹿児島 横山雅子)

▼We とてもすてきな雑誌ですね。  
特に、半田先生の文章がすてきで  
す。このように、深く生に根ざす  
いろいろな家庭科の実践がなされ  
ていることに驚きと喜びを感じま  
した。うちの子供たちは、男の子  
(小五)も女の子(中一、三)も  
家庭科が大好きです。でも初めの  
期待の方がもっと大きかったよう  
です。「家庭科こそすべての科目  
の中心」と。(東京 曾田蘆子)

# ・あ・ん・て・な・

## ★進む核家族化—国連報告★

核家族化や離婚などによる家庭の崩壊現象は世界的に広がり、家庭に対する意識も世界の人々の間で“革命的”に変化していることが、国連が10月7日、37回総会に提出した世界社会情勢報告から分かった。同報告は3年に1度国連本部事務局がまとめて発表している“世界市民の生活白書”。

家族の構成員数は'80年で先進国3.1人（'65年3.5人）発展途上国5人（同5.2）、世界全体で4.3人（同4.5）と減少傾向。20世紀末には核家族化がさらに進行し、先進国2.6人、途上国4.1、全体3.7となる見通し。

核家族化進行の理由に報告は①生活条件の向上②出生率の低下③離婚や未婚の母の出産による片親の増加——をあげている。

初婚後離婚する人は発展途上国でも激増。中南米では国により20～80%、アフリカ都市部では25%、アジアでもインドネシア36%、バングラデシュ21%、タイ18%。

婚姻外出産は、先進国で出産全体の10～17%。又、結婚前の同居が増える傾向。

世界全体の平均寿命は58歳（先進国72歳途上国55歳）で、この30年間で10歳もの伸び。特に途上国の伸びが13歳と先進国の7歳より大きく、人口の老齢化が世界的傾向。（朝日、毎日、10・9付）

## ★勤労者の家族意識調査★

労働省は10月16日、サラリーマンの結婚や家族に関する意識調査をまとめた。

サラリーマンとその妻の結婚観や家族意識が性別、年齢などよりどのように変わるかを調べるため、昨年9月現在で実施。対象は全国の20～40代の男女計1300人で、①20代の未婚男子勤労者②同女子勤労者③既婚男子勤労者④同女子勤労者⑤既婚無職女子の5グループ。

＜結婚観＞「結婚という形式にとらわれずセックスも子供を生むことも自由にした方がよい」という考え方には各グループとも「あまり共鳴できない」がトップ。だが、「まったく反対」は既婚者グループ3～4割に対し、未婚者グループは1割台。

未婚者グループでは「特に結婚したいと思わない」「生涯結婚する気はない」が男

3%、女7%。結婚年齢のメドは男の場合、28歳が33%、30歳28%、女の場合、25歳31.5%。23歳15%。「結婚したいが年齢にこだわらない」男21.5%、女27.5%。

＜離婚観＞「結婚しても相手に満足できないときは、離婚してもよい」という考え方にに対し、どのグループも「あまり共鳴できない」「まったく反対」が6～7割。子供がいる男女、既婚の40代は否定的傾向がさらに強い。一方、「共鳴できる」は未婚女性グループ11%で他グループ（4.5～2%）を大きく離している。

＜子供＞家庭生活の中での子供の存在について、各グループとも「家庭を楽しめるもの」が3～4割でトップ。次いで未婚グループは男女とも「夫婦を強く結びつけているもの」、既婚グループは「家庭のイメージになくってはならない存在」。

＜人工中絶＞「よいとは思わないが仕方がない」が半数を占める。勤労男性は年代が高くなるほど否定的で、肯定派は30代に多い。（朝日、毎日、10・17付）

## ★社会生活基本調査—総理府★

総理府は10月11日、1日の生活時間の配分、自由時間の使い方を調べた第2回「社会生活基本調査」結果（速報）を発表した（第1回は'76年）。昨年10月初旬、全国の8万世帯の15歳以上の男女約21万人を対象に実施。

1日の生活時間の配分—睡眠・食事などは男女とも10時間44分、仕事・家事、育児などは男7時間43分、女8時間1分。余暇時間は男5時間30分、女5時間15分。

仕事・家事に費やされる時間を曜日別にみると平日は男が女より11分長い、土、日曜は逆に女がそれぞれ37分、2時間10分長い。これは、家事、育児が曜日によっても差があまりないための時間差。

又、有職者の仕事・家事時間は男8時間26分、女9時間33分と差は広がる。中でも40代では男8時間40分に対し、女10時間14分。男はそのほとんどが仕事と通勤時間だが、女では家事、育児、買い物の時間が加わるため、同じ40代の主婦（無職）に比べ3時間以上も自由時間を削られている。

余暇時間の使い方では、1年間で何らかの学習活動をした人は45%。20代前半で女（64%）が男（58%）を上回る。この年代をピークに学習した人は減り始め、男女差も広がる。（毎日、10・21付）

# 十字路

新潟・へき地医療のあり方を模索

津川町

県衛生部主催の東蒲原地区へき地医療確保セミナーがへき地の医療活動をいかに住民に見合つたものにしていくかを求めて、県当局と自治体、へき地医療従事者、住民らの参加で開かれた。意見発表では保健婦の斎藤貞子さんが交通の不便な山間地に点在する部落を少人数で巡回する難しさを訴えた。歯科医師皆川陽子さんは、共働きのため子育てを祖母に任せ、一歳半で全部が虫歯になった例を示したり、小中学生の虫歯が多いことをあげ幼児から親まで一貫した口腔衛生教育の必要を述べた。(新潟日報、9・20、山口久子)

埼玉・県民の声聴け―県情報公開条例案

「埼玉県下の自治体に情報公開条例を求める市民集会」の参加者有志が二日、県に対し情報公開条例案に県民の意見を反映させるため十二月議会提案を一時見合わせ、その間、より広い県民の声を聴く機会を設けるよう要望書を出した。角南俊輔弁護士は「神奈川県では県内四カ所で開催の意見を聴く集会を開いているが本県は一度もなく、全くの行政主導

型。非公開項目が拡大解釈される恐れがある。と述べ、「対象となる情報の範囲」「非公開項目の設定」「実施機関の範囲」「救済制度」などの点で問題があると、この要望となつた。(読売、10・4、村上悦子)

千葉・浄化へ住民ぐるみシンポ 18日

全国の湖沼で汚染度ワースト1の手賀沼の汚濁進行に歯止めを」と県は専門家だけでなく主婦、子供を含む住民ぐるみのシンポジウムを開く。五十六年度COD平均値一八・二二ppm、前年度一七・二三ppmでともにワースト1。住民側では和田三千代、消費者の会長が粉せっけん普及運動の立場から、我孫子第一小六年の寺田勉君が子供の目から見た汚染ぶりの印象を、星野七郎さんが農業従事者の立場から訴える。(毎日、9・5)

高齢者福祉に反対 お年寄りが集会

高齢者の生活を守る会県連絡会議(木村俊子会長)と県労連(井原完輔議長)は九日午後、県労働者福祉センターで、七十歳以上の医療費の一部を患者負担にする老人保健法の成立など、最近目立ってきた高齢者の福祉に迫る動きに反対し「9・15高齢者県集会」を開いた。約百人のお年寄りが出席して「社会保障の思想に逆行する政策に反対し、明るい

社会の建設をめざして闘う」との決議を採択した。(朝日、9・10)

戦争もつと学ぼう 文化祭テーマ

高校の文化祭が音楽、アニメ、喫茶中心になつていく中で県立柏南高では一年六組が、同校生のアンケート、自衛艦の試乗、航空基地訪問を体験し「戦争」をとりあげた。アンケートでは△自衛隊の存在を認める74%、憲法違反である39%△自衛隊を今後現状維持38%、縮少か消滅32%、増強30%△侵略された場合逃げる36%、武器以外のもの抵抗31%武器を持って抵抗23%、服従10%△安保が「より平和的になる」6%、柏南高では六月、三十歳以下の現代社会の教師に代わって戦争体験者の斎藤周一校長が一年生八クラスに特別授業をした。(朝日、9・22、奥田曉子)

神奈川・よこはま婦人問題フォーラム

婦人問題解決のための資料作りや婦人の交流を兼ねた「よこはま婦人問題フォーラム」の日程が決まった。このフォーラムの討論内容は最終的には、細郷横浜市長の諮問機関「婦人問題懇話会」の「婦人の行動計画」に資料として取り入れられる。入場自由。会場、日程など詳しくは同市企画財政局企画調整室(六七一一二〇一六)へ

(朝日、10・19、皆川鎮校)  
愛知・すし詰め学級反対

六十三年まで急増、その後は急減する高校生に対し、県教委は「すし詰め学級」や講師で乗り切る方針を立てている。来年度から現行四十五人の学級定員を四十七人に増やし、新設校を抑制する。愛高教と名高教は「教育の質を低下させるものだ」と十七日午後、撤回を求める合同決起集会を開き、「県教委の方針は財政の論理だけで教育の論理ではない」「現場の教師に全く相談もしないで重大なことを決めるのは問題だ」と愛高教委員長、学校建設室長に迫った。(中日、9・18)

健康優良児を水着審査

半田市の健康優良児童生徒の最終審査で、代表の中学三年、小学六年の女子計十五人が水着姿で審査員の面接を受けていた。約二十年前から続いている審査法というが、今回参加した女生徒たちが「恥ずかしくて嫌だった」と証言、親や教師の間でも見直しを求める声が出ている。県学校保健会によると、県健康優良児童審査(小六対象)では男女とも半そでシャツに短パンという体育時の服装。

市学校保健会長は「背骨の曲がり、全体のバランスを見るために必要だが、子供の側か

ら批判があれば検討したい」と述べた。

(中日、9・25、山田和枝)  
京都・学者ら「考える会」

教科書問題を政治決着だけで終わらせてはならない「教科書は学問の根幹。原点に帰って私たちも学び直さねば」と京都在住の学者を中心に「考える会」が発足した。足もとで起きている学問と教育の荒廃を見過ごしてきただ反省を原点に、事態を見つめるこの動きは、鶴見俊輔、飯沼二郎、和田洋一、井上清氏ら二十数人がメンバー。一回目の八月二十九日は、密室で行われている検定の様子―書き直しの実態を報告。二回目の十九日は「現実からみた教科書問題」。次回は「中国・朝鮮問題と教科書」。(朝日、9・23)

高校三原則見直し

府教委の川本邵教育長は三十日、市町村教育委員長、教育長合同研修会で「教育行政の当面する課題」と題し、高校三原則見直しの立場をあらためて表明した。(朝日、8・31)

高校三原則守ろう 卒業生の会

「ボクたちが育った『三原則』を守らなければ」と京都の公立高校卒業生十人余が集まった。「三原則の中でも小学区制が今秋にも崩される危険がある。学校間格差が京都にも持

ち込まれる」と。準備会の連絡先は京都市左京区丸太町新道上ル、教育会館内都木辰夫(七五一―一六四五)(朝日、9・27)

学校行事の国旗掲揚率

府議会で山本直彦議員(自民)が「国旗掲揚、国歌斉唱の指導を強めるべきだ」とたたしたのに対し、府教委の川本教育長は「小、中学校での掲揚率約30%、国歌の指導34%」と報告した(教頭研修会時の京都市外のデータ)。府教委では全国最低レベルとみ、府下の市町村議会には去年初めから積極的に取り上げるべきだとする請願が相次ぎ、京都教職員組合は「学校教育への介入」と逆請願、大きな論議に発展した。(朝日、9・30、塚崎美和子)

鳥取・女性差別と賠償訴訟

退職勧奨を拒否したため不当な配転を受け退職金支給でも差別されたとして、元小学校教諭前田藤子さんが鳥取県を相手取り七百万円の損害賠償を求める訴えをした。教諭の男女差別で退職勧奨をめぐる法廷闘争に持ち込んだケースは全国初。同県の退職勧奨や退職金の支払いで、男女間に差別措置があるのは、法の下で平等を定めた憲法や、地方公務員法などの趣旨に反し、人権の侵害であるとしている。(中国、9・26、国重美恵子)



◆半田先生は主婦の再就職についての講演で私のことを話されたそうです。私は回り道をしてここにきました。いったんぬるま湯につかってしまうと海峡を泳ぎ渡るなどという勇氣はなくなってしまうのです。

◆なまけていた自分を知っているだけに主婦たちは自信をなくしているでしょう。その自信を回復するために訓練機関を利用するなり、助走期間を見込んで採用してもらうなりしない、契約が成立しても途中でやめざるを得なくなってしまう。

◆このことは家事労働をどう処理するかより大きな問題だと思う。働くことに意義を見つけ、収入があるとなれば夫も子供も変わっていくだろう(樂觀的な)。

私はただ今助走中。(中野)

◆日本性教育協会主催「優生保護法改正は是か否か」で丸木百合子さんが指摘した。「経済的理由の削除により、未婚女性の出産が増えれば今の社会状況下で生まれた子供があらゆる場で差別されかねない。就職の場も得にくく、安い労働力をつくり出すだろう」。

「優生」という言葉の検討が同時になされなければならぬが、今、差別を生産し兼ねない優生保護法の改正には反対する。

◆10月29日は備ウイ書房を登記して一年目。Weのお仲間と、野山をかげめぐり、新たなエネルギーを補充しよう、という余裕もチャッピリできました。

△11月号の左記の部分を訂正し、おわび申し上げます。

3頁下段14行目、企業生産↓分業生産V (馬場)

♥横浜局の消印で、二千五百円のお金とともに次のお便りをいただきました。障害を持つ方ではないかと思うのです。ちょうど十一月号発送の直前。お茶菓子を買わせていただきました。名前を名乗られないその方にここで「ありがとう!」を申し上げます。先号のWeは、こういう方に支えられて、お手許に届きました。

ゼンリヤク/ワタクシモ ツキ イツカイグライ100 ツウホドノハッソウヲシテ マス トテモタイヘン000 ニントワソウゾウモ デキマセン ゴクロウサン/ヒ マナイノデ イケマセン ドウフウノ オカネ オチ ヤガシナイニシテクダサイ フー ツカレタ

♥新年号のテーマは「男と女の新しいかわり」です。お楽しみに。(半田)



## の告知板

▼本号刊行後すぐの11月20日の催し三つ。神奈川・東京の読者の方へ①江の島にできた神奈川県立婦人総合センターのオープン行事の一つとして、「公開討論会—男の本音へ男性の意識調査から」が午後2:00~4:30まで開かれる。We神奈川の会も討論に参加。②We城北の会は、北区十条出張所で2:00から③映画「声なき叫び」の上映会、武蔵野公会堂1:30から上映後、宮淑

子氏の講演会、託児あり、当日券700円、連絡先0423・38・1773

▼ひき続き、2年目のWeを読んで下さいWeの仲間をふやして下さい。'82年4月号から、定価据置きのまま増頁します。これは大変な冒険ですが、あえて踏み切ります。ここに繰り込んだ振替用紙をご利用の上、直ちに継続手続きを、おとり下さい。厳しいご注文もお願いします。

新しい家庭科—

発行所/(有)ウイ書房

Vol.1 No.8 1982年11月20日発行  
¥500 (年間購読料 ¥5,000)  
編集兼発行人/半田たつ子

〒182 東京都調布市西つじヶ丘2-25-14  
☎03(326)1380 振替東京6—59867  
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

**引き続きWeの仲間になって下さい**  
**Weの仲間をふやして下さい**

“4000人の固定読者の方に核になっていた  
 だこう” We出発に際しての悲願は、9月に  
 達成できました。編集室の戸棚には皆さんの  
 の振替のファイルが2段に並んでいます。  
 そこに置かれただるまに、両目が入りまし  
 た。どうもありがとうございます。

〈書店各位へ〉地方・小出版流通センターに窓口を開いておりますので、ご注文の時はご利用下さい。

Weはいま、2年目に向けての準備を進  
 めています。定価はこのままで増頁し、より  
 フレッシュで、あなたの心に深く食い込む  
 雑誌を志しています。どうぞ、引き続きWe  
 の仲間であって下さいますように。最後の  
 頁に振替用紙を綴じ込みました。ご利用下  
 さい。また、あなたのお友達にも、ぜひお  
 すすめ下さいますように。あなたのお力添  
 えを、心からお願ひいたします。

——Weの取り扱い店一覧—— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい

(10月20日現在)

旭 川 富貴堂	〈葛 飾〉 宏精堂	福 井 吉川陵文堂
盛 岡 東山堂	〈世田谷〉 やまべ書店	山本書店
仙 台 こどもの本のみせブーの家	〈三 鷹〉 第九書房	春江書店
八重洲書房	〈小金井〉 渡辺書店	品川書店
ボラン	〈府 中〉 国府書店	岐 阜 宝島
萩書房	〈国 立〉 東海書店	奈 良 海老山書店
泉 ホビット館	〈小 平〉 和中書店	大 阪 旭屋書店本店
秋 田 加賀屋書店	〈八王子〉 くまざわ南口	ユーゴー書店
福 島 岩瀬書店	〈清 瀬〉 マルオカ書店	増田書店
西沢書店	〈高 尾〉 啓文堂高尾駅前店	西坂書店
群 山 十字屋書店 大月店	川 崎 北野書店	京 都 松香堂書店
藤 岡 川島朝日堂	横 浜 有文堂	宇 治 大久保京都書院
結 城 太陽堂	有隣堂	長 岡 京 恵文社神足店
水 戸 ツルヤブックセンター	相 模 原 ブックス上溝	神 戸 幾久書店
浦 和 須原屋	鎌 倉 たらば書店	尼 崎 宣文堂書房
岩瀬書店	相模大野 相模書店	米 子 今井MC本店
船 橋 前原かっぱ	藤 沢 豊元書店	広 島 やまびこ書店
東 松 山 比企文化社	藤 岡 百町森書店	山 口 白藤書店
浦 安 原勝書店	浜 松 中田島書店	松 山 去来社
東 京 蔭書店	一 宮 文正堂書店	北 九 州 北九州書店
〈千代田〉 ピッピ	名 古 屋 ウニタ書店	熊 本 高校生協
日成堂	江 南 青雲堂	三章文庫
書肆アクセス	新 潟 栗山書店	紀伊國屋書店 札幌、新潟、新宿、
三省堂本店	白石書店	渋谷、玉川、住友、吉祥寺、川
〈文 京〉 鈴木書店	小 千 谷 島谷書店	越、船橋、梅田、岡山、広島、
〈新 宿〉 模索舎	金 沢 白山書店	松山、福岡、熊本
ブックスミヤ	うつのみや	大学生協
三省堂新宿西口店	セールスセンター	畜産大学、福島大学、新潟大学、
〈杉 並〉 柏木堂書店	富 山 清明堂書店	群馬大学、宇都宮大学、日本女子
木風舎	岡 谷 笠原書店	大学、東京大学、愛知教育大学、
信愛書店	福 井 ひまわり書店	金沢大学、立命館大学、宮崎大学、
プラサード書店	じっぷじっぷ	高知大学